峨眉之山高峰軼雲降生先生
英偉超群洞曉天地殫極鬼神
條理之説數十萬言闡發幽顯
以覺斯民屢辭聘命抗志守玄
遺像肅然想見其人

梅園先生肖像之賛萬里先生撰
後學 麻識



中津片山東籬の寫した肖像を門人賀來太庵の玄易をして修正せしめた肖像（本文二五八頁參照）

及川藏書

小野精一著

# 三浦梅園書簡集

第一書房

# 凡例

一、本書は三浦梅園先生の書簡凡そ百九十通、及び先生の長男修齡先生の書簡三十通を收載したものである。

一、本書に於ては書簡の用字、假名遣は全く原本の儘に從ふが、但し便宜のために變體假名は普通平假名に改め、返點を附して置いた。

一、書簡の謄寫に當つて、誤讀誤寫のないやう、大いに努めたが、萬一の誤謬なきを保し難い。

一、本書には書簡の所藏者も明記しておいたが、採集後に變動したところもあらう。

一、註や難語に解說を附したものもある、讀者の便に供せん爲めである

## 喜助宛



## 五郎右衞門宛





## 田坂宗三郎宛



## 脇儀一郎宛



## 三浦修齡 永松壽助 宛



## 八坂彌一郎宛



## 岡松數右衞門宛

## 人間三浦梅園

渡邊氏藏

四日市町渡邊次郎兵衞（玄碩）が天文に關し質問せしに答へたる返書數通中の一（本文三頁及び六頁參照）

# 渡邊次郎兵衛宛

## 阿蘭陀圖に天球地球御座候（渡邊功氏藏）

御使札披緘　溽濡之節御座候得共　德門愈御壯盛御入被成珍重不ㇾ過ㇾ之奉ㇾ存候　野老無ㇾ恙罷過候　御念想被下間敷候　誠仲春之頃者　大勢參上候に御丁寧　猶歸路をも御待被下候段　忝奉ㇾ存候　御近邊をも通候得とも　御立寄申候得者　いつれ御留被成候故　乘打仕候御免可被下候

御尊父様（尊父とは綱任といふ、後項參照）にも何分宜敷奉ㇾ願候

一、星圖

一、怪異辨談

一、天學摘要

御返却落手仕候

一、御尋申候節御物語申候　拙著遣候樣に被仰下候得共覺不申候　梅園讀法　答墨卿書　懸御目候且星圖名落候分御尋被下候得とも　御存知之通之近視中、小星目に障きり不申候　天經惑問註解進候　是にて御引合せ御覽可被成候

一、菊池加藤御狀便之節　相屆可被下候

一、阿蘭陀圖ニ天球地球御座候　細工窮精巧候　小金にては手に入申物にはなく候　拙ことき貧兒の手に合不申候　何卒そろ〳〵御心懸け御求被成候而者如何と奉存候　尤買賣には無之物ニ御座候　此天球御座候得者　星圖もよく正敷相ミへ申候　又日之圖　月之圖御座候　是者格別之金ニハ至るまし九候　何卒御心懸可被成候　是等も通事たのみ　阿蘭陀へ不申遣候而者無之物ともに御座候

一、千一大坂とも御出御座候者　麻田剛立と申仁　御尋可被成候　此方にて綾部璋庵と申候　是者天學推步には至而委敷御座候　拙者は中々問を受候樣の事ハ出來不申候　若御望も御座候者從是御引合をも可仕候

一、拙者天文推步一向不案内に御座候　拙者於天地而一得有之候處ハ答墨卿書とくと御覽被成候得者相わかり申候

一、御來訪之御志も御座候へとも御多事　御心組も出來兼候段御尤千萬之御義奉存候



一、日月行度章　申盡しがたく御座候　もめん車をまはし候に外輪は廣く　内軸はせまく候得とも回る事はひとしく御座候　度數




右之通に御座候　さて天も三百六十五度といふ物は本來天にあるものにてはなく候　はかる人度をたて不申候得者わかり不申候故　目やすに拵候物にて御座候　此處よく御合點可被成候　それゆへ唐にてハ三百六十五度四分度に候とたて申候　西洋にては三百六十とたて申候

一、一地球違ひつ。たる處　五十刻にて御座候　刻五十刻　度數にて百八十二度餘也

一、北極星ハ四軸の中にあり　北極軸之處には星ハなく候

一、予先年綾部璋庵にきけり　一度三十六丁　里にて廿里には足まじき由也　近年者定而密算あるへく候不承候　先三十六丁道廿里とみて　是を三百六十五度二分五厘にかけ候得者大抵わかり申候　地は至てほそきものに御座候

一、蟠蛛水火等の說とるにたらす候　すへて五行といふものは　周季に起りし學問にて大に正理を害するものに御座候

一、配當といふものすへて無理にて御座候

一、五星之名楞嚴經なとに出候も　木火土金水と號し候得とも　是ハ飜譯之時の事と被存候　西洋の說は別に御座候　長崎にて承候分かきつけ歸り申候　拙著歸山錄と申內にしるし置候　乍去是も配當有之候　此處ハ面白からす候

右相考不申　艸々に書進申候　是ハ老懶とて　あとよりと申事　出來かね候故如此御座候　得二餘暇一候て緩々御來遊をも待ち候而可申上候　近日肩痛申候而あら〳〵申述候　御免可被下候

恐惶謹言

五月九日　　三浦安貞

渡邊次郎兵衛樣

## 星象は自測得るを主と致候（渡邊功氏藏）

尙々日田狀一通奉賴候已上

一筆致啓上候　霜露御平安御凌被成　珍重奉存候　拙老無二事故一消居諸候　然者研匣之銘　扨々遲漫恐入候　漸拙文出來候故　先一通懸二御目一候　思召に相叶不申候處も有之候者　重而吟味可仕候　表養老二字之義　御存之通之惡筆此義者又　他筆勤候衆へ被仰付可然奉存候　何分御斷申上候　裏銘重疊相極り候處も如何敷候へ者先紙に印申候　いつれ御試も被成候者　其上に書候も可然候　木地には不圖　筆誤も出來候節難謀奉存候　是者珍敷木に候得者願くは御ぬり被成候而者如何　何れ硯御入被成候處ハ　其儘にては御用立申間敷候　夫とも同木地に御望に御座候者相應に大工へ白ヶ御引を可被下樣奉願候　右之段足下迄得（トクト）申上候　何分宜敷奉願候　外ニ一枚句讀入候者下書に御座候　足下方へ御扣置可被成　養老より今迄御書付と年數違申候得者　是者此方ニて重疊吟味仕候　左樣思召可被下候

一、去年之御問遲滯其後物こと疎懶久敷打置候得共　答を早々殊には不案內　只存寄書付申候　御取捨者賢慮に過間敷　猶又有識に御問可被成候　別紙申進候　星之義者拙不眼にて分り不申候　何れ星象を天學家にても自測得るを以て主と致候　且古き圖ハ星象南北の相違者　天行によつて出來候　黑星ハみへてもミへ不申ても可有之候　六等に分ち候小星をすへて申事に候。

一、鍾馗之贊惡筆恐入候　殊不出來如何敷御座候得共　命拒かたく　相調進候　御入掌可被下候

一、敢語御落手と奉存候

一、養伯又々他出　扨々氣之毒成事に御座候　如何其後模樣ハつき不申候や　先者用事のみ早々申遣候　皆々樣ニ可然　自レ是も宜敷申上候　恐惶謹言

十月廿九日　　三浦安貞

晋（花押）

渡邊次郎兵衛様

梧右

## 大坂本一部進め候御落手被下候や（渡邊功氏藏）

御遠々敷罷過候　御渾家御多福秋暑御凌被成奉珍重候　山中無異事與白雲親み申候　御懸想被下間敷候　然者此仁豊田禎藏と申拙縁類之者ニ御座候　當時牢浪面目一見罷越候　近比乍御面倒御見知被置　往來日暮風雨にも及候節者　御一宿をも御許被下候様奉希候　決而御心遣にも及候様成者にては無御座候　宜敷奉願候　様子者此仁ニ御聞可被下候　且又先頃之硯箱畫賛未講思不仕候御免可被下候　此内自大坂本下り候故　敢語一部進之候　如何御落手被下候やと奉存候　青柳元龍も當春　肥熊本ニ遊學　自レ夫筑前ニ負レ笈　今月者歸鄉可致と申來候　歸途様子により　御見舞も可申上候　萬々申殘候　御尊父様にも可然奉願候　恐惶謹言

八月八日　　三浦安貞晋

渡邊次郎兵衛様

拜復

## 六鄕山延力寺とは（渡邊功氏藏）

寒冷御平安可被成御入奉珍重候　拙無異事罷過候　然者此間は禎藏投宿彼是御世話罷成　忝奉存候　以來ともに御慈愍奉願候　且中津より小倉迄之間　拙心安處無御座候　貴君御親戚様ニ御狀御添可被下由忝　當時牢浪之身分ニ御座候得者　道中之才覺も出來かね候義　是又可然奉願候　且又此內御狀研匣之銘被仰下候處　最早此方發申候故不及卽答候　禎藏へ右之點ニ付可遣由　左之通申入候

豐之國東（サキ）○　むかしはさきに崎之字用候得共　三齋公已來東之字用候

一、郡六鄕　一郡中ニ六鄕と申候得共　武藏鄕安岐鄕　國崎（クニサキ）鄕來繩鄕　田染ヲ鄕とも申候　左様ニや分明ならす五鄕一鄕ハはやみ内山香鄕いり申候得とも大圖ヲ申候

山龍ニ蟠二于其間一焉　龍の如く六鄕の間にわたかまるなり　峰々或面（ムカヒアイテ）而起（タチ）　流々多背（ウシロアハセニナリテナカル）而走

巃嵸（ロウショウ）然而邃（トシテフカシ）焉　山之氣内ふかみたる也

昔養老戊午有ニ緇徒（シト）（佛子）人聞（ナル）者一　大闢ニ金仙窟（ヒテキンセンクツ）（ホトケノハヤ）於レ此　曰ニ延力（リキ）寺一

六鄕山延力寺といふは、國東中ノ寺號山號にして、東塔西塔横川にかけて、比叡山延曆寺といふ様なるものなり。

盞蔓延一百餘區……延力寺の内に兩子寺ヂヤ、文珠ヂヤナド、廢寺小堂かた／＼百八十餘カ所あり

逮今天明壬寅相去一千六十有五年　以久矣　鎮西郡官使日高鎮臺　揖斐君佐　高原君得其故柱於馬城里之練若、爲研匣　研硯同し

以充文房之雅賞　其理順而澤　其質堅而緻

愛護得處

大事に守護する事　圖に入らば也

豈恨其往焉哉　銘曰　俯就繩墨

木は心ましにゆかみ　ねぢれてふとれともスミカネを受る也

仰撐棟梁

すみかねを以て大事のむなぎをもちて家をたもつ

引重致遠

此箱チヒサケレトモ　オモキ石ヲいれて猶數千年もつ

率此舊章

舊章ハ俯してすみかねにつくや此はこ大事あぶなき處におかす取おとさず手入よければ幾千年



もたもつなり　高原氏も天下の御手つたへ　天下のひろきより見れは硯箱ほとの事なり　此硯箱大事になされしも　おもきをひき遠きに致す　此一縣を御たもち被成候もおもきを引　遠きにいたす只繩墨につく事に候

右子細らしくも思召へく候得共　ヶ樣之ものいましめの心なきは閑文字とて淨瑠璃も同し事になり申候故　右の通申進候　萬々申遺候　恐惶謹言

霜月十日　三浦安貞晋

渡邊次郎兵衞様

## 宵の明星曉之明星と申は（渡邊功氏藏）

八月十二日之貴書追々落手致拜見候得とも　亡妻以之外之様子追々登鬼錄　從夫弔客迭迎　近日七七日と推移　乍存御無音罷在候　晨下霜露交降　如何起居御平安御入被成候哉　拙落魄として消殘年候

一、硯箱之義枉而蒙稱諭大赦　然し仕合御座候　御丁寧之御挨拶痛入候　可然被仰置可被下候

一、俗に宵の明星曉之明星と申者　定なる事なく只曉夕ミヘ候大星をつかまへて申候　實に曉夕の明星とするは　太白卽金星　日の西に廻れは曉の明星となり　日の東に出れは宵の明星と成

曉なれは啓明と申　夕なれは長庚と申候得とも一星にて曉夕出沒は不定候　水星ハ日を遠く不離候得者　天已に曉け日纔ニ沒するの頃に見へ候星故　拙ことき朦朧たる眼には遮り不申候　五星の歌(ウタ)ハ暦家ニ應と申物御座候　應ニ因て推せは早遲しれ申候　今火星ハ暮候而中天にあたり小夜に見へ申候　土木秋の比くれにミへ申候　今比此邊山高く宵ハミへ不申候　もはや日に伏候也近來心を不用候故不申進候　歲星卽木星一名龍とも申候　十二年に大概天を致ニ一周一候故　先子丑之空に應すると致候故　歲星とも申候　龍次(ホシヤトル)ニ甲子一　歲(ホシ)次ニ乙丑一　皆此星を以ていふ也　されとも是あらましの事ニ而天度ニ十二空歲星定まる所ハ無し　大概ニ御覽可被成候

一、地中氣ノ隧道有之候　古人もこれを菌　燧蜂火のとしと申候　此竅氣もみち火ふるもあり水あるもあり　氣陸ニ出る處風穴と申候　陸ニ水ノ通するを川と申候　海中氣ノ通するを海眼と申候　地氣一面には不發　海眼に取りまつて發候　因て阿波の鳴戶なと申類　氣道門のあたる處海眼之地足より出る時　潮水湧氣出盡せハ水入て潮ひ申候　委敷ハ書狀ニハ難ニ申盡一候

一、信州之火變希有之義乍去　大小社(コツ)御座候へ櫻島と同樣之事ニ御座候　櫻島火變之記は拙國字文ニ書おき申候　夫に付申入候信州之變　色々書付も見申候　猶又板行も見申候得とも　是實徵とも難致候　公儀御勘定し易き微細之書付可有御座候　何卒高原氏なとの御力を以て　實事之言上書記錄之類手に入候義者相なり申間敷由御考可被下候　拙にも希代の義書とめ置度候得とも風聞之說にては還而咲をとる事と被存候故　筆もとり難く候　若相成事ニ御座候者　伊豆大嶋之火變も一緒ニ吟味仕置度候　任御心不申進候　時宜次第御沙汰被成　不可然候而者必御用捨可被下候　先荒々返書延引御斷旁　如此御座候　恐惶謹言

十月十一日　　三浦安貞

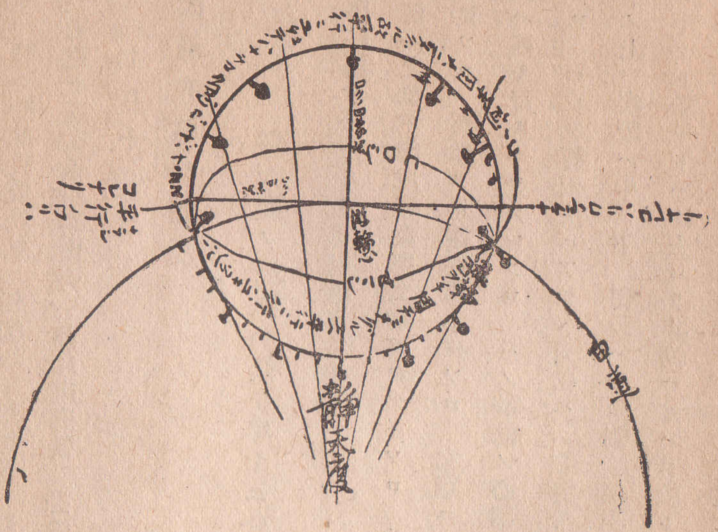
渡邊次郎兵衞様

## 靜天度ノ廣狹ハ高キ卑キニ分レ候　（渡邊功氏藏）

序註解十一マイメ

月行遲疾之御不審成程此處文章ゴタツキソロ　先一体漢學ハ遲疾留段ヲ分チソロ　西洋ニテハ升降ト見ソロ　西洋ノ見樣甚明かにソロ　文章ニカヽハラズ　眞行御考ナサルベクソロ　靜天度ノ廣狹ハ高キ卑キニワカレソロ　月ノ游輪ノ心卽白道ニテ月ハ白道ニハアラズ　白道ヲメクルモノニソロ　コレヲ靜天度ニアテヽ見候ヘバ白道下ニテハ狹ク　白道上ニテハヒロクナリソロ　遲段ハ半ノ上　疾段ハ半ノ下　留段ハ半ノ側　地上ヨリ見レハ　游輪ヲ下ヨリ升ルト　游輪上ヨリ下ルト升ルト降ルトハ地上ヨリ其位チガハヌ故トヽマル樣ニミヘソロ

先ヶ様にも被思申候　不案內ニ候へ者其道にくはしき人に御問可被成候



地ノ一度ケ様ナルコトハトカク　古人ノ説モタノミガタクソロ　西川ナド四五十里ノ間ノツモリカト覺ソロ　麻田剛立ハ二十里ニタルマシク申サレソロ　尤サモアルベキコトニソロ　豐後國東邊　北極三十五度餘ニシテ　サツマカゴ島ハ三十一二度ノ間ト承候ヘハ　カゴ島マデ迂曲シテ行テモ百里バカリカニソロ　然レハ豐薩ノ間四度內外ノ差コレアリソロ　三百六十五度ニ　三十六町道二十里ヲカケ候ヘハ　地球ノ大圖シレソロ　二十里ヲカケ候ハチトフトスギ可申候ヘトモ大概先心得候ヘバアラマシシレソロ

微星ヲ見候器ハ　ゾンガラスト申ソロ　未見不申ソロ　望遠鏡大概ハ見ヘソロ　星目ガネト云モ承候　ゾンガラスト別カ一か存ゼス候高價ノモノニソロ

註解二十

此問御尤ニソロ　愚案ニハ盈縮ハ南北經緯ノ度ニカヽハル事ニハ非スト存候　其故ハ盈縮ハ始テ見出シソロハ　隋ノ劉綽已來元ノ郭守敬ガ時盈縮ノ點ト合シ候　サレトモ今コロニテハ冬至後ハ九日ノ間夏至モ同樣ニ候ヘハ全ク冬至夏至トハ別ナルモノニ候　コレモ月ト同シク　游輪アルコトニヤ　イツレ升降イタス故ニヤ盈縮ノ源ハトクハ存ジス候

## 渡邊氏質疑の書狀（其一）並に梅園先生の回答（渡邊功氏藏）

——參考として——

一、津府倉成氏御返進物罷歸候砌　早速相届申候處　彼方より受取參申候　重而御借用被仰遣候書物之儀　何之儀も申來不申候　若彼方より直に便ニ而も御座候て參り候哉と奉存候　若未不參此後此方之樣ニ參り申候はヽ早速差上可申故に付先　御書物通箱ハ留置申候　左樣思召可被下候

（以下括弧の中の文章は梅園先生ノ回答書信で朱を以て書き入れてある）

（未彼方よりも返書無之候乍去此方ノ品相達候得者安堵仕候　彼是御世話ニ罷成忝奉存候）

一、怪異辨斷　此度御返進可仕之處　些拔書仕度儀御座候ニ付此節も御返上不仕候　何レ早春ニ社御返上可仕候　左樣思召可被下候　永々留置甚氣之毒ニ奉存候

（緩々御覽可被成不レ苦候）

一、毎度申上御面倒にも　可被思召上候得共淺見仕候樣之御書物御序ニ御恩借被仰付可被下候

此段㒵々奉願上候　星之圖御借被下度（今日進申度候へとも其紛冗春に到進可申候）少々宛宿星見え立申候て　大悅不少奉存候　將又、星之圖ニ而（春夏秋冬何レノ邊ヨリ出テ何レノ邊ニ入短夜長夜月ノ出入時分相違無之儀也）月之運行相分り不申候樣ニ御座候　もし右にて（星の圖にて）相分り候哉

御序に御しらせ被下度奉存候

（此儀者御面談之節粗申談候と覺申候　先黃道にて十一月中なれは中といふ字ヲ其日纏と定め其處ヲ東ノ地平ニ合せ候得者其時地平より上ニ見へ候星が上ニうかみ候星也　其日纏ヲ西ノ地平ニあて見候へはそれは日入し時ニうかみ候星也　其十一月中ノ日纏ヲ子午ニむかひ候天徑環ヲ地下ノ筋ニあて候へハ夜半の星地平以上ニうかみ申候　此例ニて御推可被成候）

且天者圓成物ニ而一晝夜ニ一遍周り候物故東西無之筈之處　右星之圖に東西南北御分チ被成候儀參上仕候節うつかりと承り候而　今更後悔仕候　是又右月之運行と一所に御序ニ御しらせ被遊可被下候　此段偏ニ奉願上候

（二十八宿ヲ七ツニ分ヶ東西南北の字ヲ置候は少々ハわけも候へ共先フテウト思召其字に强て御なつみなされましく候）

一、安節樣　養伯子への書狀乍憚御屆させ可被下候　もはや年內無餘光罷成候　隨分御安居御迎陽可被遊候　來春得尊顏　萬々可奉得尊慮候　書餘拜受儀無御座　荒々如此ニ御座候　恐惶謹言

巳冬月十三日發　　渡邊次郎兵衞（花押）

三浦安貞樣

尊下

## 渡邊氏質疑の書狀（其二）（渡邊功氏藏）

——參考として——

地度同じ一度ながら　日天の一度とハ次第ニ廣狹あり




定て地球の所の一度と被存候　此所にて地周も大體分り候樣被存候

＊

黑キ星ハ不レ見トアリ　イカナル朗夜モ見ヘス候哉　コレヲ見ル器ニテモ　有之候哉

日　龍頭龍尾ノ所ニテ食スル時ハ　其下ノ地ヨリ見ル時ハ皆既ノ日食ニテ候哉

（然リ）

＊

冬至ノ日道南陸ノ極界ニシテ其靜度ハ狹クシテ黃道ノ度ハ廣シ　故ニ日行盈トス　春分ハ黃赤ノ交處卽日道トナル故ニ平行ニ合ス　是ハ其意ヲ得候ヘドモ　夏至日北陸ノ極界ナル故　靜天ノ度ハ廣ク黃道ノ度ハ狹シ　故ニ平行ニ不ㇾ及　天度廣キノ至ハ赤道　黃道ノ度廣キノ至リハ黃道也

黃道ノ度北陸ハ狹キト云事　愚意ニ會得仕難ク奉ㇾ存候

地平上ニ遠キヲナストハ　北陸ニ有テ　ウヘニ見ル故カ　又地平上ニ近キヲナストハ　南陸ニ有テ斜ニ見ル故カ

北五六度ニ在テ游輪ノ最高ノ點ヲ行ク故　其行所ノ靜天ノ度ハ狹ク　月行黃道線ノ度ハ廣ヲ以テ必平行ニ過テ盈トナルト云ハ會得仕候　月行處ノ天　亢氐房心尾箕斗ノ宿ト與ニ南陸ニ斜ニ低ク游輪ノ最卑ニアリテ　地平上ニ近キ故　列宿靜天度ハ廣ク　月行黃道線ノ度ハ狹キト云コト　愚意ニワカリカネ申候　南陸トテモ北陸ニ同ク黃道ヲ社　月ハ徑行イタシ候ヘバ　ヤハリ黃道ノ度ハ廣ク　靜天ノ度ハ　赤道ヨリ二十四度離レ候ダケ　狹キヤウニ存シラレ候　又月行天ハ星天ヨリ卑ヲ以テ　其度ノ狹キ所ニ就テ勘ヘ候ヘバ　北陸モ靜天度黃道度ヨリ狹キヤウニ存シラレズ候



（[illegible]）

＊渡邊家所藏の梅園・龍渚筆蹟の文を梅園・龍渚・玄碩三學人の親交を表はす資として載せることにする。

應下渡邊君爲其老父開二六十之詩筵一之需上

聞說老萊子　開宴唱千穐　趨庭多日月　長好弄雛遊

二子山人　三浦晉拜

衆山懸泰岳　四座則兒孫　詩賦靑松茂　舞將黃鶴𨫼

素封徧潤屋　陰行欲高門　園制鄕耆老　六旬世所尊

右賀渡邊賢翁六十誕辰　龍渚倉丞

玄碩の父は綱任、寛政八年七十八で歿してゐる。其の六十の賀とすれば安永七年で梅園五十六、玄碩（卽ち次郎兵衞）はずつと後輩であつた。それに斯うした天文の事を糺してゐた。後ち玄碩は歌道を修むべく、京師聖護院村に住し歌を日野資枝に、連歌を里村昌逸に學び、里村家を襲ぎ、法橋に敍せられ將軍家齊の師範となり、柳營に勤仕し、廣く天下の名士と交遊してゐた。文政四年江戸で客死したが、年六十であつた。其の子玄有亦師範の家を繼いでゐる。

梅園先生中津に通ふ、往復必ず渡邊邸に泊り主人玄碩と談じ、中津に行つては倉成龍渚と語る。三子の交遊は頗る親密なるものがあつた。

## 市原玄意宛

一年は瞬息無レ程得ニ拝眉一可レ申（國東、田中鉄二氏藏）

陰晴不常候　御起居奉レ窺度候　收麥挿秧田園紛々罷暮候　然者此內ハ御從駕の命降候由　目出度奉レ存候　暫ハ御餘閑握手期申候處　却而隔ニ參商一可申候半ハ　滄然之仕合　乍去一年瞬息無程得拜眉可申候

一、贅語落手仕候

一、御用立候本御返可被下由　御發駕迄ニ緩々御取調可被下候

一、御心安儘得御意候御所持の十金外臺御留守中御預ケ被下候義ハ相成申間敷哉　先御尋申上候

今日も艸々萬々期他日候　恐惶謹言

五月十八日　　三浦安貞晉

市原玄意様

＊市原玄意とは杵築藩醫で、其の子東庵は帆足萬里と親交があつた。藩主に従ひ一年江都に勤めることになつたのを送つた狀である。

# 後藤運平宛

## 一夕從容慰ニ欝陶ー（後藤敏宏氏藏）

此間ハ一夕從容慰欝陶候　愈御安健可被成御座　奉欣喜候　拙自厤田暮ニ及候得とも無恙歸宅仕候　御案被下間敷候　其節御約束仕候品　今日得レ便指上候　御慰ニも相成候は千萬本望可奉存候

頓首不備

霜月廿七日　三浦安貞

後藤運平様

*運平、幼名長次郎、享保五年生。寶暦元年三十二、父に替り大保長となり、安永六年五十八歳致仕し、家を養嗣子宏道（爲二郎）に讓り、寛政九年行年七十八を以て歿し、量譽宗壽居士と諡してゐる。



## 一兩年凶饑世上困迫（後藤敏宏氏藏）

實は綾部先生に學んだので三浦先生とは同門の間であつた。豐後國に詩譜深く京師に遊び、[illegible]び縉紳に交はり深かつたといふ。三浦先生の訃を悼んだ歌數章が其の歌稿の中にある。

御投書拜見仕候　凍寒之節德門御萬福奉忝喜候　拙蠢々送寒光候　然者此間庵末の野蔬進候處態々御挨拶痛入候　年內得貴意申間敷候　折角御安寧御踰年春陽萬々可申上候　乍慮外何レも様ニ可然御致聲申御禮奉願候　愚息同上申上候　扨一兩年の凶饑世上困迫　兩子內も御聞及被下候半　小原內も御事多段承候

のがれても世は治まれと思ふ哉　靜ならねばかくれ家もなし

なと申事存出酸鼻御事に御座候　且又家庭指南も上木の擧　取懸り候筈ニ此間杵築ニて申談置候　尤序文草稿のみにて御座候へ共．是は春ニ至　相調可申　詩轍も來秋は慥に成就可仕候　周平生委細被存候　申度事先是限閣筆申候　恐惶謹言

極月廿日　三浦安晋

後藤運平様

## 手本色紙御認被下（後藤敏宏氏藏）

芳歌　鳥啼候近候　御健在之段奉忝喜候　然者兼て御願申上候手本色紙御認被下　御老躰御苦勞忝　乍併先許大悅十襲重寶可仕候（十重十襲と大切にすること）任便先許へ遣申候　殊御書損しも御座候由にて色紙御足し猶舊紙御返却被下　被爲入御念候御事痛入奉存候　拙者も先月は　藩中滯留此內於横手令嗣君（令嗣は爲次郎？）へ緩々懸御目候故　荒增御相談申候得ハ粗御聞被下候半　先鬱寒の事も一通り相達申候　乍去掣肘御座候處　酸鼻仕事ニ御座候　夫ともに少々宛ハ行はれ候事も可有御座奉存候　他事不能腐毫候　恐惶謹言

卯月五日　　三浦安定

後藤運平樣

## 安節方不幸御聞達（後藤敏宏氏藏）

安節方不幸御聞達　御弔書忝奉存候　茫然之仕合御察可被下候　右御禮申述度　如此御座候　恐惶謹言

五月十四日　　三浦安貞

*安節とは妹婿、石川昇、安節と號し醫を業としてゐた。

## 新本故少々高價ニ候（後藤敏宏氏藏）

（切）御平安御加年可被遊大慶奉存候　弊方無恙迎春仕候

一、詩韻一卷懸御目候　是ハ去處よりの拂本にて　拙者へ世話可仕旨申來候　千一御望も可有御座かと（一字切）懸御目候　先年本藏殿三重韻御欣羨の義も御座候付　得便呈之候　御入用ニ無御座候ハ　御返却可被下候　少も不苦候　外に王勃詩集檀弓（檀弓は禮記の篇名）批點明令文章九命拂ニ出申候　明令と文章九命トハ拙者取申候　殘りの二部若御望之方も御座候へは御しらせ可被下候　尤新本故少々價高御座候　若此本御入用無御座候は　追て御返却可被下候　折節草々申上候　恐惶謹言

正月廿四日　　三浦安貞（花押）

後藤運平樣

## 性理大全御借被下度（後藤敏宏氏藏）

（切）慶奉存候　弊方無恙罷過候　御心安思召可被下候　然兼て申上候性理大全今日幸便御座候間

申上候　何卒御借被下候様奉願候　尤大部ニ而御座候へハ　渉獵仕候にも少々隙入可申候間　暫ハ抑留仕度奉存候　恩風奉仰候　恐惶謹言

霜月十一日　　三浦安貞（花押）

小原運平様（小原は村苗字なり）

# 後藤爲次郎宛

## 御藥克相考指上候（後藤敏宏氏藏）

拜誦月迫御平安　大悅奉存候　誠先頃ハ緩々接紫字　解鬱陶候　御歸路御難義奉察候　拙子も漸罷歸候　扨御藥克相考指上候　十棗湯壹匁包として指上候　折節棗遣切　御地にて御調御用可成候　何れ十棗湯の藥力未微物と相考候　緩ゝ御用御覽可被成候

一、事緩急あり　銀札の義此節論する處にあらすと相考へ申候

一、助給の義一工夫も御座候も大意書申候　何とも是は當時行はれ申間敷奉存候　猶相考可申候

一、御大人様（大人は運平也）より借用仕候品　先御預り申上候　可然奉願候　取込　荒々申上候

皆ゝ様可然奉願候　恐惶謹言

十二月廿日　　三浦安定

小原爲次郎様

*爲次郎、諱宏直、又彌助と稱す、梅園門人、寛延三年鶴崎の木岐源左衞門致直の四男に生れたのである。二十八歳、運平氏に養はれ大保長となつたが、享和三年致仕した。それでも在職二十七年、文化九年に六十三で卒したとあり、天明八年（梅園六十六）十一月、爲次郎、村周年、佐野玄仙、兩子文平、海老屋壽助等發起となり、玄語贅語出版につき醵金の世話をしてゐる。

## 十棗湯ニてねり（後藤敏宏氏藏）

當時なつめ　無御座候間　御近邊醫家ニてもとゝのへ可被成候

一、十棗湯　散藥五貼　但五分入

夜半頃棗三ッ程土器にて茶わん一ッ程水入　半分程にせんし一時ニ一貼用候　尤口中惡敷藥ニ候へとも口中ニ滯不申候樣ニ手はやにのみ込み　口中ニ散するをいとい候へは　十棗湯にてねり候て用候てもよく候　湯ハ皆のみ候に不及　勝手次第に御服可成候　用候ては手あしひへ不申　冬冷物服用候得は下り不申候　かゆをたへ候よく候　ミそ漬　香物梅干類口惡敷候は御用可被成候

瀉とまり候上ハ　御平生ニ含御用可被成候

もし下りかね候は　其上二三分ニても一服にても　御考御用可被成候　五分五度分と申候は　先様子瀬ふみにて候　五分も過と思召候は　急に御減可被成候　或ハ吐　或瀉　御座候ハかゆの湯只管御用可成候

一、控涎丹　折節少々御座候有合候程進候　日々拾粒程夜寢付一度御用可成候　感白湯砂糖湯いつれもよく候

一、せんやく　一日一服つゝ　常の通御用可成候

即日　安貞

爲次郎様

## 十棗湯散有合候間（後藤敏宏氏藏）

如仰此間ハ於手野寛候　得閑談大觀喜仕候　疾御歸宅被成候由拙者も追て歸山　扨〻寒く覺申候

隨而今日藥取一人御遣被成候　相考御藥進し候　加入書御座候　一日一貼半御用可成候　十棗湯散三匁六分有合候間進し候　棗貳拾五進候　大かた此位可然候　過候へは藥力ぬるく相成候　御考可被下候

扨控涎丹　白芥子　甘遂　芫花（和と申すは甚あしく候　くらと御申遣可被成候）　右三味等分細末ヲ蜜にて練生、藥湯ハ〇〇一日一匁位兩度ニ御用可成候　先右の通御座候　御大人様猶皆々様ニ可然奉願候　御事前御繁用奉

察候　萬〻重而可申承候　恐惶謹言

二月廿三日　　三浦安定

小原為次郎様

## 玄賛上木料彼是おせ話（後藤敏宏氏蔵）

尚々此間の御返書慥に落手仕候

一筆啓上仕候　寒冷之節御平安被成御座珍重奉存候　拙同邊に御座候　御安慮可被下候　然此間承候處　玄賛上木料彼是とお世話被下事相調候由存外之御深切　修令も一同難得盡　辱奉存候　歳末無人乍略儀　以書状如此御座候　不腆（不腆は輕少の意）の至候へ共　鯉魚二口歳末の御祝儀進上〇仕候　御受納候は辱奉存候　尚御家嚴様始皆〻様へ宜敷奉願候　折角御仕舞御超歳可被成候

恐惶謹言

十二月廿日　　三浦安定

小原為次郎様

左右

## 大人御不快公私御引受（後藤敏宏氏蔵）

客歳ハ御懇書誠　接案宇候誠久敷御大人様にも御不快　公私御引受　御心遣奉察候　左候得者此邊迄御踰山も可被下候　兼て御存寄の艶陽の春にも趣候へは　何事も得閑暇申承候　可然御兩親にも御寄聲申上度候　以上

即日　　安貞

後藤為次郎様

## 早速御悔可申上處（後藤敏宏氏蔵）

御掌珠時行にて終ィ御死去被成候段　御歎奉察候　早速御悔可申上處　此内故障　乍延引如此御座候　御令内様にも可然奉願候　恐惶謹言

八月十四日　　三浦安定

小原為次郎様

## 山家の義麁末の至 （松本峯吉氏藏）

秋冷御壯健奉察候　誠先頃は遠方御入來被下忝奉存候　爾來彼是御禮不申上失禮仕候　山家の義麁末の至遺憾奉存候　爾來藥化此間照恩寺より始て承御無聊奉察候　折角御加餐御兩親様にも御宿付の段様々にと奉存候　類子（類子とは先生の次女也）も段々快く相覺候御念懸被下間敷候　恐惶謹言

九月十二日　　三浦安鼎

小原爲次郎様

## 遠方之處御芳尋 （横手、利行壽吉氏藏）

此間は遠方之處御芳尋被下候　接ニ紫眉ニ積鬱を散　忝奉存候　定而薄暮吉弘迄ハ御歸被成候半奉存候　爾來無御障御入可被成候　其節御約束仕候　指上候御用御覽可被成候　用様別紙指上候
猶御老人様奉ヽ初皆々様へ宜敷奉願候　恐惶謹言

十月二日　　三浦安貞（花押）

小原爲二郎様



## 石碑早春相認 （後藤敏安氏藏）

貴書忝相讀仕候　如仰嚴寒之時候　益御清福被成御座候由　珍重の御儀奉存候　然爲歲末御祝儀御肴料一封御惠投被下不淺忝拜納仕候　且又御石碑早春迄相認候様　被仰付奉承知候　清書紙入手仕候　萬ミ來陽目出度可申述候　恐惶謹言

十二月廿六日　　三浦修齡

小原彌助様

＊彌助とは爲次郎の別名なり、小原は矢張村苗字歟。以下五通は長男修齡の書簡であるが、猶次男玄龜の書簡等も參考として併録することにした。

## 先日は始而參上 （後藤敏安氏藏）

尙々拙弟も宜敷申上度申出候

一筆啓上仕候　寒氣御康寧可被成御座　珍重の御儀奉存候　先日は始而參上御丁寧御馳走被成下不淺忝奉存候　小生無恙歸宅仕候乍憚御安慮可被下候　乍筆末御同苗様始皆々様可然可被仰下候
先御禮得貴意度如此候

霜月十八日

小原彌助様

三浦修齡黄（花押）

### 爲ニ歳末ノ御祝儀（後藤敏宏氏藏）

貴墨忝拝見仕候　如諭月迫嚴寒之候　益御清福被成　珍重奉存候　山中無恙消光陰候　乍憚御安情可被下候　爲歳末御祝儀一封御惠投　不淺品拝受候　時分柄公私御取込之段奉推察候　將又御令息様久々御風邪御勝不被成　御勞心奉察候　今日ハ遠方御來訪忝奉存候　御様子も相伺候様被仰下承知仕候　今日甚取込不能縷々草々奉復如此御座候　恐惶謹言

十二月廿日　三浦修齡

小原彌助様

## 後藤銕之助宛

### 城之助様御藥調進（後藤敏宏氏藏）

昨日者　得貴意大慶奉存候　彌御平善可被成御入　珍重奉存候　御丁寧御馳走被成下不淺義ニ奉存候　然ハ城之助様御藥調進仕候　一日二貼宛御用可被成候　又ゝ其內御左右可承候　御同苗様御在宿も難斗　別書指上不申　乍慮外宜敷奉願候　右可得貴意草々如此御座候　恐惶謹言

三月廿八日　三浦修齡

後藤銕之助様

### 先時は逗留（後藤敏宏氏藏）

雲簡相誦如諭殘暑却甚敷御座候處　益御健康被成御座候由　奉珍重候　先時は逗留御丁寧被成下

忝奉存候　然ハ御母堂様先御同邊御入被成候由　秋暑折角御調護可被成候　小子も大黒屋病用ニ而昨日も田深迄罷越候　今朝早々歸山候此節ハ指急候段　御尋不申上候　乍筆末皆々様可然御致聲可被下候　右貴答如此御座候　恐惶謹言

七月五日　　三浦修齡

後藤銕之助様

## 御母堂御藥調進（後藤敏宏氏藏）

過日ハ寛々逗留候て御丁寧被成下忝奉存候　昨夜四ッ前歸宅仕候　乍慮外御安慮可被下候　然ハ御母堂様御藥相考調進仕候　御服用可被成候　御同苗様御歸宅の上可然奉願候　其外皆々様宜敷御傳意奉願候　右得貴意度早々如此御座候　恐惶謹言

六月十六日　　三浦修齡

後藤哲之介様

# 荒巻繼藏宛

## 年尾の挨拶（田川三郎氏藏）

貴書拜見仕候　月迫寒氣御壮健御入被成珍重の御儀奉存候　敝方無異議罷過候　然ニ年尾の御挨拶御使金子一封拾五匁被懸貴意忝受納仕候　來陽萬々可申承候　御平安御踰年可被成候

恐惶謹言

極月廿日　　三浦安貞晋

荒巻繼藏様

*安永七年荒巻氏の爲、養生訓を書いたとあり、荒巻氏は杵築の豪家とある。

# 河下玄意宛

年尾御祝儀として（河下捨吉氏藏）

尚〻愚息（愚息とは修齡先生也）も宜敷申上候　已上

於御慶　海內一樣申納候　貴家御平安御超歲被成珍重奉存候　拙無異ニ迎春候　殊ニ客臘之御信書昨相達　年內御平安之御樣子悉之　慰悅仕候　年尾爲ニ御祝儀ニ種々重寶之品共被送下　猶藥料一封被懸御心頭忝祝納仕候　乍略儀任御心安一緒御禮申述候　春來緩々可申伸候　恐惶謹言

正月四日　三浦安定晋

河下玄意樣

河下秀益樣



＊河下氏もと狹間氏と稱す。




宗壽始めて河下氏と稱し、代々別府にて醫を業とし、世良氏の後歷代世良と稱せしが如し、此には便宜、城隨、玄意、世良、秀益の宛名を一括して併列することにした。

## 拜納忝存候（河下淸氏藏）

覺

一、毛緬　壹端
一、草履　愚妻へ
一、半紙　修令へ（修齡、黄鶴）
一、御元結　長女へ（菊）
一、同　末女へ（類子）

一、玄　墨　　亀兒へ（玄龜）

右之通　懸貴意　不淺爲拜納忝存候　已上

極月卅日　　三浦安貞晋

河下玄意様

## 爲ニ歳抄ー御祝儀（河下清氏藏）

尚々くれ〴〵も御禮宜敷申上候　御親父様にも可然奉願候　已上

御狀忝致拜見候　嚴寒偏御清福被成御暮珍重奉存候　手前無恙罷在候　御安慮可被下候　然者爲歳抄之御祝儀目錄之通被贈下不淺受納候　寒氣之節折角御安健可被成御越年候　來陽目出度可申述候　恐惶謹言

十二月晦日　　三浦安貞晋

河下秀益様



## 年尾御祝儀（河下清氏藏）

覺

一、木綿布　壹端

一、奈良草履　妻へ

一、墨　修令へ

一、足袋　龜兒へ

一、水引　菊へ

一、同　類子へ

右從河下玄意老　年尾御祝被下忝幾久敷致祝納候　御序之節可然御禮御申達可被下候　以上

極月廿七日　　三浦安貞

善助様

## 御悔として遠方（河下清氏藏）

一筆致啓上候　向暑之節彌御安全被成御凌珍重奉存候　然ニ先達而不幸之節ハ　爲御悔遠方之處

御出被下忝奉存候　其以後右御挨拶書差出申候相違候や　此節幸便ニ付御様子承度旁如此御座候
恐惶謹言

五月廿五日　三浦主齡
黄鶴

河下玄意様
同　世良様

## 見事の薯蕷（ヤマイモ）（河下清氏藏）

尚々御家内様可然御傳言奉願候　自此も宜敷申上度申出候　已上
拝書如仰新禧目出度申納候　御渾家御清福被成御超年候由奉賀候　弊境無恙致加年候　然者不存寄見事之薯蕷一連被送下忝儀受納候　右御禮答申述度如此御座候　恐惶謹言

二月十一日　三浦主鈴
河下世良様

*此の二通も修齡先生の書簡であるが、河下家との關係を知るべく挿入す。修を主とも齡を鈴ともある。

## 牢を抜け逃去候者（河下清氏藏）

以別紙得貴意候　然者御聞及も可有御座候　其御地多吉と申　盗賊去冬已來當所入牢罷在候處今月十七日夜牢抜いたし　逃去候　御地之方ニ忍居候趣　内々取沙汰承及候　當所より段々尋之者差出候へとも　他所之儀　詮義行届キ不申　千一貴君御兩所の御聞及之儀ハ無之候哉　若御聞及候儀も御座候はゞ　内々爲御知被下候様奉願候　委細ハ此者より御聞可被下候
一、此者當所之者ニ御座候へ共　當所の者と申候ては人之疑も可有之　高田の者と申　先年貴君富永ニ而心易く致候ニ付　此度用事之序ニ御尋申上候と申體ニ爲致候　此儀御承知可被下候　右御願申上度如此御座候　此書中　早々御覽之上　御火中可被下候・以上

三浦安鼎
河下玄意様

## 陰陽逼晦朔候（河下清氏藏）

陰陽逼晦朔候　德門御清健　唱南山候　就ハ先日有合之儘　蹲鴟一苞　懸御目候處　御謝辭之勞御勞筆之段憚入候　萬ハ期烟霞之春　當暮之御感傷不常奉存候　頓首謹言

臘季六日　　　　三浦安定晋



## 御菓子御恵投（河下清氏藏）

貴札致拜見候　彌御安全被成御凌珍重奉存候　然如御聞及舊冬ハ拙女長病之處　養生不相叶致落命殘念奉存候　今日不存寄御菓子壹袋御恵投被下御深志忝奉存候　右貴答如是御座候

恐惶謹言

五月三日　　　　三浦主齡（黄鶴）

河下世良様

## 看板甚不出來（河下清氏藏）

御別書拜見　然ハ油布院墓銘文之儀被仰下　則相認申候　草々執筆甚不出來ニ御座候へ共　取込中不及改書候　先様宜敷奉願候　尚又御菓子料　壹封先様より御恵贈被下忝致受納候　可然御禮奉願候

一、賣藥看板甚不出來御座候　花の字大ク相成不恰好ニ御座候　當所も寡君明日ハ乘船ニ付甚混雜中　萬端草卒御用捨可被下候　已上

五月三日　　　　主齡

世良様

## 脇先生の河下宛（河下清氏藏）

——參考として——

御紙面拜見仕候　先以て頃日ハ遠境態々御越被下殊御逗留千萬忝奉存候　御障なく御歸着目出度奉存候　然ハ繪本御返し被下被入御意候御儀　取亂し御座候故入ませ申こと〻おかしく奉存候　家内ニ御傳筆申述候　何分宜御禮申上度候　已上

七月卅日　　　　和喜義一郎（脇を和喜とかく先生の高弟）

河下城隴（世良を城隴とも青龍ともあり）様

御報

## 大年の河下宛（其一）（河下清氏蔵）

——参考として——

秋冷御清福　被成御渡　珍重奉存候　日外御噂之堂名　稍〻此度指上候　左之通御覧可被成候
頓首

九月二日　三浦大年（大年は先生の次男玄龜の事である）

河下世良様

奚疑堂

## 大年の河下宛（其二）（河下清氏蔵）

——参考として——

昨日は御出被下　忝奉存候　然者二日御指問無御座候得者　夕飯指出申度候　御來話可被下候
御答御待申上候　頓首

晦　大年

世良様



## 喜助宛

かやのくわん一さがり分御見せ（河下清氏蔵）

一、地布さらし　四尺八寸　是又御たのみ申候
右代銀　おひ銀ヽヽヽ候は祭之節　進可申候　已上

即日　安貞

喜介様

一、かやのくわん　幷かぎ　御座候は　一さがり分御見せ可被下候　是はまつりの時にてもよく
御座候

## 周益殿書物代（河下清氏藏）

正銀四匁五分

右　周益（周益は秀益氏なり）殿　書物代御世話御頼申入候　尤正銀被下度候　已上

極月廿四日　三浦安貞

喜介様



## 五郎右衛門宛

### 每度御道具御無心（河下清氏藏）

每度御道具御無心申忝奉存候　卽

一、盃　二箱　組數四

一、朱吸物椀　一箱　但十人前數二十

一、銚　子　二　組ニそひ

右之通御受取可被下候　以上

卯月十五日　安鼎

五郎右衛門（夫人ノ父寺島五郎右衛門洞雲の事？）様

## 田坂宗三郎宛

### 美酒御投與被下（杵築、田坂氏藏）

御手帋相見仕候　如命　鬱陶敷天氣ニ御座候處　彌御清適被遊御座　珍重奉賀候　然ハ先般御婚姻御整被成候ニ付　私出勤中に御座候へは御招可被下之處　引込中ニ付美酒御投與被下候趣　御厚志難有奉謝候　召立右樣之御配意決而御無用之御事に奉存候　快方之上參堂承り御禮可申上候　右貴答可得御意如此御座候　以上

三月十二日　三浦主齡

田坂宗三郎樣　貴答

*田坂宗三郎、名は延世、杵築藩に仕へ、御舟奉行たりしと。



### 覺書一通進之候（杵築、田坂氏藏）

爾來御遠々敷罷過候　彌御清福御凌被成奉賀候　然者一件之義　覺書一通進之候　兩社如御承知にはり紙致進候間銘々御印形被成　其上奥書の案紙相添候此通候　奥書御認八ケ村之御役人御連印被下　御返しも○○候得は其上は拙と參候節は對面はかり一夜にて事濟候　もし此印形出來不申候へは　參候ても　無詮義ニ御座候　因而　庄屋衆連印御成就之上　御分地より此方へ御屆可被下候　左候は何卒今月中　天氣好時分參上　皆々へ可致對面候　御印形之上ハ御指問之方は御出席無御座候ても相濟申事に御座候　杵築表は淺井氏歸國之上申達候　取はからひ可申候　左樣思召可被下候　此印形の御返事ハ其內奉待候　恐惶謹言

卯月八日　三浦晋

尙々書付二枚さし上申候　若已後之爲御扣御入候は御扣に被成候

*宛名はないが田坂氏宛なり。

## 脇儀一郎宛

### 詩情不凡、長進奉期候 （日出、武内勢平氏藏）

先月廿七日の鴻書落几上謹而悉ニ近候ニ欣慰此事に御座候　誠先達は御不幸御憂念奉存候　御加餐奉祈候　安節よりも宜敷御禮申上候

一、詩文御暗投拜見仕候　兼而御出格思設候（切）猶又詩情不凡處々發露御長進奉期候　御文章立意甚高　御平生の蘊蓄相像　慕高風候　存寄申進候樣被仰聞候へとも　中々愚評申出候樣の義不奉存候　復將の字隨分わかる間布候　唯不知申　盈伯の人物與此文相當否　豐中以ㇾ學而興者望ニ之於足下御努力ㇾ　若殘喘得ㇾ引ニ于世ㇾ者見ニ大成ㇾ可申候

一、鳩巣集無御座候　此方角ニハ何方にも御座有間敷候

一、神主御尤の思召ニ御座候　拙兼而存候は今實ニ位牌を要するの地ハ菩提所祭御なし候へ共品服二分中先先祭ニ候　是を初として葬埋用、佛事、上自ニ一人ニ下至ニ〇〇乞兒ニ用之事法にて御座候　上の法下之に從ひ候は　下たるものゝ禮に御座候　且當時門盛なるものも　又衰るもの　是によつて　位牌を寺に托し　化者の諡號俗名日月　寺の思錄にしるして不朽につたへ候は　叔世にはよき物に候　葬祭浮屠ニよりし事禮に候得ハ可然候　位牌神主別々御座候へ共　大概ひとしき物に候　神主の制　徂徠は　其主牌宜布由申候　是も可然候　文公家禮の式たりとも　表面法諱相用候事必可然奉存候　足下も鸞門と覺申候　此方角鸞門神主墓表を許さす候事は甚苦々敷覺申候　府君の字未相考不申候得ハ甚輕卒に御座候得共　無爵ニも通し可申存罷在候　猶御考可成候

一、函石（カンタン）港所據存不申候　御在所を冠の岸と承候　享保の末　安岐を自古紅葉浦と申　高田川を桂川と申類　所據不明候へ共　人々皆存候上ハ　詩文苦かるましく候　府内を隆國府と申候も此類ニや　久敷尋候へ共分り不申　御聞出し被成候者御しらせ可被下候

一、鄙生義寡君眷顧不堪赧然候　御紙面痛入奉存候　誠寡君豪傑にして君子才德兼備　大に歡喜仕候

一、愚息義初夏便船有之　天地ニ宿癖有之候故　麻田剛立子へ爲質問暫指遣候處　先月廿一日無恙歸省仕候　於天文地理麻田氏只皇和の壹人と申候ても事たらす覺申候

一、拙著詩轍成就仕候付　誠無用の長物ニは御座候へとも　頃日君祚君へ托進上仕候　もはや時

分柄ニ候へは障子御繕の爲にも相成可申候一呵
一、御詩文稿御所望仕度留置申候　猶近々可申承候　恐々謹言

十月既望　三浦安鼎晋

脇儀一郎様

＊脇儀一郎、蘭室、二十二歳で入門し、二十六歳の時梅園先生は歿したのであるから、此状は天明七八年の頃である。

## 豚兒不幸、相應の者差置度候（武内勢平氏藏）

寒候益御清康可被御凌珍重奉存候　劣生眠食依舊候　然者先達而ハ御投書早々拜答可仕之處　多間遲慢失敬罷過候　且御寄款之佳什感佩緹襲仕候　此節御近地迄得幸便候　延引拜謝如是御座候
一、來春より賢胤哲吉君熊藩御遊學之思召之由傳承仕候　重疊御決定の儀ニ御座候哉　自弊藩一書生遊學の志ニ御座候得共遠國不案内之子に御座候　若賢胤御遊學被成候は丶彼地へ御同伴被成下儀ハ相叶申間敷哉　大概期日被仰付候は丶其用意可仕候　左様相成候は丶彼表の儀都合宜可有御座大幸之至ニ御座候
一、劣生儀御存知之通當春豚兒不幸之段　嗣續之義も不貪着ニ過候　格別差急候儀にも無御座候得共　相應の者も有之候へは　養置度奉存候　御門生の中猶御近邊思召付之者有之間敷哉　門地齎資之義毛頭無御座候　毛利泰元方ニも男子多有之由如何之生稟ニ御座候哉　其外何分御心附之儀も御座候は偏奉願候　急便早々如此御座候　窮陰御康寧御超年可被成候　萬期春來候　恐惶謹言

十一月十七日　三浦主齡

脇儀一郎様

## 亡父碑銘之義御請被下バ（武内勢平氏藏）

亡父終焉之節　碑銘之義　中井兩先生之中　何レニテモ相賴候テ　相調候樣遺命仕候　尤賢兄御從遊之儀ニ候得ハ　御憑申候テ可宜ト申置候　乍御面倒御請被下候ハバ誠以可レ含二笑於地下一　千一許容有之候ハバ　早速以二草稿一賢兄マテ可レ得二貴意一候　僕モ嘗テ得二識荊一候得共　不レ若二賢兄之親炙一候　以レ參御賴申上度候得共　制中態ト相扣候
御病翁近況如何御勞心相察候　僕失恃已來　心胸鬱陶殊來賓酬酢旁大ニ失意罷在候　恨二寒郷不丁能丙得乙益友如二貴兄一者甲相切磋上殊益二悵恨一耳　賢兄實天賦之英才　豈僕輩之所二企及一哉　往執二手耳於翰墨之場一者又皆屬二望於足下一在二吾儕一　將二依賴不レ堪二景慕之情一　頃聞有二微恙一　願加二省察一　萬期二後鴻一　頓首

五月二十三日

儀一郎様

*識荊は初て人に面會すること、「一識㆓韓荊州㆒」に出づ。失恃は母の逝去をいふ。母の死は年表參照。酬酢は主客互に酒を酌みかはすこと。

野詩一首呈覽（出田新氏藏）

——參考として——

早春辱貴翰候處　追々御歸國の思召と承候故不修復書候　頃日幸便ニ傳承候は　當年ハ御上京御逗留被成候由御篤志敬服不堪欣羨候　奉寄野詩一首　甚拙惡ニ候得共　呈覽仕候　祖母老病頃日已來益劇　不遑淨寫草稿ニ而差上候失敬の段御海容奉希候　萬他日寬々又申上候　頓首

四月十日　　和喜儀一郎

三浦修齡様

尙々御近著如何御遠寄奉待候　已上

*脇儀一郎、名長之、字子善、愚山又蘭室と號し小浦の人。愚山年二十一、肥後に遊び藪孤山の門に入つた。其翌天明五年去つて道を孖山の三浦梅園に問うた。梅園出迎へ禮接していふ、愚拙も此の山中に在つては學者であるが、世間に押出しては如何で學者と申されようと。梅園が初逢㆓子善㆒の七絶に「今朝試向㆓水底㆒探、中存㆓明珠㆒大如㆑斗」と。梅園の稱揚あつてから愚山の學力四隣に聞ゆ。（天囚氏學界偉人による）

*答脇子善「晋　飮㆓孖溪之水㆒　耕㆓孖山之田㆒　優游遂㆑生　無㆓一長技之以献㆑人　足下以㆓犬馬之齒㆒不㆑棄㆑之　數致㆓存問㆒　實不㆓敢當㆒　足下姑舍㆓舊典之所㆑說　先達之所㆑論　反觀合一　取㆓徵於㆓天地㆒　條理怡然氷釋　則知㆓世之悶悶者之實悶悶㆒焉……所㆑請之題　別錄呈㆑之　自㆓麻田剛立之許㆒至　彼固無㆘探㆓龍頷㆒之手㆖　唯望㆓驪珠之所㆑藏光芒燄燄立衝㆑天而還」とあり、脇子善に天玄の理を究めん事を勸めてゐる。然し子善の從學久しからずして、梅園先生歿したので、天玄の理を究める隙もなかつた。

## 三浦修齡
## 永松壽助　宛

### 廣島よりの書狀落手　（日出、出田氏藏）

尚々此節ハ甚とりこみ剛立先生の書は〇〇候　此間地圖御返被下慥落手仕候　今般被召罷出甚とり込御返書ハ罷歸候上可申上候　世忰等參上彼是御世話罷成候段　先よろしく御申置可給候　已上

本月二日廣島よりの書狀落手　御兩人御平安　二日の晩廣島出帆の御定と　もはやとく大坂御着始而繁昌の地御覽御樂致察候　此表拙宅兩子安岐佐野其外何かたも不ㇾ相替ㇾ罷在候　御念慮有之間敷候　次第暑にも赴候　客土は水土姓となれ不ㇾ申候へば　飲食の類みたりにほしゐまゝに用ひず　暑にも相成候て濁り候得バ　不覺水過　又は瓜西瓜類ニても過候間よく〳〵念を入れもし外かたへ參り御馳走等有之候とも、、、、〳〵に滿腹にいたらさる樣かねて腸胃に和し不申候



物用不申候樣　千一の事に御座候　偖今頃は京師にも御出候半かとも存候　何卒玄還兄大坂下向候へかしと存候　如何御座候や　御對面有之とて何分可然御致意賴入候

一、老拙今月十日御城下へ罷出今以致逗留　此邊親類平安大坂便承知候間　御左右申入候　於御地麻田氏（麻田剛立）與津（與津公錫）加藤（加藤周平）皆々可然御申可被下候　定而いつれにも御世話に罷成可申候　佐田屋にも御逢候や　是又同然に御申可被下候

一、家庭指南（家庭指南は其師綾部安正の遺編である）彫刻大かた出來候樣ニ承　定而追々下り可申候　板殊の外見事成風聞承候

一、詩轍も追々に仕立出來可申候　今頃豐前より木付へ紙未出不申候　さて〳〵遲々の事に御座候

一、拙義病用親類等城下に罷出べく　左候は御沙汰可申上候　大原左五右衞門殿へ御進有之　此段小串氏より申來十日出府　十一日御逢有之難有仕合奉存候　尤翌十二日も被召　御物かたり共有之候　未御暇は不被仰出候　いつれ永逗留の運氣とは相ミヘ不申候　近々歸山可致候　猶委敷別紙申入候

一、廣島にて　香川氏へ御對面の由　委敷御紙面御一興大坂にて人物の周旋可有之候　御歸家の由澤山に面白義とも御たくはへ　家産ニ被致候は此上も有之間敷候

一、古物店にて　よきなつめ有之候は　御求候てはいかか　てりわる今の器にては　暑中いたみ可申かと氣にかゝり申候　豐前上田にて目藥を入候　年の內に掘り込　口(フタ)をばつちりに致候重寶に御座候　もし御見あたり價廉に候は御求も可然　やくま事猶かさねて可申述候　恐惶不悉

五月十三日　　　　三浦安定

三浦修齡殿

永松壽助樣

## 幸藏彌右衛門參宮ニ付啓上（中島末吉氏藏）

幸藏　彌右衛門　參宮ニ付致啓上候　此邊今以霪雨　宿に居候へ共袷にて宜布御座候　此表相替義無之候　細書忠右衛門殿に話候　違ニ而傳語も致度　今市迄參り候へ共　間違退取申候

一、詩轍紙上り候分ハ　本追々出來候哉待入候　跡々紙紊れ　込(コマ)り申候　夫ともに有無之處承り追て可申進候　可然御文面賴入候　先書にも申進候　詩轍の樣子如何　ちと元銀の助にも相成可申歟承度候　紙間違の事彌右衛門にも　有増(アラマシ)申聞度候

一、何方にも　貴殿等御世話に相成候趣可然御申賴入候

一、田根付は仕舞候へ共　畑は少々相殘候

一、天地訓一通書立候　麻田先生へ御正し　不二宜敷一處はとくと御聞　御申遣被下度候　追々天地韜の內　日月篇淸書出來可申候　出來次第遣候而　先生之意見承度候　兼而申上候通　日影ハ陰散陽聚之天地　天地ハ氣散物結の天地ニ候　しかるに氣取之天地立候得ハ　中位を地しめ候程に　日ハ己が處をわきに立さるを得す候　是故に一大圈の內　地正中に小圈をなし　日又側に一小圈をなし候　地の小圈ハ天ノ大圈と極を同し候へは　異論なく候　日の一小圈只扁圓鏡の如くニ候は　五星の行もそれにてすみ可申候　乍レ去扁圓と申ものハ出來かたかるべく候　もし正圓毬の如くに御座候は　此圓圈中小黃極なき事能はす候　圖二枚進候　先生思召御聞可被遣候　拙意ハ是ニ極有之候へハ　大黃極と　とんと別物たるべき歟　甲圖の如くなるべく候　もし是を黃極ニ歸し候へハ　乙圖の如くにして　角形を得ず　轉し難かるべく候　且西轉致物ハ氣外にして大なるもの彌急に下の小なる處　勢ゆるく候　東運致すものは　廣く大なる處勢ゆるく　近き所勢急に御座候　是氣象反する處　然らさるを得さる故に御座候　然れとも日月土木と　一ケ〳〵に致候得ハ　路遠き所勢緩き筈　道の近き所早き筈に御座候　されとも黃道白道分明に　日月の行とわかれ　且煙星で二萬年餘をもへ　一周致す事　經星と天運を會し候樣に御座候

此處輕星の東行と　輕星天の東行と一に候や　別ニ候や　とくと御正し可然候いつれ日天と　東運同しからさる樣に御座候　左候へは諸家東運之外　東行之氣あり候樣に相見

へ候　其東運軸ハ同しく候而も　遲速は同しからさる物に見へ候　たとへは

コノ處ハ輕星ニテ
東行スル
此軸甚緩
輕星ノ黃極

コノ處日圈ノ黃極地ヲサル事近ク
東行早シ然レハコレヨリ下ノ軸ハ
メグルコト稍速シ
日天ノ黃極

此處ハ日圈ノ黃極
此軸ノ東行最モス
ミヤカ也
地

是ニ準し候へハ　日表の五星の小黃軸も　此理に歸し可申樣ニ覺候　前ニ申通　象はかりに候へハ遠路ゆるく近路早かるべく候　軸を以て運する氣有之候へハ　其軸ニ節有之　輕星天の軸の節は　東行二萬年位に一旋し　日天圈の軸之節ハ　三百六十餘日一旋申候　月天圈の軸の節ハ二十七日に一旋する樣に相見申候　黃道之輪軸一度ハ赤道と合し　一度ハ離れ候へハ　此軸はたとひ常〇てあつても　繫るものにもなく候　左候へは　日天圈に小黃軸有之候　其軸ニ節有之候や御問被下度候

一、追々暑にも趣候　折角御兩所　御保護　水土にあたらす　拜天の事に御座候　御兩所ともに下戸にて御座候　少々宛は　なれざる水土の地にては可然かとも存候

一、永松清藏西國より歸り　疫にて打臥候とも承候　如何御地疫邪行はれ候や　もし左候は　雄黃鼻舌ニ御爲りなと　御なき御用心第一に御座候

一、氣むつかしく獨居を好候故　肌肉は常の通ニて　內甚熱を相覺候　經脈の間に腐蝕すべき邪を催し候てはなく候やよく御問　猶又治方御つね經驗の方なと其內御申遣被下度候　いつれ養治可然事と存候

一、彌右衞門なと盆後ニハ歸り可申候　其節又々委曲可承候

一、先書ニ御茶屋の記進候　其內　如與鷗鷺忘者　如與鹿豕遊者　とかへ申候　鹿豕と遊ハ　舜深山の中に遊ふの時の話　孟子により候　松籟を天籟と直し申候　前に松籟と出候故に候　御內見ニ備見候　廿三四日頃出府可致候　始終は殿の思召とも承候

一、壽助殿に別紙不置候　一同に御覽可被下候　御留守居　今月廿一日　御宅御引取の筈ニ御座候　左樣に思召候はとかく申內　最早四五十日にも及申樣ニ相成候　いかゝ御稽古相應ニ出來候や　無御油斷御出精　故鄉の錦と御待申入候　其內幸便次第　御樣子承可申候　恐惶謹言

六月廿七日　　三　浦　安　定　晋

三　浦　修　令　殿
永　松　壽　助　樣

* 永松壽助は女婿　君彝又克孝と號して、安岐の人である。先生の長女菊を天明元年嫁がした。其時鉄槃訓を書いて與へたとある。然し菊女は文化二年四月五日、三十九歳で歿したといふ、其の夫壽助の弟克家は杵築の荒巻家から、篠と

いふを娶つた。其の嫁兄弟が頗る仲がよく、郷黨で賞讃の的となつてゐたが、妹篠も同じ文化二年八月、三十三で逝去した。すると篠は姉の德を忘れず、其の夫に同型の墓を並べて與れと遺言したので、一族も憐れがり、希望通りにして今も安岐の大儀寺に並び立つてゐるといふ。

時に先生が、藩公に召され城下に出たのは、天明六年五月十一日から十四日迄、但十三日は一日暇を賜はつて旅宿に休養してゐたので、筆を執り修令永松の二子へ藩公に召された時の感想や、旅行中の心得など、書信したのが、以上の二通である。

大坂には學友剛立先生がゐる。此頃は藩公に召されたりして忙しい、返却の地圖は受取つた。返書は歸村の上にと、傳言してくれ。

水土に馴れぬから、飲食をほしいままにせぬがよい、暑さに向へば水を飲み過ぎたり、瓜西瓜を食ひ過ぎたりしてはならぬ。他家に招かれ御馳走になる時も、滿腹にならぬ程度に馳走になれ、定めし麻田先生や與津公錫、加藤周平の處で御世話になつてゐるであらう。舊師綾部先生の家庭指南の版が見事に出來るとか、自著詩轍も近く出來るであらう。

「拙老は小串氏への病用で、十日に出府し、十一日から藩主に拜謁してゐる。有難い仕合、まだ暇は出ぬが、永く逗留はせぬ、近く歸山する、委細は別帋で見てくれ」云々とあるが、諮問奉答の事は別帋とある。同女婿安東貞五郎に宛てたものと同樣のものかと推察してゐる。

次の一通は翌六月廿七日の日附で、天地訓を淸書した、麻田先生へ正して貰ひ、悪い所はよく聞いておけ、追々天地韜の內日月篇の淸書も出來る、先生の意見を承りたい。兼て申通り、日影は陰散陽聚の天地、天地は氣散物結云々と高尙な天文條理の事を細々と書いてある。兼て申す通りとあるから、內で其の子修令等と常に天文上の不審など談じ合つてゐたことが分る。又修令宣業二子も一通り熟うした天文上の事を理解してゐたことも分る。素養のないものには到底判らぬ星曆學上の熟語數百言を羅列してある。麻田剛立との智識交換はこれでも一斑を知る。

追々暑さに向ふ、兩所共水土にあたらぬやう、兩所とも下戶の方だが、旅ではあるし酒の少々は飲み習つてはどうか、其地に疫邪などは流行はせぬか用心第一である。拙老は、氣むづかしく獨居を好むため、熱發を覺ゆ、經脈の間に腐蝕すべき邪を催してはゐないか、よく尋ね治方なども聞いてくれ、いづれ灸治がよいと思うてゐる。此頃は稽古も相應に出來る事であらう。油斷なく出精して、故鄕に錦を飾ることを期待してゐる云々とある。此の二通の書信で、二子の上坂は京坂で醫術修業の爲めである事が分つた。

十月十五日附、脇蘭室の手紙に、天地宿癖の事を麻田に質問すべく、愚息を上坂さしたが、先月廿一日無恙歸省したとあるから、五月初めに出て、九月には歸省したものであらう。

# 八坂彌一郎宛

## 文献通考康熙字典等御願（日名子太郎氏藏）

覺

一、廿一史　四百匁位
綱鑑錄入の十七史にて御座候や　眞の廿一史ニ御座候や　兩様御書わけ被下度候
一、文献通考　四拾匁位
文献通考纂にて御座有ましく候　眞の文献通考正編はかりに御座候や　正續文献通考にて御座候や　是又品々の直段御書わけ被下度候
一、韓柳文、注本全部、御聞繕可被下候
一、康熙字典　八九十百匁位



大本ニて御座候や　小本にて御座候や　是又御書わけ被下度候
一、明史　直段
右の通重疊奉願候　尤頼候日に至つては駄賃にて　取寄申候事にや　如何致方有之候や　代物拂かた等御つもり等も替匁候事にや、脇氏へ御相談可被下候
一、官用唐紙是は定而直段時ゝ狂ひ申候　是又貳百枚直段當時にして　どれ程に御座候や　御聞可被下候　已上

卯月廿四日　三浦安定

八坂彌一郎様

# 岡松數右衛門宛

## 御賢息御入來（日名子太郎氏藏）

貴翰拜見仕候　辰下御平安　被成御座奉忝喜候　拙宅無異事罷暮候　御安意可被下候　然ハ今般
久々ニ而　御賢息御入來　暫御滯留可被成段承知仕候　御機遣被下間敷候　隨而兩所の御出產
白銀二封を忰方迄　被懸貴意忝奉存候　他文略　猶期後音　恐惶謹言

卯月六日　　三浦安定晉

岡松數右衛門樣

奉復



# 藤井元藏宛

## 御安泰御踰年（中津、村上和三氏藏）

改年御慶無際限申納候　御安康御踰年可被成大悅奉存候　敝宅無異事加年仕候　右御祝詞申述度
如此御座候　尚期永日之時候　恐惶謹言

正月五日　　三浦安貞晉

藤井元藏樣

尙々皆々樣ニ可然御祝詞奉願候　妻より御伺迄申上候　又五郎隨分無恙長敷罷在候　御機遣（キツカヒ）被
下間敷候　已上

## 寺川英庵宛

### 鯉魚湯用方御示（高田龜市氏藏）

御平安奉察候　手前病人先同道罷在候　然者鯉魚湯ニ水率用方御示可被下候　近日用見申度候
照し合せ申度　已上

八月十七日　　三浦安貞

寺川英庵様

用事

### 畾尙恒字ハ久吾淸江ノ人（高田龜市氏藏）

淸江久吾畾尙恒



淸江ハ地名ト覺ソロ　當時一統志等之書不在欠檢出ソロ　萬姓統譜中ニモ　久吾之復姓ミヘ不レ申
同書一百二十四畾姓アリ　衞大夫食采于畾因氏焉トアリ　望月三英の明醫小史ニハ久吾ヲ字ト有
レ之ソロ　字ノ書所チト味アル處ニゴサ候エトモ　是等モ例ノアル事ニテモ候半　小史畾氏ノ傳記
左畾尙恒　字久吾淸江人　家世業儒　以經術登仕籍者　指不勝屈　而遞傳皆以杏林旌勝而醫學愈
玄　久吾究心於醫術數十年　博取而精研之　深思而透悟之因病製方不膠千古方　得意應手不拘于
成說　所著有奇効醫述　話幼心法　註僞刊有醫學彙函　蓋後人依託也

### 鴻音到來御微恙にて（辻治六氏藏）

鴻音到來御微恙にて御勝不被遊候由　如何樣御宿疾疥瘡爲外邪ニ聲援候故共ニ御座候半歟　折角
御保護可被成候

一、詩轍未成の書御座候へ共　御心安奉存候得は得後便進可申候

一、巴豆霜能止瀉事本綱ニも出候かと覺候　然ハ方止瀉か感應丸用　巴豆霜の能止瀉ニ巴豆霜瀉
の義ハ存不申候

一、小白帶鈎ヲ射候と覺候　折節史記も宿ニ無之候故　五車之韵端ニハ書付置候　猶それにて御
吟味可被下候　帶鈎と候へは　大帶なとかけ候鈎ニと被存候

一、三種の草此方定見決而無　荊芥野生覺不申候　先年　蒔候てはえ候を見候　久敷事故とくと不覺候　香薷追々分り可申候　澤蘭存不申候　見當候は御尋可申候　薺○同前ニ御座候
一、一件別紙　御覽可被下候
一、敢語開卷之二字　草廬書入候由追て下り可申候
草廬敢語見候而　誤而　賞美にあひ　自分著書不苦候を見せ申度由申來候　任御心安御沙汰候
萬々申遣候　溫冷交至の候折角御保護可被成候　恐惶謹言

二月十六日　三浦安貞

寺川英菴様

*草廬とは詩轍の叙を書いた彥根の前文學、伏見の人、詩轍の叙を書いたとき年七十とある。



## 池邊橋左衛門宛

### 門下屬文は弓柳二子ニ候　（今村孝次氏藏）

一、書附歸鴻候　華鳥之時節御吟興奉察候　野老無事故致迯迎烏兎候
一、御詩稿拜見　此節之詩卷ハ大分新意ヲ覺　悅申候　折角御出精　此上はそろ〳〵御讀書被成其上之功ヲ以て被成候上者進一歩ノ事に御座候　此節委曲子玉生へ申入候
一、詩轍御加文被成度旨　御文數次及展讀候　序裔文學草廬へ賴申候　跋文未相決不申候　門下少く屬文にても相成候ハ　弓柳二子に而御座候　惣中の相談次第ニ相成可申　拙一存ニ難決候
惣中柳生を推候得共　柳生達而辭退申候　弓生ハ當時不愼　當地へも參得不申候得者　難申候
惣中何れ柳生を推申候　足下の御文章いつれ小文之御仕立ニ相見へ申候　畢竟寫工ヲ記し取候樣ニ相ミへ申候　詩轍尾へ附言被成候も可然かに候　此節点檢御返し可申候得共　思召之通ニ上ヲ

換ズニ被成度様にも　御紙面相見へ申候　乍去筆削ちと不相加候而者　思召之處得と承候上者　愚存御心に相叶候者　取はからひ可申候　因て此節指扣申候　若大文御望も御座候は丶　子細附子玉生口頭ニ御聞可被下候

一、修令も當時中津へ致遊學候　來月末罷歸可申候　任御心安　御沙汰申候　恐惶謹言

二月廿八日　三浦安貞晋

池邊橘左衞門様

## 従弟豊田禎藏御方角へ（今村氏寫本）

坂子玉歸省乍返書走筆候　春寒猶盛に候　庭闈始御清安御淩可被成奉珍重候　拙無恙擁衾候

一、御肴相達忝致賞玩候

一、御作　面白承候　此節及還壁候

一、御認被成候を見候に　誠ニ御隙入候段　御尤奉存候　打より見事に出來候由申事に御座候　此上御出精可被下候　小串柳藤三生へ宜敷可申達候

一、拙妻従弟豊田禎藏と申者　近來浪人無據當時姫島へ遣申候　此仁至而手かたく　少々四書五經素讀等御覺申候　小料理も成申候　武家邊之義（ツキアヒ）も一通心得居候　少々療治仕候　何卒御方角御世話に思召被下候様成義者出來申間敷候哉　委曲子玉可申伸候　急候義者無御座候　宜敷御考可被下候　御親父様にも御物語可被下候　恐惶謹言

閏巳極月十九日　三浦安鼎晋拜

池邊橘左衞門様

## 乍無禮雌黄相加候（今村孝次氏藏）

無レ程碧雞報レ春　毎物新に覺候　御平安御踰年被成奉賀候　拙老無異事　經ニ霜雪ー迎ニ烟霞ー候　且客冬念日之貴札　昨夜落手　舊臘之起居悉之候　爲御餽歳黒頭〇二十枝を御嘉貺　文房之幽事相揮可レ申忝樂申候　御作造を宜敷承候　乍無禮雌黄相加候　是にても可然候者　其内御投被下度候　其已前の御狀返書はとく指出候　誰家船公喬者江に流し候覽無覺束候　詩轍も冬中絕[消]成就又一兩月をのべ候半と[奏]存候　拙詩稿も當年上木を心かけ候者有之候　大かたハ左様に相成可申候　下しらべ共仕候　萬々不能腐毫候　恐惶謹言

正月三日　三浦安定

## 此地逗留も御聽達 （今村孝次氏藏）

十四日之御投書　今夜於燈下入手　十一日夜に入御無變御還家被成候段承知　御渾家御平安此地御逗留之趣も　御家嚴樣御聽達　御氣にも應候　御紙面於拙甚本意彼是安心仕候　誠御踰山數日御淹留久々にて　申承別而者一件御出精被下千萬忝奉存候　唯々御苦勞かけ候段恐入候事に御座候　以來拙も所々奔走御謝辭も不申述　失ニ本意ニ候段蒙御海容度候　詩轄も來正月には　点檢相濟可申候　最早壹遍ハ見被申候との事ニ御座候　拙老も　此内一通り見申候　見候へは所ミ添削も出來申候　とかく一通ハ拙子書不申候而者　叶申間敷候　其上ハ必ミ御賴可申上候　何卒此方春内に出來候へ者大事に而御座候　無覺束候　杵築より今以何事も何方よりも不申來候　工藤生ニ御逢被成候由　此生殊之外息長キ男ニ御座候　御序ニ御催促可被下候　自是も可申遣候

一、數通之御狀各相達申候

一、李仲和之義相心得申候

一、廉介生ニ一通用事申遣候　奉願候　其外之書狀是又同樣奉賴候

一、八坂生書狀參候得共早速隈本へ罷越　年内一盃ニ歸國　早春には見舞申との事ニ候故不及裁復候　歸國之上何分可然奉賴候　且玄語被願候貸書一二卷出來可申候　料物ハ拙子取替置可申候間　此旨無御失念春之節者持參被致候樣御申達可被下候

一、別紙不呈候　御兩親樣御叔父樣御令閨樣へも何分宜敷御傳聲可被下候　醜妻も宜敷申上度旨申候　寒威折角御自愛可被成候　恐惶謹言

霜月三十日　　三浦安貞晋

池邊橘左衞門樣



## 秋月侯敢語御賞美 （大塚留吉氏藏）

華書拜閱冷氣稍相逼候へとも　御壯健御凌被成候由　欣慰無所加候　拙無恙催犬馬之年候

一、御願申候早速御調被下　紙數之物扨々忝　文字隨分鮮明　別而重寶可仕候　尙々入御念詩草等御うつし被下候由忝奉存候　乍去御願申程出來不申候　御出之節ともハ又々御願可申上候　且書物之義隨而被留置不苦候

一、豐田生より布二端　慥ニうけ取申候　宜敷御禮　猶一通奉願候

一、美忠書狀先達而進候　御落手と奉存候

一、玉英老より承候は　郡代所にて御講書も有之候由　自是も致歡喜候

一、筑前秋月侯敢語御覽御賞美政事有益之書　右膝元ニ可存由　本日所持　平松俊貞子より傳語申來候　且松平出羽守樣家中萩野記內と申仁　敢語見被申候而　書翰江戸より參候　結〻交度由申來候　京都草廬も當時玄語見候由　是ハ評ハ不承候　贅語二卷　玄庭主うつし歸國の處　峯山侯京極備後守樣より　御懇望ニて　被指上候由　此內又々被參物語可有御座候　任御心御沙汰申上候　御他言ハ御斷申入候

一、皆々樣へ宜敷奉願候　恐惶謹言

十月十三日　　三浦安貞

池部吉左衞門樣

*僧玄庭は丹後の人、双山寺に寓し互に往復あり。「春夜憶庭公」「送三僧玄庭還二丹後天橋山一」等の詩がある。

善次も俊藏も手前引取（全集　八〇四頁）

善次も手前引取申候て城下へ醫業稽古罷出　俊藏も當暮引取申筈御座候　乍去段々新門も有之候故　不相替罷參候　富田生書物之義相心得候　折角御壯健御仕舞御踰年可被成候　來陽萬々可申承候　皆々樣へ何分可然奉賴候　恐惶謹言

極月十三日　　三浦安貞

池邊吉左衞門樣

*池邊氏は當時鶴崎にて醫を業とす。次に池邊氏に關する梅園作の詩を掲ぐ。

送三池邊生還二鶴崎一

有客忽乘黃鶴歸　風烟遙指舊庭闈　相思千里命仙駕　又向雲山深處飛

# 小野昌庵宛

## 法則を天地にとり候へば（辛島詢二氏藏）

卯作生來訪ニ付御投書披緘候處　御起居御清健被成御座忝喜仕候　弊方無二事故一消二光陰一候　御繫念被下間敷候　然者學箴貴命難レ拒　一二之鄙衷申述候處　御用捨之一ニも相成候樣被仰下　乍赧然慰二怖懼之意一候　鳩杖之義追々可申上候　今朝書狀數通檢出之暇ヲ不得候　且條理不被捨置御玩索被成候由　拙より開眼候得者　先達立言垂範之徒皆自立趣　これによつて馳驅し候樣ニ見へ申候　天地條理ヲ以て法則ヲ被進候　自家より立る之法則ハなき事に候　法則ヲ天地にとり候得者。　彝倫之道より百之技事ニ至候　而も天地に從へは自得二其宜一候　たとへは菽乳ヲ製し候に鹽鹵をさすかことく　不過非不足之節ハ天に候　たとへは吳藍ヲ以て紅ヲ染るに梅酢ヲ用ゐることく　天之則不從候へば終になる事なく候　此方より趣を立候得ハ　天地之方を引付候樣になり申候　天地條理之誤らざる處をしりて　是により候事に御座候　とかく先達豪傑自爲レ趣而法則ヲ建立いたし候樣ニ覺候　贅語中立準之篇ヲ書忝（忝はさんずゐを消略したるにや）申候　故ニ晉常ニ天ヲ師とし人を友とすると申候も　しらざる人は晉を倨るといはん　なれとも其實　天にあらざれば師となしがたく候　天則にかなふ事ヲ申候者皆天ト同敷　我師御座候　胡盧々々御自愛可被成候

恐惶謹言

十月廿日　三浦安貞晉

小野昌庵樣

## 錦囊の珠玉御暗投（辛島詢二氏藏）

華牘薫誦　寒威追日肅候へ共　貴體御壯健　詞壇御遊戲　依舊候段　不堪大幸奉存候　如仰微軀暫爲造化小兒被惱　別界にも赴候哉と存候處　又引二殘喘一候仕合罷成候　乍去次第落魄御憐察可被下候

一、錦囊之珠玉御暗投　再四玩賞面白奉存候　愚存宇作生迄申入候　御考可被下候

一、條理御工夫被成候へ共　於醫事御發見も無御座段　御尤奉存候　事物之境御考可被成候　兎

角醫事より國家之治亂等皆　氣之感應之間に有之　感應之體　鬼神不測　是又條理にて御座候　是又御考可被下候　拙寓意も筑前南冥殊之外ニ喜條理も少々被繹候由　門生元龍歸相語申候

一、愚息配偶之義　御祝詞忝奉存候　當夏見舞に參候を留置介抱爲仕申候　先安堵仕候　老懶（ラン）與塵冗相兼草々裁復奉希御海容候　恐懼謹言

十月廿九日　　三浦安定晋

小野昌庵様

＊先生の寓意の一篇の成つたのは、天明三年七月。柳元龍の筑前に遊んだのは、先生の「送柳元龍遊筑前序」で見ると、天明四年閏正月である。其の年元龍歸鄕の際、龜井南冥の弟の曇榮といふが、梅園先生に寄する詩を携へて歸へり、先生も之に酬いた詩が、詩集にあるから、此の書簡も天明四年のものであらう。男黃鶴の妻帶したのも、此の年と見てよからう。

## 詩轍一部呈坐右（辛島詢二氏藏）

華書從卯作生相達御平安之狀悉之　大慰鬱陶候　殘喘猶引于世候　御憐察可被下候　春にも成候者　南遊可致かの段忝奉存候　如何程ニ可有御座や　無覺束候　足下にも樣子により御尋も可被下段　左候ハヽ心緖可申述候　御佳篇も御座候由　追々相見可仕候　詩轍成就仕候は一部呈坐右候御覽可被下候　世忰も宿癖難已　故人麻田氏ニ暫遣置申候　九月下旬歸省仕候　條理も御進被成候由珍重奉存候　拙者も少少進申候と覺申候　贅語之內一二章門人等　上木之心懸にて脫稿仕候追々大阪迄指遣可申候　來年中にも出來候べしと存候　出來仕候者　懸ニ御目ニ候　贅語六七十篇之內纔二篇可笑事ニ御座候　人身之條理も少々相分り候事とも御座候　いつれ禿筆難申盡候　藩侯延見之義及ニ御沙汰ニ候　誠望外之義ニ御座候　乍去藩侯者格別之君にて追々雨露之化も及蒼生可申大樂申候　他事字作生より御聞可被下候　恐々謹言

閏十月廿七日　　三浦安定

小野昌庵様

＊本書簡は杵築侯が延見せし事や、詩轍の脫成の事や、黃鶴の大阪遊學の事等がみえるので、天明六年のものであることと明瞭である。

## 弓崎俊平宛

徂徠鈐錄見申候（神戸、田椽竹藏氏藏）

一、拙とも唯今　徂徠鈐錄見申候　不案內成事故通しかね申候　此內ハちと韻鏡見申候　少々得益も有之候得とも　とかく通し不申候　盆前故諸兄大かた引とり申候　四五人相殘少ミ靜に御ざ候

一、秀英も　講ハ堀美喜介　療治ハ山脇道策へ被參候由ニ御座候　美喜は造酒かとも存候得とも彼方より美喜と書來り申候　其語ハすきと取出し不申候

一、周郞兄　孟子近日如何に候　御序どなたにも　可然奉願候　恐惶謹言

七月二日　　三浦安貞

弓崎俊平樣

＊柳（柳元龍）弓（弓崎恕）と並び稱せられてゐた。矢野直（字雖愚、號子欒）が梅園三語の跋を書くべく稿を起したが、僅に弱冠を過ぎ奄として歿した。弓崎其の志を繼ぎ、明和丁亥の年三語の跋を脫したとある。弓崎俊平については梅園に次の如き詩がある。

送弓崎俊平

圖書難奈抱痾身　不得孖山雲水親　他日垂揚生左肘　隨風吹入後園春

# 綾部富坂宛

## 晋か所見四方の諸君子と合不申 (渡邊勘藏氏藏)

當代之豪傑學習一洗の功なきにはあらす候へども　甚不修邊幅其末流當今に至て相見候　當時の先生と稱する者　以道學而修行の人に目し放蕩を以て風流と稱す　故に今の青袍は其志行却て常人に不及唯白眼以接ㇾ人　晋生質辭藻に拙く偶吟哦仕候も興あれは成し興なければは不作　自拙きを知るを以て四方の諸君子と抗衡の望なく候　先生に親炙不久候得とも道唯彝倫にあるの所深く服膺仕候　條理を取て天地を大觀するに於ては前に不ㇾ見㆓古人㆒　此に於て竊竊乎として章句訓詁をおさむる事不ㇾ能　是を以て晋自量るに晋か所見必す四方の諸君子と合申間敷候　今日世の晋を望むもの皆　晋か意に非候　是によつて晋竊に望を四方の諸君子にたち候　若同調の人御座候はば於御李車 (李車は誤寫?) 而晋これを憚るものにあらす候　是無用の言に候得とも　彼書中に藤子の事など も見へ申候故　心事ちらと書し候　必や此意彼地へ御沙汰被下候事にては無御座候　鄙意又藤子にあらす候　望は四方の君子にたち居申候　辭藻に拙く訓詁にうとく經史に不通　是自しる處に候　榮利に走らず　自之分上に安じ候は　頗自得之境有之候　條理を取て　天地を大觀するにおゐて　肩古人より卑きを不覺候　聊おもふ事有之吐露心情仕候　爲狂爲癡亦只從所見而已

即日　晋

富坂先生

几下

* 綾部富坂とは其の師綾部絅齋の長男、梅園より四歳の年長であつて、杵築藩に仕へ、天明二年九月三日六十二歳で歿してゐる。梅園常に先生と稱し兄事してゐた。此の書翰では大いに抱負識見を語つてゐる。また次に掲げた梅園の詩は兩者の交情を語るものであらう。

壽綾部富坂先生六十

不ㇾ驀南指碧芙蓉　取入壽杯起献公　末棹煙波泛湖上　別開天地竺壺中　梅花當宴偸春發　松樹覆庭與鶴同　無復絃歌入塵乎　似追鷗鷺學㆓仙翁㆒

## 綾部佐太郎宛

### 絅齋詩文集最早出來 （磯矢康吉氏藏）

本月十八日　貴墨落几上　春蘭御健在候御様子　重々至祝珍重仕候　野老蠢然起臥仕候

一、佳作今以見出不申　恐入候　乍御苦勞今一應御書寫可被下候

一、此内子璞集今般先生御遺稿共又々御遣被下落手仕候　追々御調可申上候　原祭如何難決義ニ御座候　先生詩集文集ハ最早相仕申候　附錄ニ取懸申候　北村可昌ノ復之先生墓誌有之候様相ミヘ申候　此節ハミヘ不申候　是ハ大家之文章附錄ニ入申度候

一、晉書追々指上可申候　暫相待可被下候　其節〇〇文集　有終先生之御遺墨一同ニ指上申積リニ御座候

一、追々御越山も可被下候段　折角奉待候



一、近作一首　懸御目候

一、寓意出板之後示レ人候處　一向如レ聾如レ啞　毀譽襃貶不レ承候　長崎鼇洲和尚ニみせ候處　大稱揚ニあつかり申候　詩別懸御目候他期ニ嗣音ヲ度候　母堂（母堂は富坂夫人也）様宜敷奉願候　恐惶頓首

季春廿七日　三浦安鼎

綾部佐太郎様

### 家庭指南序淸記差上 （滿洲、本庄完氏藏）

尚々公錫玄遷（公錫は興津氏　玄遷は佐野氏）二子御索居學友も無御座當時御寂莫奉察候　乍去志さへ立候得者出來候物ニ御座候　一倍精神御ふるひ　御發憤可被成千萬奉存候　已上

中節先生御行狀（中節行狀とは輔之の作　父富坂の行狀記である）拜見仕候故指上申候　已上

先頃者御入來被下久々接ニ紫宇ニ奉大悦候　公錫君最早御解纜可被成奉存候　且剛立公より御細書忝奉存候　如御便り御座候者先落手仕候段　御申達可被下候

一、家庭指南叙淸書仕指上候　若誤處も御座候や　被附御氣可被下候　關防之印をし進申候　是者家庭指南序と申下ニ押申事に御座候　此儘ニて御上し可被下候　板下出來之上　彼方にて押可申候　拙名字之印　手前に御座候者貞ノ字にて御座候　大坂加藤周貞に預け置候印御座候間　三

浦晉ノ印上　安鼎之印下に押候様御申遣可被下候　先用事のみ申上候　恐惶謹言

二月十四日　　三浦安定

綾部佐太郎様

＊綾部佐太郎、輔之、其の師絅齋令孫で、富坂の子、同杵築藩に仕へてゐた。絅齋詩文集は全く梅園の手により成つたものだが遂に上梓にならず、梅園全集刊行の際之を巻末に挿入してゐる。其の絅齋（卽ち復之）の墓誌は北村可昌（伊兵衞と稱す）の作で、梅園全集八九四頁に出してある。文中有終遺墨とは、其の師絅齋の父、有終（諱道弘）の作品である。

＊梅園は其の師絅齋の遺編、家庭指南等の上梓につき、頗る好意を以て、麻田剛立等と計り上梓が出來てゐる。與津公錫、諱は彜孝、絅齋先生の孫婿とあるから、富坂先生の女婿であらう。梅園先生の門人で、公錫の江戸に之くを送る文、公錫の平安に遊ぶを送るの文などで見ると、餘程信頼ある門人のやうである。



## 甲原幾平宛

### 漢字數四萬足らすあり候（末綱琢磨氏藏）

本立殿に承候得者　春霖之節御無變御暮被成候段奉賀候　拙者無恙消日申過候　御安心可被下候　正月之比は御祝書忝奉存候　自ゝ是は取紛御返事も不申述失禮罷過候　右申譯旁得御意度　如此御座候　恐惶謹言

三月二日　　三浦安貞

甲原幾平様

尙々日本通用の字數御尋　日本の字は先いろは四十八字　其外和字と申もの昔は大分出來候と相見候　今はとれほど御座候や不存候　杣畠なと申類和字にて御座候　又俗字と申もの有之候　躾

粇（コウジ）などの類にて御座候　此外漢字三萬餘　四萬不足ほとゝ見へ申候　しかし急度極り候ものにて御座なく候　とかく世世にまし候方にて御座候　其外からにても　俗字と申すものも別段にありと見へ申候　其外は國々にて色々の字御座候　朝鮮の諺文天竺の悉曇各各其の國其の國の字きわまりなき事と被存候



# 毛利泰元宛

## 灸書宜敷品不存候（松本立馬氏藏）

本月七日之雁書落几上　杏林御無變之樣子承之慰悦無レ所レ加候　老子蚤然仍舊而添二白髮一候　夙志不被爲遂　御感慨之御紙面　世の中ハ俗物而已多候へ者　與御心事と被變候事共可有御座候　月に村雲花に風と古人も歎候事ニ御座候　只々何方ニても無御油斷御勤被成候へは出來可申候事に御座候

一、漫遊雜記之義之入御念候御義承知致候

一、灸治毎々御得効も御座候由致歡喜候　灸書宜敷品不存候　後藤家之　艾灸通説者御覽被成候半と奉存候

一、仲景者　古來立方之祖と推　無二異論一事ニ候得者　左可有御座候　管見ハ古今萬國平觀之上

たとひ仲景宜敷御座候迚　壹人ニ而某能盡し申さん事とも不ㇾ存候　己以吉益子仲景已後之壹人と自負被成候も　十二方之瀉劑ハ仲景之外ニ多出候　彼方ニては仲景ノ意を得候へは方ハ自在と申様ニ承候　左候へは東垣家ハ東垣家より仲景之意を得て　立方と可ㇾ申　其様も其意ニて　又〇訓と可被成候　此處ハとかく自得自信ニ御座候　拙法方ニうとく候へば　仲景方之義とかく論ヲ入候程之力ニ相成不申候　六陰六陽ヲ分候様なる處ハ　天地ニ正ニ合候事とも不ㇾ存候　乍ㇾ去是ハ未熟之論に候　賢哲に御問訊可然候　恐惶謹言

八月十三日　　　三　浦　安　貞　晋

毛　利　泰　元　様

奉復

## 家老中根齋と申人の娚（毛利莫氏藏）

只今家老中根齋と申人の娚にて御座候　足下の義被承及　何卒官途の志は有之間敷や　拙者へ承合せ呉候様にとの事にて御座候　尤醫家にては無御座候　當時困窮被致候へ共　君德に於ては御聞及も可被成候　明哲慈惠之君に相違無之　行末はたのもしく奉存候　もし官途の望も御座候はば　御取持も可申候　此處は先よりも不申來候へ共御夫婦にても苦かるまし候や　其義不被存候て申來候や　又又木付の義承可申候　いづれに相成候とも　御返事不ㇾ被ㇾ下候ては　拙者こまり候に付　兼々奉願候　已上

極月廿二日　　　三　浦　安　定

毛　利　泰　元　様

＊毛利氏、毛利元就の弟元綱に出て、元綱の曾孫貞直豐後に來て歸農し、其の子孫代々醫を業としてゐた。太玄、又泰玄ともかき、弘綱の長子で字は可貞、當年の常行村、今の高田村で仁術を業として、格式は中小姓であつた。其の長子節齋（字樂甫）、次男到（字愼甫、號は空桑）は帆足龜井の門に學んでゐた。

# 加藤善五郎宛

## 忰方迄御恵投（玉井頼光氏藏）

貴翰拜見段々御引立被成候得とも小〻餘毒十分御快無之候段　折角御保護可被成　御親父様にも御成御同御在宿も不被成候趣　御苦勞奉存候　猶御病中ニ懸御意御使札殊年頭御賀儀兩種○　忰方へ乾柿一連御恵投不淺受納仕候　外御樽並御肴御快気御祝儀として　被送下被爲入御念候御事痛入奉存候　如何樣其内得御意可申述候　右爲御禮如此御座候　恐惶謹言

二月廿日　　三浦安貞晋

加藤善五郎様



## 一樽御快復の印迄（玉井頼光氏藏）

尙々御親父様別紙不呈之候　可然御傳可被下候　且御病中御遊事御斷申入候　已上

此間ハ得御意珍重奉存候　彌御清復可被成奉察候　且乍輕少一樽御病氣御快復之印迄　致進呈之候　御受納希之候　恐惶謹言

正月朔日　　三浦安貞晋

加藤善五郎様

## 加藤周平宛

### 御小兒今以呻吟 （玉井頼光氏藏）

如喩渾家觸痲毒打臥　聽而及絶煙可申程之仕合　先ハ段々起立　小兒今以呻吟　追々快復致候へかしと存候　御勢候之中　御尋被下忝奉存候　御内様如何　御無難ニ御乘取被成候哉　折角御調護可被成候　不備

九月廿五日　三浦安貞

加藤周平様

### 見事之御肴 （玉井頼光氏藏）

一筆啓上仕候　彌御平被成御座　大慶奉存候　然者此間者　見事之御肴　被饋下忝賞玩仕候　右御禮申上度如是御座候　恐惶謹言

五月十日　三浦安晋

### 無別事御勤 （玉井頼光氏藏）

尙々此内ハ御見舞忝奉存候　可然御申越可被下候　あまり〳〵　敷罷在候ものにや　見世にて御用も濟申候故と奉存候　已上

愈無御別事　御勤可被成　奉珍重候　就者日外米之義御沙汰申候得とも　當年ハ無盡　右之相談相止申候間　先御貪着ニ及不申候　追て又々御願申上度奉存候　已上

霜月七日　安貞

### 小原隱居へ御届 （玉井頼光氏藏）

どふか近日御風邪之趣ニ御承申候　淺深如何何卒急御本復も被成候へかしと奉祈候　然者此壹封

小原隱居（小原隱居は後藤運平なり）ニ御届可被下候　尤便無御座候得ハ春に成候ても不苦候　外に色紙短冊夾板ニ二つ是ハ小原へ其内上置申度候　書狀ニハ此事不申〇〇御うけ取置來陽緩々御遣可被下候

折角御自重御踰年可被成候　早々同便如此御座候　已上

十二月廿九日　　三　浦　安　貞

手　野　周　平（周平は手野村庄屋なりし）様、　外ニつゝみ物一ツそひ

## 玄庭主へ詩一本進候（矢野伸太郎氏藏）

愈御清福奉賀候　然者廣田生より手簡參候　相届申候　從彼詩轍上木隨分加力致度由　銀五百錢ほと可致と申來候　此旨各方へも申出而彌御出精被成候様にと申事ニ御座候　五百錢目と申事ニ而候半と被存候　左候得は餘程此節の助力と相成可申候

一、御村貞平へ金子一角是ハ玖珠御家老吉澄右門殿よりの加力　右金子傍〻添書卽右門殿自筆ニ而御座候　是ハ彼仁面目成義と存候付進し候

一、玄庭主へ詩一本進候　御賴可被下候　もはや跡ニ成候者不苦候　已上

二　月　五　日　　三　浦　安　貞

手　野　周　平　様

## 御平安欣慰（賀來粲二郎氏藏）

尙々敬八殿にも可然奉願候　已上

拜見　御平安欣慰　誠疇昔過飲　乍例荷ニ厚意一候　併久振緩々握手不淺奉存候　一件彼方とも御物語候處　工面も可有之由　猶柳公山にも御出會被成度由　是ハ如何様とも可相成候　使及暮艸々申遣候　已上

十　月　五　日　　安　貞

周　平　様

## 作進之募緣之序（玉井賴光氏藏）

尙々〇〇（缺）語申候淨滿寺門〇〇（缺）序進候　御覽可被成候　御返却ニ及不申候　已上

疇昔夜來御過訪辱　乍去草々御歸去　不堪遺憾候　其節ニ作進之募緣之序の寫　懸御目候　不及御返却候　已上

七　月　廿　三　日　　寸　々　武

子　睦　兄（周平の號？）

## 雨羽織傘進之候（玉井頼光氏藏）

御藥致調進候　又々灸治等隨分可然候　已上

拜啓頃日者乍例投宿御世話被下忝奉存候　吉弘にも立寄候へ共　小雨之内及歸宅候

一、雨羽織傘二本　今日進之候　忝奉存候　雨羽織はほし候へ共霽無之候へば猶御ほし御直し可被下候　手拭一條是ハ敬八殿へ御返候　禮之段可被下候（さかひ重括り細引一綂返進）

一、挾板之義修令へ申通之者入御意候御事ニ御座候

一、御令閨様へ〇〇御禮奉願候　已上

八月廿六日　三浦安貞

## 加藤周貞卒し贅語上梓滯頓（賀來燊二郎氏藏）

昨日は貴書忝拜誦　如喩春事爛珊（爛珊は爛燦）益御淸福被成御起居候由珍重奉存候　小生先達鶴崎行無恙歸山仕候　贅語校定五冊出來仕候處　然處大坂加藤周貞物故申候段承申候　甚當惑仕候　右訃音北浦鍵屋にて承候故　歸路綾部顯藏（綾部顯藏とは佐太郎の事なり）殿　懸ニ御目ニ左候儀序に御噺申候處　御藏屋敷淺野重兵衞へ賴候はば埒明き可申　重疊左様に相成候はは、書狀此方に可レ遣此より書中相添可遣と被仰候　右之通にて宜敷候哉御考可被下候　先日の銀子は加藤へ遣候事は　御見合可被成候　其内拜顏右體之義も得と御熟談仕度候

一、先達ては良介殿御無難御歸國奉祝候　尚又弊宅へも御出被下候由　他行不得貴意候　其節は爲御土産種々御惠被下忝被存候　是よりは彼是御無音可罷過候　右荒々得貴意候　萬拜眉

頓首

三月廿七日　三浦修齡

加藤周平様

# 玄　應　宛

## 履軒文集御無心（大坪寅太氏藏）

拙者も日出ニ來リ　漸ク昨夕(ユウ)かた歸家仕候　道履御清勝と奉存候　久しぶり他出　おもしろき事とも多く御座候ひしか　とかく懶性山中のよきには不如と覺申候　御文史近來如何程ニ御すゝみ被成候哉　承度事ニ御ざ候　然ハ履軒文集得申候　寫置度候　近比乍御無心奉願候　五十丁には足り不申候　內空紙多く御座候　可成事に御座候者御願申上度　先押而願上申候　其內拜顏可申上候　已上

九月廿二日　　　安　貞

玄　應　樣（杵築の人？）

尙々周平殿さそ〳〵當時ハ寸隙有之間敷候　乍去御尋申候　木付にも有德院殿か一生之義しるし候もの　暫かりうけ申候　ひらがなもの六十枚にはたり不申候　御うつし被成間敷や　是ハ拙者御たのみ申がたくも御座候　うつし置候て周平殿へ有之候へは　手前に有之候と同然の事に御座候　乍去只今ハ中々左様の事ニては御座あるましくと奉察候は　案し出候て又々申進候　うつしものゝ義當時出來申間敷候者　近日御しらせ可被下候　いそき候本にて御座候　當時の、事故おもしろきものに御座候

## 佐藤九一宛

閑散餘錄一再涉獵　（杵築、某氏藏）

御主方重疊忝候　追々服藥可仕候　且又閑散餘錄一再涉獵甚慰渇御座候　便希に候故　先早々御返進申候　忝奉存候　已上

七月朔日　　　　三浦安貞

佐藤九一様

*佐藤九一、濱脇の人。次の七絶は梅園の作である。

送藤九一

邯鄲江上雁南歸　四極山前憶舊扉　一片離情秋不限　白雲遙逐馬蹄飛



## 守江良右衛門宛

道齋隨筆御尋ニ付申入候　（東京、吉村龍介氏藏）

道齋隨筆之義御尋ニ付申入候　一體杜撰多相みへ候　宜敷事も多候得とも怪說も多候　有眼の人は此書をまたす　無眼の人は魚眼を以て玉ニ混申候　先表題に省字を用候　又開卷にも道齋之齋齊と書候　是ハ古字通用と申よりの事とみへ申候　されども後世齊齋書わけ候へば　後世にしたがひ度候　筆を艹（クサ）冠に從ひ候も略字法との事にあらす

上一ノヲ李極（セイ）是ハ字彙の音に從ひ申候　セウよく候　蒸之韻之字に御座候

葉公セウトカナツケソロ　セフニテ候

玉拙ハ音シュクト覺申候

二ノヲ烏瓜ノ切ニアリ　音ハなく候

越王　是ハ連聲濁りて字音にあらず　あつめ候者別に部ヲ出し度候
鄭袖　鄭玄と同と御座候　是又呉音よみくせに候得は別部に此類集め申度候
　但史記ニシヤウト有シカトモ覺候
星宿　ホシナレ共シウト申候説有之候得とも日のやとりなれば宿よしと辨正有之候
金莖　キンケイハ非ナリ　カウ漢音　キヤウ呉音　つねはキンケウトコソよみ申度候
苕雪　シヤウサツ、拙者テウトウト覺申候　拙誤にや改不申候
黔驢　黔首クロキノ意　黔中　地名
　ーーハ黔中ノ驢と覺候　左候へはキンロ也
揖讓　イフノカナ也　訛謬グハビウト覺申候
檀弓　是又呉音古讀　今書に對してはタンキウとよむ　蓋　桓武帝ノ令に從ふ也
孟浪　杜譔ヨミクセナリ　石橋　同前
訓解　本キユン　クンヲキユンニ轉ズル也、キンハ中畧也
綸　中畧シテリン　六　中畧シテリクトヨム，類也
龍光　是ハ詩經之字　寵光ノ筈也，龍ヲテウトヨムニ一アラズ
復關　詩經叶韻ニテヨム也　叶韻にあらさる處はクワン也

轂率　孟子の註に隨ひ　コウリツトアルト覺タリ
阿監　阿監ト覺タリ　阿兄　阿爺　阿戎　阿難　皆同様　阿彌陀の阿と同じからず
豚　豩ト同シク漢音バク　呉音シヤク　平生豚々クルシカラズ
南斗北斗　イヅレモトヨミ　古今句會の辨ある樣に覺候
松江　稱江院ヲサケ奉る由　稱光院あつて稱江院なく江光これをさけ候者　大なる博士家の誤なり　唐音まじへよむ事　行脚　行燈　靈隱寺　副司　何ほともある事也
◎南朝四百八十寺　十　入聲字なり　寸　平ニナル也　綠浪東西南北各紅闌三百九十橋の類也

甫　ホノ音ナシ　古實ニホトヨムコトアヤシ
行宮　本邦ノ古音ニハアラズ　唐音ノ訛也　古讀トハ云ベシ　古音トハイフベカラズ
無乃　ムシロニアラス　無寧ナリ　無ニ乃大簡ニ乎なり　先儒辨アリ

中　巻

回也賜也　全語助にて　之ハ思なしとハ非也　也ハ上の物をさす音也　回の字もさす也　和語の「ゾの字也　不改其樂者ハ回也の意なり　始而ともに詩をいふべき者ハ賜也なり
曰云ノ別　曰イヒヤウ　云イヒカタ　句尾に云ノ字ヲツカヒ　曰ノ字句尾ニ用たれハ別あるに似

たり　されとも大意可なり　さる故に他書ニハ　詩曰ニとありて　大學にハ詩云ニとあり　他書にハ子曰とありて　防記にハ子云とあり　可考

**幾望**　既望と同し　隱居放言(歟?)に幾(出?)とあり　此説しらす　既望ハ十六日也　月幾(チカシ)望ハ易の語なり　易によれハ幾望ハ十四夜とすべし

**別**　另ニ作るとあり　另も意は別と同しけれども音レイと覺候　さる故に另ノ字ノ時ハレイ〳〵ト僕ハヨメリ

**巻作寫**　寫巻の略なる事徂徠之說にて何か見候様に御座候　乍去暗記不仕候　右者只艸々相考え申候事のみニ御座候は他見ハ御用捨可被下候　殊ニ御信用ハ被下間敷候

**故**　コトサラ格別之様に申候　コトサラノ時ハ折角ワザ〳〵ノ事ニソロ

*以上吉村氏所藏の書翰巻にあり、全集にも之を採用して「梅園拾英」の中に收む。

## 御取揃御年玉　（吉村龍介氏藏）

尙々御加筆之御禮可然奉願候　已上

如仰御慶無盡期申納候　御揃被成御安善御踰年被成大慶奉存候　今日は乍例達藏殿爲御禮御出殊御取揃御年玉被懸貴意不淺受納仕候　當年も御逗留被成段是にても悅申候　隨而手前無恙加年仕候　妻も宜敷申上候　萬縷期永日之時候　恐惶謹言

正月廿日　　三浦安貞

守江良右衞門様　返上

## 爲御年玉三種御惠投　（吉村龍介氏藏）

於御慶目出度申治候　彌御擧家御淸康被成　御迎春之由奉欣幸候　今日者達藏殿御出被下　殊爲御年玉三種御惠投　忝幾久受納仕候　乍慮外御家內様宜様御傳意可被下候　尙期永日之時　可申出候　恐惶謹言

正月廿日　　三浦安貞晉

守江良右衞門様　人々御中

## 御令閨御安産　（吉村龍介氏藏）

一筆致啓上候　彌御平安被成御座珍重奉存候　且此內承候得は御令室様御安產段々御母子様御引立被成候段奉賀候　右御歡皆々様にも可然奉願候　愚妻も御同然申上候　且又今日は達藏殿御歸可被成由御迎にも不參候故御とめ申候得とも　いつれにも御歸り可被成由　因而不顧思召御返申

上候　萬々後喜可申上候　恐惶謹言

二月卅日　　三浦安貞晋

守江良右衞門様

## 當春ハ西邊御遊行　（吉村龍介氏藏）

尙々達藏殿御堅固御滯留にて御座候　御氣遣被成間敷候　已上

貴墨致拜見候　然者當春は西邊御遊行　當月初御壯健にて御歸國被成候段　珍重御儀奉存候　不存寄是迄御土產夫々に御惠贈忝奉存候　幾久布賞玩可仕候　猶皆様にも御同然御致音可被下候　愚妻も左申上候　恐惶謹言

三月十五日　　三浦安貞晋

守江良右衞門様

## 芳野御參詣被成候由　（吉村龍介氏藏）

貴書拜見　無程炎熱相催候處御全家御安寧被成御座恐悅仕候　弊方無事罷過候　然者此節者御互に御尋も可被下覺召候得共　少々御痛に因候而達藏殿御遣被下　猶種々御取揃御惠投忝受納仕候　達藏殿も御願に付芳野御參詣被成候由　御苦勞と存候　御內好御慰ともと奉存候　折角御見立無程御還家之上可申承候　猶皆々様に御致音奉希候　愚妻も宜敷申上候　恐惶謹言

六月十二日　　三浦安貞晋

護江良右衞門様

## 長崎へ達藏殿をも同道　（吉村龍介氏藏）

貴札致拜見候　秋暑彌御安寧御入被成珍重奉存候　拙宅無恙罷過候　御繫意被下間敷候　然者御聞達之通　拙者義も長崎表存立　來月中旬にも罷立申積りに御座候　因而達藏殿をも御遣可被成段　海老屋呈次をも同道仕筈御座候間　一所誘引可仕候　御氣遣被下間敷候　尤拙者義は肥前に九月一盃は逗留可仕候

諸生衆皆わかく候へは先ニハ返申かたく候　若年代宜敷才領等御座候者　御聞立被成候は　さきにも返し候様にも可仕候　拙者抔人連レ不申候　袷と袷羽織　肌着合羽是程風呂敷ニ入　背負申筈御座候　先許にて寒く相成候は　鳴木綿にても調へ　綿買ひ布子（ヌノコ）に仕直し可申と存罷在候　爲御用心申上候　猶皆々様ニ可然奉願候　恐惶謹言

閏七月廿四日　　三浦安貞晋

守江良右衛門樣

*安永七年七月五十六歳の時長崎へ旅行せんとし門人達藏の父守江良右衛門へ出した狀。

## 兒輩出痘御聞及ニ付　（吉村龍介氏藏）

貴書奉拜見候　寒冷相募候處　皆々樣御平安御入被成候段　珍重不過之奉存候　弊宅無恙罷過候然は此間は兒輩出痘御聞及に付　爲御見舞遠方御使札　猶三種御惠贈被下　御事多內痛入候仕合忝奉存候　御地には未疱瘡も流行不仕　御待可被成候　此邊當年ハ甚輕　手前子とも相揃一時ニ煩申候處　十三四日振ニハ何れも引立悅申候　御安心可被下候　右御心遣之御禮　御母堂樣御令政樣ニも可然奉願候　猶愚妻も御同然御禮申上候　恐惶謹言

十月廿八日　　三浦安貞晋

守江良右衛門樣

## 今日達藏殿御用御歸り　（吉村龍介氏藏）

先頃三郎次殿御尋之節は御芳札　猶御丁寧御傳聲忝　彌御平康歲寒御凌被成候段奉忝喜候　誠先頃は御尋問折柄他出不得御意殘念奉存候　御兩所樣より御祝儀不淺受納仕候　此內御禮愚札指出候　定而御落手被下候半奉存候　今日達藏殿御用御歸可被成由　因而御報申述度如此御座候
猶皆々樣ニ宜敷奉願候　愚妻も御同然申上候　恐惶謹言

極月四日　　三浦安貞晋

守江良右衛門樣

## 歲暮御賀儀　（吉村龍介氏藏）

尙々近日御眼氣に御座候段　御咲止奉存候　何卒早速御心好御入被成候樣にと奉存候　已上

貴札致拜見候　寒冷相募候處御渾家御平善被成御座珍重不過之奉存候　隨而弊方無恙罷過候　然は今日は遠方御事多中御使札　小兒輩痘疹輕相仕廻候迚御祝儀　猶達藏殿より歲暮御賀儀御肴兩種　愚妻拙生小兒輩迄御祝被下　乍例忝祝納仕候　當時此邊痘流行候ニ付達藏殿御出可被成候段々入御念之御義　來陽緩々可申承候　乍憚何レも樣ニ可然奉願候　愚妻も書面種々申上度旨申出候　何事も期永春候　恐惶謹言

臘月十四日　　三浦安貞晋

河野良右衛門樣　　奉復

## 歳末御祝儀被懸貴意 （吉村龍介氏藏）

貴札忝拜見仕候　如諭嚴寒之節御座之得共　彌御揃御淸康御暮被成候由　珍重奉存候　隨而弊家無別條罷在候　乍憚御安意可被下候　將又世忰方迄御加筆被下忝奉存候　此間は爲歳末御見舞御子息樣御尋被下　其上歳末御祝儀被懸貴意幾久鋪受納仕候　如仰殘臘無餘日罷成候　折角御仕舞御超歳可被成候　萬々來陽目出度可申述候　恐惶謹言

臘月廿六日　　三浦安貞（花押）

河野良右衞門樣

## 來陽緩々御禮 （吉村龍介氏藏）

爲御歳暮　貴札忝拜見仕候　如諭甚寒罷成候處　御渾家御平安之旨珍重奉存候　然者二種　幷主令方迄御惠贈忝受納仕候　猶來陽緩々御禮可申伸　草々頓首

十二月廿七日　　三浦安定

守江達藏樣

## 餘寒に持病の疝氣 （立川文友氏藏）

貴札忝拜見仕候　先日ハ參上仕　段ミ御馳走罷成忝奉存候　其後餘寒强御座候へ共　彌御安康被成御座珍重奉存候　昨日ハ達藏樣御出被下忝奉存候　乍例御年玉被下　忝幾久愛納仕候　昨朝ハ御母上樣御勝不被成候段　御當分の御義御座候へかしと奉存候　餘寒の御痛と存候　折角御心添可被成候　私義も昨朝本家迄參候處　以の外相勝不申候　餘寒に持病の疝氣差起。難義仕候へ共今朝は余程快御座候　乍憚御安意可被下候　乍憚御祖母樣御母上樣にも　御內政樣にも宜敷御賴申上候　愚妻も同樣申上候　甚取込早ミ亂筆御免可被下候　右御禮貴答旁早々如是御座候　恐惶謹言

正月廿一日　　三浦安貞

河野良右衞門樣

追而御子樣方いまた御疱瘡不被成候樣承候間　御用心ニ少々藥心付候藥　達藏樣へ可渡申候　御入用無御座候節ハ何時も御返可被下候　町も遠く御座候故用心ニ差上申候

一、ウニカウル　五分
一、熊膽　一分

一、德寶丸　十貼
一、男煎藥　四貼
一、小兒虫藥　六ふく
一、人參　二本八分

〆

右任御心安進置申候　右の藥御用不被成候樣御座候へかしと奉存候



## 中田億右衞門宛

### 御兩家御繁昌（大阪、中野豐氏藏）

貴墨拜誦　御全家御壯健寒冷御凌被成珍重奉存候　誠御兩家樣御繁昌目出度奉存候　祝儀御禮痛入候　仕合御座候　此内御尋申候節は御他出不得貴意　御留守御丁寧御饗應忝仕合奉存候　御取方等御世話被成候由　乍去海邊付ハ沙汰も宜敷相聞候　山中ハ御聞及も被存候半　近年珍敷凶飢にて御座候

一、御仲兒樣御藥　御幼兒樣御傳藥進申候　御幼兒樣御藥此節のはそくゐうすく被成御ぬり　御痛所に御はり可被成候　御仲兒樣のは已前の通に御用可被成候

一、東光方丈御藥進申候　御届可被下候

一、此間は御追悼被下忝感吟仕候　此節の不幸は如何致候や　追悼あまり參不申候故　別て思召

咸荷仕候　萬餘乍慮外御令閨様にも可然奉願候　恐惶謹言

霜月十五日　　三　浦　安　鼎

中田億右衛門様

## 御薬調進仕候（中野豐氏藏）

御手紙拜閲　御壯健時下御凌被成奉欣然候　然は龜太郎殿近來御出來の御様子　件件承知御心遣奉察候　何れ虫の業なと申様の事かとも奉存候　先御薬調進仕候　御用可被成候　追々御様子可承候　鴫藏殿御壯健御座候　是又御安心可被候　今日取込草々及亂筆候段御容恕奉希候　頓首

尚々家族へ御致意忝　乍筆末御内政様にも可然奉願候　增右衛門殿御平安の由　是又可然御申上可被下候　已上

十一月廿六日　　三　浦　安　鼎

中田億右衛門様

## 一封乍慮外（中野豐氏藏）

御遠々敷罷過候　冱寒の節　御渾家御萬福奉賀候　拙無二異事一罷過候　御安念可被下候　此間は久久振鴫藏殿御出　兩種被レ懸二貴意一不レ淺忝致二受納一候　隨分御無事御逗留にて御座候　御案被下間敷候　且一封乍慮外憚成便に富來久保屋へ御届被下候様奉賴　乍末筆御内政様にも可然奉願候　猶重て可申承候　恐惶謹言

臘月七日　　三　浦　安　定

中田億右衛門様

## 愉婉錄寫人無之（中野豐氏藏）

寒中御健在奉賀候　拙無事御繫念被降間敷候　今日御遣被下候付　米一袋被懸貴意毎毎御心遣忝奉存候　且又日外御賴の愉婉錄寫人無之　折節壽助も望候て　爲レ寫候處高料思召も甚如何敷御座候得共　無據鴫藏殿迄進置候　御入手可被下候　當年凶饑定て彼是御心遣共奉遠察候　乍慮外御家内様にも可然御傳聲可被下候　恐惶謹言

尚々愉婉錄代十四匁九分と申來候　尤正銀にて御座候

十二月十五日　　三　浦　安　鼎

中田億右衛門様

## 五月雨抄御目にかけ候（中野豐氏藏）

昨日より緩々得拜誦珍重奉存候
一、御姉様御藥迄申候、生姜（シヤウガ）少御入御用可被成候
一、增太郞殿御藥御屆可被成候
一、愉婉錄
一、西州遺事
懸二御目一候　年内中に御返可レ被レ下候
一、五月雨抄　是は御約束は不致候へとも懸御目候　いつれも損し不申様に奉レ願候　增右衞門殿にも御家内様にも可然奉賴候　已上

閏月十五日　　三浦安定

中田億右衞門様

## 松皮食の書付參候（中野豐氏藏）

如來命月罷成候へ共御渾家御平安被レ成二御座一大悅不レ過レ之奉レ存候　今日は天氣好御迎被レ遣嶋藏殿御引取　殊更當年は右の仕合故彼是厚御世話罷成忝奉存候　隨て件件別幅の通被レ懸二貴意一不淺忝奉存候　猶御令室様にも宜敷御禮奉願候　御兩家共に當年は賑賑敷御年可被成奉二珍重一候　別書の御禮家內宜敷申上候　當年は別て凶饑彼是御心遣共奉察候　松皮食の書付參候故　嶋藏殿にも御寫取被成候様に此內申置候　御覽御考の一つにも相成候へかしと奉存候　無餘日相成候へは千萬來陽可申述候　恐惶謹言

十二月廿日　　三浦安鼎

中田億右衞門様

先立ちし妻の此頃折々夢に見えければよめる

ぬるまのみむかしなりけり烏羽玉の夕つく鳥よ心してなけ

*天明三年九月、夫人歿す。夫人は寺島五郎右衞門洞雪の女。時に梅園六十一歲。先生の和歌としては此外には見つからぬ。次に梅園先生の「夢亡妻」と題する詩をあげておく。

夢亡妻

孤魂長不忘人間　昨夜分明入夢還　孔雀東南相背處　嫦娥霄漢若爲攀
暫時愛護平生態　十分淸羸永訣顏　枕上烟霞天縹緲　白雲蒼海阻三山

## 御祝被下御禮申上候 (中野豐氏藏)

覺

一、壹　　樽
一、歲暮御祝儀　　壹封　　修令へ
一、足　　袋　　一足　　龜次へ（次男玄龜）
一、白　　粉　　一箱　　類　へ（末女類子）
一、鬢　　付　　四包　　召遣四人へ

右の通御祝被下忝何も一同御禮申上候　已上

十二月廿日　　　三　浦　安　鼎

中田億右衞門様

## 御惠贈不淺受納 (中野豐氏藏)

御投書披緘　如ニ貴喩一寒氣强御座候得共　御淸門御多福御入被成珍重奉存候　拙宅無異事　消日月候　今日は御事多內　壽助兄御入來　彼是被縣御心頭御祝儀　家內迄も御惠贈不淺受納仕候　御紙上にて悉申候　秋已來少少御痛處有之候由　存不申以書中も御尋不申進背ニ本意一候　已上

## 杉苗五百本程望ニ御座候 (永松壯三郎氏藏)

近日漸催和暖候　彌御平安御凌被成珍重奉存候　當年は增右衞門殿にも御參宮彼是御取込可被成奉存候　隨て弊方無恙罷過候　先頃は令郎御出彼是御心遣被下忝　其節取込候て裁復不仕失禮罷過候

一、別件拜見合點仕候義は書かへ申候　夏大豆の義一向合點不仕候　此內增右衞門殿申進候　定て御承知可被下候　御下書出來候はば今日御遣可被下候　只今淸書半に御座候　五六日內相仕廻可申候　仕舞次第指出申度候　十行にて百枚の外に出申候　四五遍も書候故退屈仕候

一、鳰藏殿へ老忰より杉苗御賴申置候　今日壹人進可申候　四文か四文より內に入位五百本程望ニ御座候　使の者もて候はは皆御遣可被下候　もて不申候はば　先もて候程御世話被下候様に御申可被下候　銀札三拾匁爲持進候　猶皆様へ可然奉賴候　恐惶謹言

二月十一日　　　三　浦　安　定

中田億右衞門様

*先生の住宅の其の屋後に廣大なる杉林がある。老杉森々として晝猶暗く、百數十年の昔を物語つてゐる。其の杉苗、五

百本を注文してゐる。其の値四文か、四文以內のもの、此の使者が持てるだけ持たして下さい、銀札三拾匁持たせてあるとの事。後揭の中野升右衞門宛の手紙にも同樣の事がある、兩樣に依賴したものであらう。



## 御肴料御深志ニ候 （永松壯三郎氏藏）

貴札致拜見候　春寒御多福御入被成奉珍重候　拙も無事罷過候　御安意可被下候　嶋藏殿久々にて御入來緩々申承慰悅仕候　殊御肴料御携荷御深志候　猶御用事も御座候由　大意御紙面致承知候　新三郎殿此間御見舞候て御座候　粗左樣の御用にも候や　重て可申入との御挨拶ともに御座候　折節取込荒々及裁復候　猶皆樣へ可然奉願候　恐惶謹言

二月廿一日　三浦安定

中田億右衞門樣

## 御目代として御在宿 （永松壯三郎氏藏）

貴墨薰讀　時下愈御壯健御入被成珍重不過之奉存候　隨て弊方無異事罷過候　御安意可被下　然者嶋藏殿御事　最早時分爲御目代暫御在宿可被成段　御尤の御事奉存候　今日御歸家萬々口述申進候　此間は客來に付段々御苦勞懸忝奉存候　皆皆樣へ可然奉願候　恐惶謹言

尙々おゆい樣へも可然奉賴候　已上

卯月十七日　三浦安鼎

中田億右衞門樣

## 御介抱人御丈夫に （永松壯三郎氏藏）

拜見頃日は御勢々の中逗留仕御馳走忝奉存候　無恙罷歸申候　途中迄駕籠被下休息仕候　然者御息女樣御難義の由相考御藥進し候　御服用可被成　是は明朝より勢相增可申存候　理中湯は附子(フシ)はよく御座候得共　餘藥ちと忌申候　即此度煎方中附子とも相加進申候　一日二貼にても三貼にても御氣限に御用可被成候　桂作殿にて此御藥可然候

一、下女同症　是は土佐郎殿藥相用候樣に被成可然候

一、御小兒樣　此內の梅干入兼用可被成候　御當人は御嫌の由もし御酒御好に御座候はば　此內申候古酒三合氷砂糖六匁末となし　煮合候方御忌不被成候はは用申度候　腹痛の御爲にも可然かに候

一、御令內樣へも宜敷御禮奉願候　暑さつよく御座候得は　御介抱人御丈夫に無御座ては相なり不申候　どなたも御飮食隨分淡泊に過不レ申候　もし其氣味も御座候はは　はやく御藥御用御煩

不被成候樣奉レ希候　已上

六月廿二日　安鼎

中田億右衛門樣

## 愚妻此間危篤（永松壯三郎氏藏）

貴札致拜誦候　秋涼早催候得共　御渾家御無變御入被成奉賀候　御聞達の通愚妻此間は危篤相煩候處　近日少少心好相覺候　被思召付御尋の御書中鳰藏殿にも　御微恙に因て御尋不被下候由被入御念御義何卒當分の御樣子追追御快復被成候樣にと奉存候　此内お家も逗留病人介抱致呉深切の義御座候　猶又升右衛門殿（升右衛門は中野氏である。中田氏と兄弟？）御尋忝奉存候　御内室樣御加書是又可然御禮奉賴候　恐惶謹言

八月十六日　三浦安貞

中田億右衛門樣

# 無宛名

## 壯年とは乍レ申久敷御瀉（國東、森小彌太氏藏）

毎々御縷書先德門御清福奉賀事に候　拙無レ恙罷在候御懸念被下間敷候　然者貴兄御儀久敷御不快　此内は杵築松本氏に途中懸ニ御目一御樣子とも承猶安節よりも承申候　御壯年とは乍レ申久敷御瀉　申迄もなく御油斷可有之事にては無御座候得共　千萬御自重可被成候　胃は一身營養の本其本缺候ては百出自レ是甚懸念不止事に御座候　寄存候はば申遣候樣にと御座候得ども　樣子伺不レ申兎角難レ申候　鮎の子のわたを鹽辛に致相進申候はば立處にしるし有レ之候　土用中のうなきの鹽辛是又宜敷と承候　餅を水飴にてよく煮　時々服餌致候はばよしと承候　先いつれヶ樣成おとけ事も可成參りかね候はば　とくと御療治可然候　殊に當秋疫痢も候故旁御自愛可被成候

一、御沙汰の通　此内又又御城下へ參　四五日逗留致候得ども　無滯歸山致候

一、序に御尋申候　いつぞやウニカウル御用立候を歸り候樣にも覺申候へ共　とくと覺不申候故一寸御尋申候　置所失ひ御尋候も御心安如斯御座候　恐惶謹言

七月五日　　三浦安貞

## 大宮司誰人に候や（吉武得巳氏藏）

頃日修令歸候節、若宮社式御書附被下忝く落手仕候　不詳の處御尋申事左の通

一、神主と申は誰人に候や

一、大宮司誰人に候や

一、惣檢校祝　同斷

誰村の何がしと申事はしるし可被下候　生地氏は神主に候や　大宮司に候や　神主と申人は其つかさにて候や

一、神座は左尊く候や　右尊く候や

一、御内殿の內圖の通に候へば　皆々神の方にむかひ候樣にみへ樣　左樣に候や

一、御殿の內は　御神體は　社家にて　本地の佛像のつとめ僧に候や　つとめは打込候や

一、御內殿は神體佛像御座候樣に承候　若宮も定て左樣可有之　此處承度候

一、社家の方も御聞　護保寺之方も御聞しらべ被下度候

一、此內棟札の事も申上候　近近御遣し可被下候

一、奈多八幡宮も右の樣子委敷承度候　とくと御聞しらへ被下度候

一、奈多明星院も護保寺の通　無程常の取行ひ諷經迄も不仕　小僧立溫居迄も不仕候事　護保寺同前に候や　猶昇殿出家社人之式圖を以　委敷承度候奉賴候　以上

正月晦日　　三浦安定

## 御年玉品々（別府、宇都宮喜六氏藏）

於御慶御同然無盡期申納候　御渾家御壯健御踰年被成大悅奉存候　隨而拙宅無恙加年仕候　然者爲御年始　勝彌殿御出　猶爲御年玉品々御取揃　被懸御意忝受納仕候　當年も御逗留被下候やの趣承知仕候　猶新參も有之候間賑にも有之候　御機遣被下間敷候　萬喜期永日候　恐惶謹言

三浦安定

## 佐野玄遷宛

### 溺通ロニ滯結と相見申候（吉村龍介氏藏）

拜見疇昔之握手にて今難忘候　留滯中御懇意忝奉存候　十市病婦樣子承候　いつれ溺通ロニ滯結有之とハ相見申候　御投劑面白承候　如何宜候や　茫然猶一あてあて場にや　又元氣つかれ候や遠方より難申候　體つよく候者通劑も可然　模稜之手御爲に成候事難申出候　以上

極月十日　　三浦安定

佐野玄遷様

＊佐野玄遷は杵築の人、尙貞の子、諱尙長、叔子と號し、醫を業としてゐた。其子玄知は黄鶴の門人だが、梅園爲めに洞達記を作つて與へてゐる。玄遷をして渾天儀を作らせ、天文を研究させた事は、後掲矢野雖愚への手紙でも交遊の程が分る。



### 灸治は折角可㆑宜候（吉村龍介氏藏）

尙其日大紛冗不㆑能㆓即答㆒候　彌御淸健奉賀候　川千里イナ咳出申候　如何何卒平快有之候へかしと祈申候　猶又灸治は折角可㆑宜候

一、御作拜見面白承候　答人之作意味不㆑存候故　とかく難㆓申進㆒候ならや善兵衞よりの狀　懸御目候寫本二卷と御座候　一卷ハ名字私儀落手　一卷ハ五月抄工藤氏ニ參候趣にて御座候　是ハ八坂彌一郎殿本にて御座候　あの方へ屆候樣に相成候也　如何御吟味彌一郎殿も御逢とも被成候者　右之趣御物語落手有之候樣ニ仕度候　女早學問箱ニ入　貴君ニ指上候　四箱の本も御受取被成候や　御しらへ可被下候　箱は舊年書物入遣申候　ならや書狀懸御目候　不及御返却候

一、如㆑仰當春ハ　雛生相集殊之外やかましく御座候　とかく老境精力も非㆑舊候　覺㆓疲勞㆒候人事ハ却而いやましに覺候　御憐察可被下候　逸鳳子御出精にて御座候

一、京師大火如何　御親類樣方　御左右無御座候や　唯事夥敷承のみに御座候　可惜は書板大分歸烏有候半　頓首

三月二日　　三浦安定

佐野玄遷様

## 洞達亭記 （佐野秀子氏藏額）（文集に無し）

蓋士之道　講之於學　修之於禮　弗修則無益于講　弗講則罔于所修　修以行其正　講以知所向　然而所向　多岐　雲樹丘陵以遮其望　不知向誰　問其羊（亡羊之歎といひ多岐亡羊といひ學問の道多端なるを以て眞理を失ふに喩ふ）不如出雲標　凌霄漢　躡日月之倒景　以察壤土之茫々於一彈丸　岐路繚繞紊亂之狀　雲樹丘陵之擁蔽　下視悉之　就所在　取其羊　假有田夫給之　已諳大澤於前　有蚩尤起涿鹿之霧　璿璣天地　以定其方　何難於獲其一羊　佐野翁亭成　結構輪奐　叔子玄遷　從予而遊　問名于予　予曰此亭也　極輪奐　致爽塏　雖然當雲霧抹林星月藏光　謂之洞達未矣　願子拔身以置蒼茫曖昧之標　以指其所求於掌　則雖有魑魅　何隱其羊於無何有焉　於是乎　輪奐爽塏以成洞達　達乎達乎吾以名山亭　叔子領焉　書以爲記

天明丙午夏日

梅園處士　三浦　晉



## 菅公起自儒林（吉村氏藏）

（前切）成而弗可揜「者謂之」天　爲而弗測「者謂之」神（自形而上以下二十字抹殺あり）有所縦其志惑夫天命盖方字多醍醐之時　藤氏據鼎槐之地　執天下之權已數也　菅公起自儒林　終至三台位　格位身居姦邪之間識者危焉　公何不早退　蓋公之遇于上皇豈常哉　公已知其不安故上表辭職者數而弗聽桂冠踏海乎　負上皇眷顧之意　致此羝羊觸（羝羊觸籬不能進不能遂・易經）上皇猶將進于則闕辭而不就　時平陰行姦邪以閥閲妬之浸潤已成剝牀及膚　主上猶幼不照其奸　致此蹶躓蓋天下德與爵爲相尊故爵爲人爵　德爲天爵依爵者以威福　依爵以榮辱　藤氏以閥閲世家天下之權公廢而藤氏之位定矣——之位定而　皇家之勢衰焉　勢也夫姦邪之爲社鼠（社鼠ハ君側ノ奸臣？）爲魑魅爲虎爲狼亦神位之變化雲揜風驅　能鼓舞同類　驅龍驅竈　雖爲一時之冥晦不久則白日上懸秋毫共察公雖身終鎭西忠誠不揜　皇終贈之以正一位太政大臣　則上皇之所憶子孫繼其志　公薨後帝都水火交起震撃人世謂公之靈　公之忠誠唯見君之尊　一榮一落以爲春秋何有　此事雖然有說于此通天下之情不容姦公之遇變——滿　憤滿天下快　曰靈宜就天宜罰　是以伸其憤　猶岳王之廟撃檜賊　於是公　得自立上覺悟　公嘗曰唯合誠不禱神護　杵藩有公之廟肇于——人之尊　水旱疾疫皆祀夫神不福　丶丶不知其禱者以何心公之事　君不以君之不明而恚不以僚之不良而怒唯誠之奉然則長〇人者雖一事之

威福不能易榮辱　然則禱(此)此祀豈一身安哉　一家安焉　豈一家安焉哉　闔國安焉　以闔國安之道推則雖擧寰宇不爲　難大至哉　神之德也　從歌曰　（以下缺）



## 佐野玄知宛

### 御令兄樣の書面御示　（佐野秀子氏藏）

從御令兄樣御內意之御書面御示被下恭奉存候　右之通ニ相成候而者レ甚面倒の儀に御座候　何とも相計ひ可申候　御令兄樣へ宜敷御禮辭奉レ願候　已上

九月廿四日　　三浦主齡

尚々右之書火中候

佐野玄知樣

＊令兄とは、月齋とも玄盟、玄鳳ともいつて、實は高橋氏、尙長氏に養はれて家を繼いだ人。

＊玄知は大雄又柿園と號し、才藻富贍と稱せられてゐた。天保六年十二月三十九歲を以て歿したとある。

### 御庭の躑躅満開につき（佐野秀子氏藏）

御手紙拝見仕候　然ハ御庭の躑躅満開ニ付明十七日參上仕候様可仰下忝奉存候　隨レ仰參上可仕候　余儀者期拝芝候　已上

三月十六日　三浦主齢

佐野玄知様

### 富太郎女房御返し（佐野秀子氏藏）

行右衞門女房直ニ御留置可被下候　富太郎女房村役人申出之儀も有之候由　右之者は御返可被成候　右之通近右衞門殿申聞候　御承知可被下候　已上

十二月七日　三浦主齢

佐野玄知様

### 乳婦入湯被仰付（佐野秀子氏藏）

昨日乳婦入湯被仰付候處　相續快御座候而　乳も相應に垂り候に付　身仕舞等被仰付候由　其段豊島氏へ可申達候　様子により明日被罷出候儀も可レ有ニ御座一候　其用意罷在候様　被仰聞可被下候　右貴答早々頓首

正月十四日　三浦主齢

辻松庵様

佐野玄知様

### 乳婦入湯候處（佐野秀子氏藏）

乳婦入湯致候處　相續快方に御座候由　明後十六日御殿へ御差出し被成候様奉願候　自私豊島氏へ其段相達可申候　已上

十二月十四日　三浦主鈴

佐野玄知様

# 矢野雖愚宛

## 齒は之が爲め谿（むな）し髮は爲㆑之禿（は）ぐ　（清原道彦氏藏）

貴翰薫誦漸霜露之候推移候處　起居御清健御入被成欣慰不過之奉存候　野生依㆑舊消㆓日月㆒候御慮懸被下間敷候　然者此節佐藤生此地御來遊　得と得㆓貴意㆒無㆓此上㆒奉㆑存候　伶利に相みへ申候　不肖の弟子御得益の處は無覺束候得共　隨分可㆓申承㆒候　御安心可被下候　猶又御宿所にも可然御挨拶可被下候

一、簡儀出來申候處　按排不㆑宜候　追々に拵出し可申との事に御座候

一、墨卿子へ答候書とも　御覽思過半候由に候得は　於拙も甚本望の御事奉存候　條理の義は只只實徵を主と仕次次書にて　考候事にて　愚拙申候事も　天地に合不申候得は　僻說にて御座候　又先樣固見を取候て論候はば　たとひいか程の難駁候ても　不苦候　扨條理千古を經て野子已前致發明候人無㆓御座㆒候故階梯無㆓御座㆒　さてさて苦候事に御座候　拙自㆓少年㆒齒爲㆑之谿（ムナシ）髮爲㆑之禿候へ共　條理七八分をも得候位に被存候　生涯十分の成就は出來申間敷候　被仰下醫事鄙衷の通に御座候　此地位にて御座候得ば隨分御進み可被成候　世間の學習胷臆に痛候人は何分說入不申候　何そ申進候樣に被仰候へども　當時取込申て不㆑能㆑詳候　贅語中の一篇是は未脫稿にては無御座候へとも　佐藤生へ御謄寫被遣候へと申置候　御覽の後御一咲丙丁童子へ御投可被下候　御他見御無用と申內　多賀子は同調の義御勝手に被成可被下候　先は答謝申述度　如斯御座候　秋氣折角御加餐可被下候　恐惶謹言

九月五日　　三浦安貞

## 心病む人惡をなし氣病む人病をなす　（清原道彦氏藏）

醫國之義是は先達て申進候と覺申候　御難問御尤の御事に御座候　是は拙著身生餘談御覽の上又又可申上候間先略申候　惣して天地の間の事は　本一に候故　何事も融候位有之候　又二に候故斷然と分り申候位有之候　此間をよく見候處　條理の事に御座候　其故は譬へは孝の字を擧て說候日は無忠も不幸に候　無信も不幸に候　無㆑仁㆑無㆑義無㆑智は皆不幸に候　不養生も不幸に候不治產業も無幸に候　忠を擧て申候得は　君は一國の父母に候　我父母と仰く處につかへ候忠に

候　然れば一家の孝に候　無忠心にして孝道は不出來候　無忠心にしては仁義禮智皆虛文となり申候　忠なくしては妻子奴隷にも道は不レ被レ行　いつれを擧候事も皆一の位を持候ものに御座候　醫より開レ眼候得は　天下の事非レ醫事なく候　一段下して申候へば　商賈にみせ候得ば　天下の事悉商賈の事にあらさるなく候　又佛寺にみせ候得ば　風聲水音まて皆佛ならさるなく候故に心病む人惡をなし　氣病む人病をなす　天地よりして見れは同一病人　天心を病む人を分つて大家に屬し　支體を病む人を以て醫人に屬す　庖丁物をみる時皆手也　醫人物に見る時　病健の間にあらさるなく候

一、古なきの病あれば今あるの病　古なかるべき事條理の道如此みる事に御座候　乍去未レ得二徵一候　未得徵故　博く求申候　若彌徵なくんば又其條理を考べき事に候　御不審御尤の御義　拙も同病の人に御座候　或は今行はるるもの又絶することもあるが　吾五十年の壽を以て窺候事　たとひ書典有之候迚も　漸堯以來五千年に不盈事に候　徵未得候故　とかく難申進候　折角御考御深索可被成候　必可然故可有之候　先夜陰老眼朦朧の間相認候分りかね可申候　歲暮の御作等御出來の上御暗投奉待候　多賀兒定て御安健と奉存候　御序可然奉賴候　恐惶謹言

十一月卅日　　三浦安貞



## 佐野玄遷と談天地 （淸原道彥氏藏）

先月十一日の貴答昨日落手　御樣子悉レ之候　先以可二申上一は　別後被レ爲レ失二掌珠一候段驚入御愴神の段自レ此不レ堪二悵然一候　折角御加餐可レ被レ成候　酷暑之候一入御自嗇奉レ祈候　拙子依然として迭二烏兎一候　御懸念被下間敷候

一、御別後條理御探索被レ成候段　彌御厚意にも叶候由左候はば　隔山川候とも得一知音候と奉レ存候　夫に付杵築佐野氏の子　此内暫在レ山　談二天地一候ニ付　指示に苦候時　渾象の簡儀を致二指圖一候ニ付　彼生及工藤生（藤生は雖愚の從舅藤子龍介）　細工被レ致候　追て調可レ申候　調候はは定て藤生より沙汰可レ有二御座一候　實は天地を得るの筌蹄（筌は魚をとり蹄は獸を捕る具、轉じて目的を達する方便の意）ともなれかしと存而已御座候、上方の君子に見せ候ものにて無二御座一候

一、時俗の風習御嘆息　滔々たるもの　天下皆是に候得は　とかく難レ申候　浮屠氏などは多候故　俗物も多候得共　其内人物も多く見へ申候　醫流は唐にて尙士にも齒せられす候故　甚人物に乏しく孫思邈如き人甚難レ得候　於レ是偶醫をよくする人ありても　醫を以て稱せらるゝを耻申候　本邦近古已來一變化して　常人と衣裳形態を異に致候樣に相成候　其志をするに　只衣裳を美にし　俗に媚ひ人の憐をとり候事　遊妓野郎と同態　其辨辭聞え候が如しと雖共　廿九日は唯

稍を得るに在候　只徳本子壹人此中にあらず　本邦醫流の第一品とも可申候歟　漫遊雜記を見るに及んで　獨嘯子の胸襟やや灑落に相見へ申候　後藤氏勤厚且被レ爲二一宗之開祖一候得は　於二醫道一大切に御座候　本邦の醫傳見不申候　もし宜敷物も御座候はは御示し可被下候　先草々鶴崎方門生歸省に付如レ是御座候

一、安節へ御加筆猶宜敷申上候　他期二後鴻一候　恐惶謹言

六月廿八日　　三浦安貞

＊門人中佐野玄還など、單に讀み書き、醫書の講説のみでない、梅園獨特の宇宙眞理の研究に其の啓發を受けてゐる。玄還は梅園秘藏の弟子であつたことはその詩に、「共讀二黄牛角上書一」の句でも分る。苟も天玄の條理を探索する者は梅園の好き學友であつた、矢野雖愚は此の方面で尤も寵愛された一門生であつた。

## 岡島羽仙宛

### 箇天儀くつれ物　新五郎歸る迄　（岡島保氏藏）

貴墨拜見秋冷御平善御渾家御凌被成珍重之御義御座候　然者新五郎追々歸し候樣被仰聞承知候　拙者も少々細工ども賴候　仕舞次第　修令も杵築日出邊迄遣候　「同道爲レ致返し可申候　其節は一日日出迄御かし被下候樣にと存候　御賴申入候

一、箱　一つ

是は至て大事之物に御座候　何卒明日にも寺町森常藏殿方へ慥に御屆可被下候　無二間違一樣に還可レ被レ下候

一、箇天儀くつれ物　是は新五郎歸り候迄御預置可被下候

一、書狀前後に成申候　此節御使見事の御肴被仰付忝致受納候　萬々追而可申承候　愚妻も宜敷申出候　恐惶謹言

九月二十三日　三浦安貞

岡島羽仙様

# 須磨屋源助宛

## 御薬又又御進候（杵築、荘野源六氏藏）

拜見御平安奉賀候　今日長世生御迎御遣被成　天氣好御仕合奉存候　又又御勝手次第御遣可被成候　拙無恙罷在候

一、御薬此節又又被仰遣進じ候　近日御眼霞候由　病毒の所致と被存候　重疊御腫氣も萠不申候や　瀉おもはくは無㆓御座㆒候や　何卒今少しつよく有之候へかしと奉存候

一、每度彼是御世話辱奉存候　又又日出へ參候樣奉賴候　是は日用にても入候得は　從㆑私遣申筈に御座候　御取かへ可被下候

一、公子葬儀修了迄　御みせ被下候はば入御念忝拜見仕候　今日早々申殘候　以上

卯月卅日　三浦安貞

須磨屋源助様

＊莊野氏は杵築の商家、須摩屋と稱してゐた。五代目の源右衞門又源助ともある。永賴は諱、萬世は字、それが梅園の命じたものらしい。藥を調べてやつたり手本を書いて與へたり懇切を悉してゐたので、莊野家からも明け暮れに音物を以て謝意を表してゐる。源助永賴は梅園の門に學び、寛政中に歿したとある。

## 石摺代封の儘落手 （莊野源六氏藏）

貴札致拜見候　秋冷御平安御凌被成珍重奉存候　此內出府の節は段々御丁寧罷成忝奉存候　去年いもと樣長崎近く罷成候　舊遊可レ被二思召出一候
一、今日は長太郎生御出　因て御土產の一品御名御祝儀一封被レ懸二貴意一不レ淺自是も御同然祝二萬歲一候
一、石摺代封の儘落手仕候
一、所々届物每々乍御面倒奉賴候
一、此內も買物御世話罷成　當時孔方絶交背二本意一候　少少銀御座候間先入置申候　御受取置可被下候
一、幸便次第久玄上物壹束御遣し可被下候
一、御令室樣にも可然奉賴候　愚妻も宜敷申上候　恐惶謹言

八月廿九日　　　三　浦　安　貞

須　摩　屋　源　助　樣

## 川芎半斤御遣し （莊野源六氏藏）

幸使得申上候　海濕の節彌御多福御入可被成奉賀候　然に此一通無據用事申遣候　何卒慥成使奉賴候　尤魚町山田潮庵　是は海老や緣家いなり町多賀友兒　此方にてもよく御座候　其外にても宜敷思召候樣に御届可被下候
一、きれなし久玄　一束
一、川　芎　半斤（芎は香草ヲンナカヅラ）
右其內長太郎殿御出も御座候はば　其節御遣し可被下候　且又申入候　只今半夏拵候頃にて御座候　貴店にも定て御調可被成候　六七斤程御調可被下候　近來は見事を好みカキ灰を入候樣に承候　願くはカキ灰不入を調申度候　無之候はば力に及不申候　灰入にてもとゝのへ可被下候　乍御面倒奉賴候　早々以上

五月十四日　　　三　浦　安　貞

須　摩　屋　源　助　樣　外一通添

## 年賀四海同風（荘野源六氏藏）

年賀　四海同風申納候　御渾家御壯健御踰年可被成奉賀候　山中依然迎春光候　右御祝詞申述度如此御座候　猶期永日の時候　恐惶謹言

正月四日　　三浦安貞

荘　源助様

## 白水眞人と交を絶つ久し（荘野源六氏藏）

與白水眞人　絶交久矣　青州從事有君之寄來以荷厚意

抄冬季六　　晉

荘君足下

## 又綏々參上（荘野源六氏藏）

御手簡忝拜誦　今朝草々申置候　然は今夕方參候樣被仰聞忝奉存候　此節は急歸申度候故乍無禮



同斷申上候　又綏々參上可仕候　尤用事有之候間晩景か夜陰明朝にても必御見舞可申上候　以上

即日　　三浦安貞

須摩源助様

## 貳匁七分五厘乍延引御落手（荘野源六氏藏）

覺

一、貳匁七分五厘

右之通進じ候　是は年內安太郎罷越候節遣候處　彼者失念及遲々候段氣之毒奉存候　乍延引御落手可被下候　以上

三月四日　　安貞

源介様

## 詩轍御返し（荘野源六氏藏）

此間は暫時邂逅其日薄暮分攣山之薜蘿玉章還璧猶處々之書狀進じ候　無﹂爲﹂殷公喬則﹂幸甚

五月朔　　すゝ武

萬世詞君

詩翰御用に無御座分御返し可被下候　毎度乍御面倒此書狀相そへ御封し被下　藤井安右衛門樣安貞と被成　藤永方へ一部御賴可被下候奉賴候　以上

## 名字永賴は（莊野源六氏藏）

名　字

永賴　字萬世

舜典曰　萬世永賴

安永己亥六月吉　　三浦安貞

莊野太郎殿

## 君侯引見につき御賀被下（莊野源六氏藏）

此間は君侯御引見誠不存寄御眷顧有難仕合　以來家門の榮と存奉候　御賀被下兩品御贈被下　御深情難㆓申盡㆒忝奉存候　右御禮申上度如此御座候　他重て可申述候　恐惶不悉

六月七日　　三浦安貞

莊野源右衛門樣



## 年尾として御挨拶（莊野源六氏藏）

客冬の貴札落手　御清安嚴寒御凌被成珍重奉存候　就は爲年尾御挨拶　御樽肴藥料壹封　被懸貴意　忝致受納候　右御禮申述度如此御座候　恐惶謹言

尙々修令御加筆之御禮何角一同宜敷申述候　乍筆末御兩親樣可然奉賴候　家語御會讀御座候由文風漸開候趣珍重奉存候　以上

正月四日　　三浦安鼎

須摩屋源右衛門樣　奉復

## 年尾御禮として御使札（莊野源六氏藏）

如仰歲除相迫候　御闔門御多祉至祝不過之候　然ば今日は御多事の內爲㆓年尾御禮㆒御使札御樽肴御藥料被懸貴意忝致受納候　萬縷來陽可申承候　乍末筆御兩親樣へも可然奉願候　猶所々書狀御

屆被下忝存候　猶又目錄は不致候　所々返書御屆奉賴候　恐惶謹言

極月廿五日　　三浦安定

莊野源右衞門様

## 小兒出痘之處（莊野源六氏藏）

貴札忝致拜見候　彌御平善　寒威御凌被成奉珍重候　然ば手前小兒輩出痘之處　何も輕十數日起復安堵仕候　右爲御見舞見事之御肴一折御惠贈被下　不淺祝納仕候　右爲可申謝如是御座候

恐惶謹言

十月廿八日　　三浦安貞

莊野源助様　奉復

## 見事御肴御嘉賜（莊野源六氏藏）

錦字披封　秋冷御安健被成御座恐悅奉候　拙御尋　無恙能過候　御安意可被下候　今日は太郎兄御出思召有之候　少少御不出來　俄に御止之由　使物語　早速御平復之程奉祈候　見事御肴御嘉貺忝幾久賞玩可ㇾ仕候　乍慮外皆様可然奉願候



## 轉藥も可然候（莊野源六氏藏）

（切）可宜候　拙ともいついつより御進め申度候得ども御難儀に思召候半　指扣申居候　折角御服用被成候　轉藥を不被成候由　被入御念候御義　是又拙之久敷御藥進候義　思召次第に而御轉藥も可然御事と奉存候

一、日出之一封慥成ル便に奉願候

## 鹽飽屋に居候事（莊野源六氏藏）

御再答拜誦　御平安奉賀入候　義善師之義被入御念候義　彼僧勝手に宜敷候故　鹽飽屋に居候事御心に御さへ被下間敷候

一、正字通御取可被成候　夫故脇かた承合不申候　披露仕間敷候

一、紙

高橋氏様御望次第御上け可被下候　帳面私方へ御扣可被下候　以上

六月十六日　　三浦安貞

須摩屋源助樣



## 手本宜敷物無ニ御座一（莊野源六氏藏）

梅雨中如何　山中無事　令郎御壯健　長二郎殿御出精　拙とも毎日ねむるねむる素讀とも承候
一、此内古野便書狀進候　定て相屆可申候　右申進候紙藥種等此節御遣し可被下候　尤少分の用事折節申進候　御むつかしくば可有御座候得ども　通一通御認可被下候　無ㇾ左候ては覺不申候
藥種と買物混してあしく候はは　二處に御付可被下奉ㇾ賴候
一、長太郎殿御手本宜敷物無ニ御座一　今之千文も子昂と申事に候得とも　どうやら僞筆之樣におもはれ申候　近日書用大阪へ申遣候間　其節徵明一本可申遣候　若御用に無御座候得ば此方望手可有之候　先御沙汰申置候
一、此内は舊杵英平も御宿仰付忝奉存候　心頭難盡書候　恐惶謹言

五月廿四日　三浦安貞

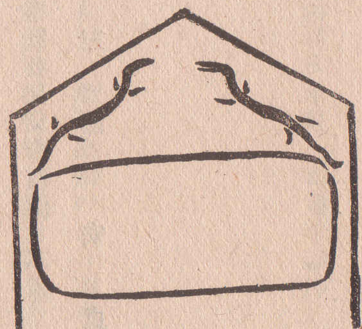
莊源介樣

## 石碑螭首の義とくと（莊野源六氏藏）

此間は逗留乍例御丁寧御馳走忝奉存候　其夜帶月無恙致還山候
一、此內藥申進候　藏出へも御賴申候へ共　今以無便候て歸不申候　今日之便奉賴候
一、書狀猶又奉賴候
一、石碑螭首の義とくと相考候處　篆額と圭首との間に螭を二つほり申事にて螭を頭に置き候事にては無御座候　もよふは御考次第　大圖は右に記候通に御座候　此段斗周翁へ御傳可被下候　以上

九月十六日　三浦安貞

莊野源助樣



## 行平鍋三つ入掌（高田龜市氏藏）

御平安奉賀候　河豚集略平川氏より落手　秋吉方書狀　行平鍋三ッ　並藥種入掌　猶又秋吉ニ銀

札入書狀御願申上　的便御届可被下候　以上

十月七日　安貞

莊源介様

## 辨分より暮候へとも（來浦、吉武郁爾氏藏）

先頃逗留の間彼是御世話被下　不淺忝奉存候　爾來御平安奉察候　昨辨分より暮候得とも　無恙歸宅今日は又々今在家へ罷越　御約束の反鼻霜少少進候　他の書狀共又又奉賴候　不備

二月廿八日　三浦安貞

源助様

## 當春は御婚儀（姫島、江原虎二郎氏藏）

一筆致啓上候　然は當春は御婚儀御調被成候由　御滿悅の御儀漸昨日承候　御歡乍延引　如斯御座候　輕少の一種表ニ寸志一候　恐惶謹言

卯月十四日　三浦安貞



# 奥津左大夫宛

## 急流中勇退御手際ニ候（奥津幸雄氏藏）

先月十八日貴書昨夕落手仕候　暑中御微恙又〻御動御勝不被成候段　魔軍幽僻の地ニ窠窟相構時〻爲致劫掠候と相みへ候　秋涼も近日推移候得とも　消金の餘烈强相覺候　折角御自愛御快復奉レ祈候　右躰の御義故　兼て御噂も御座候　御脫駕の義も御手短御取計ひ　追々御挂冠も可被成段　無事ハ不存候へとも　如拙急流中勇退御手際と奉存候　近々御左右可レ承　猶緩々風月をも相伴可レ被レ樂候　成程世ニハ鼎革の風聞ニ御座候へとも　若待ニ成功一拂レ衣去武陵桃花咲殺レ人とも李白ハ申候き　扨拙恙每々御尋被下忝奉存候　五月四日已來　伏レ枕色〻變態多御座候へ共近日ハ順復食事も慥相進　氣分も宜敷御座候、乍レ去筋力一向無御座　他ノ扶持ヲ不レ假と申位ニ而御座候　讀書等ヲ隨分可レ仕候　今一月餘も保養相加候者　平生ニ復し可申候　今日始而筆取

申候　不分明の處御推覽可被下候　御令閨樣　御賢息樣可ㇾ然奉ㇾ願候　且拙恙難義の時分　兒女輩婚嫁の義も無據指急相形付候　御丁寧ニ御紙面忝被仰下候通　安心仕候事に御座候　秋暑折角御自愛奉ㇾ祈候　恐惶謹言

七月三日　　三浦安鼎晋

奥津左大夫樣　明窓下

*奥津氏は代々杵築藩に仕へ、物頭役を世襲してゐた。左大夫惟孝は、明和九年家督し、天明五年隱居したとある。梅園の門に學び、陶齋と號し、寛政四年に歿した人である。

「奥津君見ㇾ訪」

春深洞口鎖煙霞　留飲煙霞洞口家　重向煙霞思洞口　溪流獨自有桃花

の一詩がある。

當主幸雄氏は陶齋四代の孫で、明治卅二年、帝大工科卒業、工學士として活動されてゐるとの事。

# 植田元左衛門宛

## 古牒致拜見（朝來、植田榮氏藏）

古牒致拜見

一、今度依ニ忠節ㇾ　建長三年　大友丹後守賴泰

賴泰は大友の元祖　左近將監能直より第三代

建長三年は　今天明甲辰迄　五百三十四年なり

一、今度兩鄕宗徒　親　家

親家二人有　木付十三代の城主親家　木付六郎左京亮と稱す　永正の比の人なり　花押を○にするは　是は大友義鎭の次男新九郎親家なり　鞍懸の城主田原右馬頭親貫沒落の後義鎭より其家を續かしめて　田原親家と稱す　天正の頃の人なり　二百年ばかりなるべし　此二通戰忠の義　眞

の感狀なり

一、今度自ニ最前ー

此一通されて文字讀がたく候　されとも前書にみえ候坪井十郎兵衛みえ候へは　親家の家より出候とみえ候

一、父安藝守一跡　　親家

一、父安藝守內跡　　未考　　親董

一、安藝守所望　　天文六年　　浮標に曰義鑑

義鑑は大友十九代の屋形修理大夫と稱す　天文六年より今天明甲辰迄　二百四十八年なり

一、父惣左衛門　　天正七月。（七月は七年？　但親書其まま）

天明甲辰迄二百六年なり　文中七貫文知行七十石なり　府內前代城主日根野織部正藤原吉明この事を長臣中村氏に尋あり　中村申狀古代永樂通寶錢一貫文　卽正九百六十文也　壹貫文白銀四兩にあたる　此時の定價米一石を銀一兩として　錢十貫文米四十石にあたる　四物成にして　拾貫文百石と成也　未位名(ミャウ)々は一支配の名にして　今名主の名こゝに起れり

一、掟　　壹通

掟と書出す事　天下の義　以下被相定候事　一つ書を以て被注置紙に書て其家々に被置申也と小笠原家の書に出たり

一、代々扣目錄

以上九通植田家寶無相違候　植田家由緒別紙相そへ候外　綸旨うつし一通　建武は後醍醐天皇の時の年號に候　何れも御重寶可被成候　已上

天明四年辰閏正月日　　　三浦晋

植田元左衛門殿

附植田氏感狀後

大神姓相傳ヘテ祖母岳明神ノ裔トス、其裔大神惟基ナルモノアリ、豐後直入郡緒方庄ニ居レリ、依テ緒方氏ト稱スト云、又豐後風土記ヲ按スルニ、小片鹿奧(ヲカタノカフク)、小片鹿臣(ヲカタノカオミ)ト云者アリ、緒方ハ或ハソレ、是ヨリ出ル乎、大友氏ノ豐後ニ來ラザル其族甚盛ナリ、大友氏盛ナルニ及ンテ、終ニ是ニ歸ス、蓋大友ノ家士三黨アリ、一ヲ御紋衆ト云、大友ノ紋ハ杏葉也、一族ミナ杏葉ヲ記章トスル家ナリ、一ヲ國衆ト云、九州ノ四姓丹部、漆島、宇佐、大神ノ支流ノ徒ナリ、一ヲ下リ衆ト云、大友能直豐後ニ入リシ日、鎌倉ヨリ從ヒ來リシ家ナリ、大神分レテ三十七家トナル、曰佐伯、曰雉城、曰田吹、曰小原、曰大津留、曰田尻、曰賀來、曰植田、曰小深田、曰敷戶、曰木上、曰下郡、曰東家、曰橋爪、曰神志那、曰上野、曰德丸、深田、堅田、夏足、長峯、都甲、眞玉、世利、

芦苅、阿南、陳、安藤、秋岡、朽原、由布、高城、奈須、胡麻津留、稗田、小手井、森迫
惟基七男あり、長男三田井、次男阿南惟秀、三男植田七郎秀定、四男大野九郎基平、五男臼杵九郎権太夫惟盛、緒方ノ家ヲ繼ク（元暦ノ頃義經ニ身方シ、平氏ヲ追ヒシ緒方三郎惟義ハ此末ナリ、此惟義後上野沼田ニ配セラレテ、沼田氏トナレリ、此緒方ノ家ヲ臼杵トモ云）六男戸田次郎惟家、七男剛太郎惟道
秀定ノ子定綱、其子助綱、其子成綱、其子有綱。有綱ノ子淸綱、遠綱、靈山執行有豪、親綱、康綱、女子ニ山科ノ女房、草牧ノ女房トミエタリ。

天明乙巳春二月　　二子山　三浦晋記



# 安東貞五郎宛

## 御城下に上り御目見（マミエ）（三浦榮二郎氏藏）

高田迄幸便致啓上候　彌御平安御仕廻可被成奉存候　周藏殿に此内木付にて逢申候て　御様子もとくと承候　拙者無恙罷過候　此内木付に被レ召罷出候　左の通御座候　お類へ御傳可被下候

十一日　八ッ半時御城下に上り御目見仕候

上　御服上下（上とは殿様か）

席　御居間　是家老用人近習兒姓醫者御目見への處也　其處の御目みへは直直（チキ〳〵）也

御目見相すみ候て　上にも肩衣御とり　御はかまばかり　拙者も十徳とり夏羽織にて罷出候　夫より一つ間にはいり　間を六尺ほと置て御咄申上候　暮かたに御庭拝見を被仰付　御前直に御先に御立被遊　付まわり御咄共被レ遊候　是は退屈可レ仕と思召候との御事と奉存候　御前にて御茶

御くわし　三日上り候處　三日共に被₌仰付₋　御くわし頂戴次の間に下り可被下と申候へとも　御免無₌御座₋御側にて御茶菓子頂戴仕候

夫より暮候ゆゑ支度被₌仰付₋候　一汁本三菜　御吸物御酒　御さかな　夫より夜四ツ半迄御咄申上　夫より下り申候　御烟草被₌召置₋候にも　御挨拶御座候

其日目錄頂戴仕候　金子二百疋也　御前よりの御挨拶御ぬし　ソウシャレ　カウシャレ　是は御家老衆と御同前の御挨拶に候　其外は手まへドウセヨ　カウセヨ也　夜ふけ歸り候處　御紋付の御提灯中間とぼし　京原篤亭殿旅宿迄御つけ被下候

十二日　八ツ半より　くれ六ツ迄

十四日　同斷

其翌日歸り申候　御籠可被下思召候へども　籠嫌と聞及被遊候故馬被下由　翌日御馬屋中間　御馬被下致₌歸宿₋候　右の通りの仕合無₌殘處₋御事に奉存候　ケ様に御座候へ共　御禮に廻勤と申て　御役人の方御禮に來候事に御座候へ共　拙者には廻勤の御禮に入不₋申左様に御座候間　御家中の御挨拶格別に違ひ申候　御家老中根齊殿に見舞候處　挨拶かわり知行取同前の御挨拶に相成　歸り候節は　次の間迄御見立　中間に被₌仰付₋提灯被₋下候

十四日には梅酒御前にて被仰付　殊の外酔申候　此段お類へ御物語被下悦申様に御申可被下候

今日急便あら／＼申殘候　恐惶謹言

五月十七日　　安　貞

貞五郎様

## お類袖留御祝儀として　（御堂琴代夫人藏）

貴札致拜見候　寒威强御座候得共　御母堂様始御平安御入被成珍重之至ニ奉存候　隨而愚老無恙罷過候御安意可被下候　然者お類袖留御祝義として　重之内並御肴被懸貴意被入御念痛入　忝受納　修令夫婦も宜敷御祝詞御禮申述候　且又お類拂手形兩通相調進₋之候　御受取可被下候　隨而追ミ可₋被₋下₌御參₋奉₋存候　乍₋去嚴寒と申　御繁多奉察候　御出も御同然奉存候　御見合次第可被成候　お類も御同様と奉存候　嘸々萬端御取込と奉存候　乍慮外　皆々様へ可然奉願候

恐惶謹言

十二月十四日　　三浦安定晋

安東貞五郎様　奉復

＊長女お類は、まだうら若くて安東貞五郎にとついでゐたが、其袖留の御祝儀として、重の内を一族に頒つたとあるが、

袖留とは振袖を常着の長さに袖をとめるといふことで、男女元服以前に用ゐる振袖は甚だ長く作つて、腋下を縫うてないのだが、之を縮めることで女兒の元服祝の事である。して見るとお類は元服前に嫁いだものであらう。拂手形とあるはお類へ金を手形にして屆けたものと見ゆる。

## 瀬戸田政藏宛

### お祭に御招被下（安岐、中島穆氏藏）

貴章致拜誦候　冷氣御渾家御安健御凌被成珍重奉存候　此節御祭に付定藏殿御迎御遣被成御歸し申候因て　世忰並又五郎御招被下忝奉存候　相勸（ススメ）候へ共　小兒故彼是と申候故無據御斷申上候右御答旁御禮申上度　如斯御座候　どなたにも宜敷奉賴候　恐惶謹言

十月五日　三浦安貞

瀬戸田政藏樣

一同御禮申上候（中島穆氏藏）

覺

一、御祝儀　壹封
一、御樽　壹樽
一、御藥禮　壹封
右
一、壹封　愚妻へ
一、壹封　拙息へ
右
何も千萬忝　一同御禮申上候　已上
極月十三日　三浦安貞
瀨戸田政藏様



## 小串逸鳳宛

### 病人容躰承知致候（手島辰次氏藏）

先頃者御手紙致拝見　殘寒兎角退兼候處　愈御淸福御凌被成珍重存候　然者病人容躰委細被仰越致承知候　御書面之趣ニ而相考候へは難治之症と相察候　病家懇請難レ辭致投劑候へ共　存寄有之ニても無御座候　主方原ト格梛湯　加硝子丸並綠蒼丸相投候　最初ハ蒼龍丸相投候

一、去冬參上致候節拝見致候　菊苗少少御惠可被下候　時候も宜敷可相成幸便奉レ願　岩戸寺池普請ニ而　御代官も出郷被在候へは幸便可有之哉と奉存候　名札御付可被下候　猶ジャガタラ苗も一本御願申上候　右之段可得御意如此御座候　恐々謹言

二月廿日　三浦主齡
小串逸鳳様

＊小串氏は來浦の人歟、「秋日來浦小串氏莊」の一詩がある。

窓前孤嶼畫圖晩　岸上淸風蘆荻龝　不向人間弄二機事一　相追鷗鷺泛二虛舟一



# 無宛名

## 始終の美名を全ふし給ふ様　（杵築、石田伯介氏藏）

晉謹て考ふるに　古仁德天皇の御あらかは雨もり露そぼてり　其古を推せは　大神宮は御供三杵にしてかやぶき也　御當代東照宮は江戸修覆の義はおしへを遺し給ひ候　新造の義は御とどめ被成候　何れの御代にや　下馬札新敷出來候得は　水戸侯より御當代の御法に新規の義なしとて御老中へ御沙汰有之　古の見つけ柱をかへ候とも承候　近來所所土木の事盛に相成　八坂兩子も出來　當時御宅思召立候由　屋は雨もり風入候而は用立不申候得は　定てやむ事を得さるの御事と奉存候　御支配なとも當春大變　定て御聞にも達候半と奉存候　左候は人民飢寒の徒も多可有御座候　文王の民つかふ事假るかごとくと申候　縣令の類は元より民をかるものに候　文王民をつかふ事かるがごとしと御座候得は　かる人に手際は別段の事かと被存候　民をつかふに時を以て

するはもとより聖人の教に御座候　當君の儀を承候に民をつかふ事甚御苦勞に思召風聞に承候定て是底の義は御思慮の上とかくに申上るに不及事とは奉存候得とも　とかく手付の役人と申ものは存寄候ても人情にひかれ申さぬものに御座候　拙義は切磋琢磨を以て　君と交を結候得ば君始終の美名を全ふし給ふ樣にと奉存候　古人雖有百術不如一淸と申置候　とかく民人等役目に罷出候ものに　御蒸愛壹人にても御減少費省候樣　肝心修造あしく候とも美名不多候　尤兩子とも當春出來申候得とも　是は存寄御座候て一言も不申候　成事は不說とも申候得は　無用とも存候へとも　千一人民痛苦の聲にても有之候ては　酸鼻仕事に御座候　少少怨言御座候ても主令の耳には入不申物に御座候　御老父樣も御堂上に御座候得は　いらさる指出にても可有御座候　御覽後唯献芹の志と思召御恕被下間敷候　已上

八月廿九日　　　三浦安定

## 文徵明草書も參り候（杵築、石田伯介氏藏）

開封御平安之段承知欣然不ㇾ過ㇾ之奉ㇾ存候　然は兼て御賴の廣澤墨帖參候故　此節書生方より進申候　此外にも宜敷物と被ㇾ仰候　歐陽詢行書　文徵明草書參候　文徵明進申候　歐陽詢も御望に御座候はば進可申候　董其昌も參候　是は拙者取申候　其外小部物參候得共皆形付申候　唐詩聯礎と申物一部相殘居申候　左傳の義及御尋致赫顏候　讀書難字過らしく御座候　但今日あたり中はをこし申候　萬事期後音候　恐惶謹言

三月十九日　　　三浦安貞

## 藝苑談拂本出候（大阪、森繁夫氏藏）

通鑑漸十卷はかり見申候　孔雀樓筆記　藝苑談拂本出候　二部共七十錢はかり　いつれも淸君錦著書ニ御座候　御用候者可被仰遣候　拙老老懶相催○○○　先者御念懸被下間敷候　御老人樣にも　御致意宜敷御憑候　恐惶謹言

七月十二日　　　三浦安晋

## 眞の寒水石（佐々木高重氏藏）

契濶不相像候　頃日怡歌文而一家を閲するに　播州明石煎鹽之沙地底寒水石あり　是積年鹽鹵之凝結する者　狀似ニ水精ニ而質軟ク水ニ浸す事久なれハ水と成　是眞の寒水石と御座候　御地煮鹽之地ニて御座候　地下此物御座有間敷や　いつれ地に入る事淺くハ有間敷歟　御試被下間敷や昔年月山の寒水石とて得申候是ハ………　同樣と申候　質不軟　透徹之色　無御座候　草々已上

四月二日　　三浦安貞

## 銅君より承り慰悦（佐々木高重氏藏）

御投書拜誦　爾來御壯健御暮被成欣慰不過之候　拙無恙罷在候　誠此節銅君御見舞久々にて申承致慰悦候　此節御同伴も可被成處　御指合ニ付　無其儀段御尤奉存候　折角御自重御兩親樣にも可被成御力添奉存候　恐々謹言

三月六日　　三浦安晋

尚々手野村孝子御助力之義段々御世話　此節自德藏殿落手忝仕合奉存候　可然先樣にも奉願候　已上

## 健吉殿にも御歸の由（出田新氏藏）

貴墨致拜見候　如仰久敷御樣子も不承罷過候　先以て皆樣御平安被成御座大悦奉存候　弊方無恙罷在候　御意安思召可被下候　就者今日ハ御人遣候付　一種兩囊ニ〇〇乍例忝受納仕候　健吉殿にも御歸可被成之由　任其上候　余事期後音候　猶皆々樣ニ可然奉願候　恐惶謹言

三月廿一日　　三浦安貞



# 松原善太郎宛

## 遠路の御尋問（中島穆氏藏）

一筆啓上仕候　寒威益御安泰可被成御座大悦奉存候　然者此間は遠路の處折角御尋問被下忝奉存候　併不ㇾ存ㇾ寄御來臨麁略の至思召恐入奉存候　暮に及御途中定て御難儀可ㇾ被ㇾ成案仕候　以參御禮申上候筈御座候得共　兼て御心安被仰下候に付　乍略儀以愚札如斯御座候　元藏樣にも宜敷奉賴候　恐惶謹言

霜月十三日　　三浦安貞

松原善太郎樣　玉几下

## 成吉儀兵衛宛

### 茅屋御立寄（中島穆氏藏）

遙遙不得芳意御疎濶罷在候　然者此間は御通行に付　茅屋御立寄被下忝奉存候　折柄他出不得御意遺憾の至御座候　其節は不存寄一品御携被下忝奉存候　右御禮申上度如斯御座候　恐惶謹言

九月廿五日　　三浦安貞

成吉儀兵衛様



## 成吉室平宛

### 菲薄の御菓子（中島穆氏藏）

爾來愈御徒然御入可被成奉存候　菲薄の御菓子如何敷御座候へ共懸御目候　折角皆皆様御自愛可被成候　どなたにも可然賴候　已上

五月廿四日

成吉室平様

## 定藏宛

為年尾御祝儀　（中島穆氏藏）

彌御壯健被成御座奉大悅候　然者今日は為年尾御祝儀御使札兩種　並參子共方迄御祝被下忝奉存候　甚取込草々皆々様へ可然奉賴候　已上

極月廿五日　三浦安貞

定藏様



## 中野升右衞門宛

杉苗五百も六百も所望　（安岐、永松壯三郎氏藏）

貴札致拜見候　彌御壯健に餘寒御凌被成珍重奉存候　拙も無恙罷過候　然者當年西國思召立候由珍重に奉存候　近々御出船の由　最早得二御意一間敷候　折角御壯健御歸國緩々可得二貴意一候　御餞兩種修令より進上可仕候　恐惶謹言

二月九日　三浦安貞

中野升右衞門様

再白御令兄様へ申上候　頃日の御書付委曲承知仕書かへ申候　夏大豆の一件は一向不案内にて合點不仕候故かき不申候　様子委敷本書に書入られ候程に御認被下度候　來る十二日頃壹人進可申候　近々清書成就仕候　廿日より木付（木付は杵築）へ差出し申度候と御申可被下候

一、鴫藏殿へ杉苗の事修令より御頼申置候　よき雨もふり候　壹人取に遣申筈に御座候　横手より奉公人召置候　繪踏にかへり候　其時分人寄申つもりに御座候　無間違奉頼候　先三四文位の苗五百　見よく候はば六百も致所望候　此段も御申通可被下候　已上



## 小深田磯右衛門宛

### 取込の處逗留（江原氏藏）

貴墨詳要　催寒冷相增候得共　御渾家御壯健御入被成候段奉賀候　誠此内は御尋問申入候處　御取込の内逗留御馳走忝奉存候　任御心安到到（タウタウ）御謝辭も不㆓申述㆒甚失禮の至　還て預御挨拶痛入奉㆑存候　且今日は健吉殿御入來御手作の一種御惠投　猶妻小兒迄兩品御遣被下忝奉存候

拙事も仍㆑舊消㆓寒光㆒候　御懸念被下間敷候

他事期後日候　恐惶謹言

霜月八日　　三浦安貞

小深田磯右衛門様

# 蕗正平宛

## 戸次軍記代八匁八分にて候（朝來、植田榮氏藏）

先頃は御立寄申色々御馳走　殊安二郎等逗留段々彼是御取持被下忝奉存候　爾來無異事罷暮候
御安意可被下候　然は戸次軍記代銀八匁八分にて御座候　錢にて御座候得ば　百替にて御座候
最早年内一盃の調に社相成申事に御座候　態々御人御遣被下間敷候　草々
尚々御袋樣御内樣御舍弟樣　何れにもよろしく奉願候　已上

十二月廿一日　　三浦安定

蕗正平樣



## 家中變化驚入候（佐野氏藏）

先頃御狀　美忠方へ御狀　御詩意承候　返答仕候とも覺申候　しかと覺不申候　御免可被下候
扨御家中變化驚入候　御○之節右之樣子御しらせ可被下候　已上

五月一日　　安貞

眞右衞門樣（蕗正平と同人とある）

# 佐渡屋政左衛門宛

## 中汲は拙者甚好物 （佐野平作氏藏）

御使札致拜見候　窮陰風雪之頃御淸安御凌被成大慶奉存候　令郎先月御心克御樣子　乍然少々御外邪之由　折角御保護可被成候　春來又々御樣子相伺可申候　今日ハ遠路態々御使　中汲（中汲は濁酒のうはずみ）一樽御肴料一封被懸御意不淺受納仕候　中汲ハ拙者　甚好物ニ御座候へ共甚難得品御心ニ付候義甚樂ニ奉存候　無餘日御座候へは　何事も期來陽候　皆樣可然奉願候　恐々謹言

十二月廿七日　　三浦安定

佐渡屋政左衛門樣　奉復

尙々此間ハ從志保屋　御使御藥禮等被懸御意忝奉存候　且又元藏より獺肝參候へ共　拙者新鮮を得候故　元藏より參候をは返し申候　犀角と一品分ニ御才覺御遣可被成候　已上



# 山田孫一宛

## 從長崎碑文參り候 （山田榮氏藏）

良久敷絕音問候　彌々壯健御入被成奉賀候　然者從長崎碑文參候故指上申候　尤字の壞（クヅシ）有候てちと石工氣ニ合間敷や　乍去致方もなく候　手跡ハ吳興之周壬錄書候　是を書候事却而大慶ニ存候由　長崎來狀懸御目申候　此狀御覽已後御返可被下候　尤此碑文並來狀市原氏寺川氏にも御みせ可被下候　今日到着直ニ進候故　此方にては点檢も不致候　萬々得貴意可申上候　頓首

五月十日　　三浦安貞

山田孫一樣

＊山田氏は長州で伊佐氏と稱してゐた。慶安の頃、杵築に移住し、杵築侯に仕へてゐたといひ、孫一は文化三年寅九月に歿したとある。家に戰國時代伊佐氏と稱せし時の古文書を多く藏してゐる。

# 賀來吉左衞門宛

## 眞玉へ片便を得候故寸楮 （佐野秀子氏藏）

無程ことしも及暮春候　如何御過し被成候や　山中依然として罷在候　且此内書狀書物相そへ進候　今程ハ御落手被成候半と奉存候　高田便稀ニ御座候て書狀も出し不申候　日出への御狀ハさし遣候　對客記事承候故津らん（津らんの文字、誤寫乎）繁節別而序文めつらしき事とも承候　此節ハ眞玉への片便を得候故寸楮　記事御還璧仕候　此内ニも見へ候　油幢小品日本考　是も其内御かし可被下候　大疑義人蝦夷釆覽等之品必御惠投奉希候　且先書之御報其内と奉謝候　頓首再拜

三月十一日　　　三浦すゝむ

玉淵君梧右

＊歸山錄に「玉淵字は子登、中津豐後町に住す。我四十年來の相識なり、將に西遊せんとし中津に留まること數日、共に語る、玉淵和書を好み且つ俗間流布の書を藏す、近頃雙島氏宮本武藏の事を書く、玉淵之を示す、猶武藏の碑文を出して示す」云々とある。

## 豐國紀行御惠投 （佐野秀子氏藏）

正月廿日年首の御賀詞落手　御持恙も次第御心好御踰年被成候御樣子奉珍重候　自是も祝書指出候　定而御入掌と奉存候　十二月十六日の御鴻書も至レ春拜見　此内答詞申進候　豐國紀行（豐國紀行は貝原益軒の著）御惠投始而彼翁（彼の翁とは益軒の事なり）敝藩にも擧レ趾の事承候　右被尋候宮内の舊宅もしれ候得と　舊跡も殘ことなかるへく候事　別而悅申候　今暫恩借可レ仕候　御序跋御探索候事とも　別而有用の御文と奉レ存候　注進目錄受取申候　夾板（ハサミ）等を元〇集彼是御返申候迄御預候

一、豐前後分れ候節探索不仕候　若見當り候へ者可申上候　彥山屬ニ豐前一候事同樣承知　釋大潮英彥山志にも此事ハ無之樣に覺申候

一、兩所の書狀其内得便相屆可申候

一、播〇氏苦々敷奉存候

一、八居題咏急ニ一覽仕度候恩借奉希候　石川覆醬集一寸考索ニ入申候忝奉願度候　銕謙益列朝

詩集御地ニ有之候様子に承候故　此内倉文學（倉文學は倉成龍渚也）ニ承候處無之候　もしや貴君方には無之やとの事ニ御座候　もし有之候は暫御かし可被下候
一、詩法要略年内御返進申候　定而御落手被下候と奉存候　兼而申候通　詩轍上木も可レ仕かと申ニ付　詩類詩話類吟味仕度事多候得とも　寒郷無書こまり申事のみに御座候　先々答意申述候迄に如是御座候　恐惶謹言

正月廿九日　　　三浦安貞晋

賀來吉左衞門様

*賀來子登、諱元龍、字子登、通稱吉左衞門、玉淵は其號である。又九九子と號し、亭を彩雲といつてゐた。中津の人で釀酒を業としてゐたが、父に繼いで町年寄となり、又銀鈔の事を司つてゐた。
先祖の惟春といふが、下毛郡賀來村から中津に移り、子登の父惟政が、濱田氏を娶り、子登を生んだ。梅園先生と藤田敬所に從學したものだが、其の性獨立不羈、凡俗と合はなかつたので、町年寄を辭した後は閉戸し客を謝し、以て書を著はすを樂としてゐた。天明甲辰四年、六十九で歿した。梅園その時六十二歳であつた。其碑文は梅園先生の撰である。

## 今昔物語拂本有レ之由（佐野秀子氏藏）

年賀の御書兩通共落掌申候　春來仍レ舊而被レ混ニ塵事ー候段要ニ遐遊ー候　荒歳故御城下も物騷ニ隔川失火及數百間候由　因而指揮旁御債勞御尤奉存候
一、今昔物語拂本御座候由　被ニ仰聞ー忝奉レ存候　乍レ去當時相調候義ちと內分難仕候故　强而御乞難申候　何卒承諾此邊にも相手御座候様にハ仕度候如何
一、通かけ被成候義ハ相成申間敷や　夫共に慥に相手相しれ不申候へハ思召次第奉存候
一、此節歡樂筆談二王外記進レ之候　緩々御覽可被成候　挾板の義龜相には御座候へとも其御地へ被召置御遣ひ可被下候　必御返信被下候に及不申候　民德歸厚等追々一見仕度候　橘窓茶話五事略何卒御うつし取可被成候　其上拜借仕度候　甚所ニ冀望ー候　當年に又ゝ其語いじりかけ候　如何様當年中ハはか〱敷書物も見得申間敷候　猶期後慶候　恐惶謹言

二月十日　　　三浦安貞

賀來吉左衞門様

# 綾部要哲宛

## 秋吉産科段々發興（荒巻璞次氏藏）

ヽヽヽヽ（切）御平安に御踰年奉賀候　從レ是も書狀指出候　御落手と奉存候　拙者無二異事一罷在候　御慮念被下間敷候　然者產科一流秋吉生傳來此方に取　甚重寶ニ存候　貴兄も何卒暫御入門御傳候樣にと呉々　猶御親父樣よりも此段自二拙者一申入候樣ニ御賴にて御座候　子玄子も高年と承候へハ可被成事ニ候者　御急被成度御事奉存候　秋吉產科段々發興ニ御座候　恐惶謹言

三月四日　三浦安貞

綾部要哲樣

尙〻ヽヽヽ（切）每々御加筆可然御禮申上候　且又敢語今比ハ大かた及成就にも及候や　段々御苦勞忝奉存候　左候へは　渭陽君に一部呈上仕度奉存候　如何可致哉　御賢慮次第先樣不レ苦思召候者可然御とりはからい可被下候　已上（此外綾部要哲宛一二通あるも、後項に揭ぐる事にした）



# 賀來泰安宛

## 加藤周平歸藩之上（賀來粲二郎氏藏）

遠方御使札忝拜見　先以曩日は遠路御芳訊忝慰積欝候　御歸路夜中殊風雨　御難澁の段奉察候　先々御無難御歸着　其上御令閨樣御分娩男子御出產の由遐祝仕候　扨又康二子之義段々御世話被下不淺奉存候　重疊熟譚不相成之旨奉承知候　其外宜事も有之候ハ　小子迄可被仰聞奉願候

一、彫刻の義　御歸宅の上佐田屋御兩家へ御斷之處　當時御入用銀子有之　御世話可被下之旨御厚意忝奉存候　何卒左樣仕度奉存候　乍然御推察之通　此節孫文子閉蟄　右之銀子も鄕中借。候○○相成候へは　急ニ取立の處甚無覺束　千一取立相成候とも皆濟可相成哉も難計候　御存之通去冬已來在中噪擾ニ候へは　右躰の義ハ一向貪着ニも及不申樣ニ相見申候　重疊之處相知れ候はゝ拙者口入も成否は無覺束候へとも試可致候　此度加藤周平も出鄕ニ而　相談相手も無之候

右刻料拙者初より預り不申候へは　其内加周歸藩の上熟談仕　兩子へも周平より內〻懸合候樣ニ可仕候　其上ニ而何れとも貴答可仕候　加周歸藩も未相分り不申　何れ四五日之內乎と奉存候　拙者も十五日已後ニ相成候ハヽ佐野迄可罷越候間　其節拜顏御面談可申　先ハ貴答早〻如此御座候　取込亂書御推讀可被下候　恐惶謹言

梅　園　晋

＊賀來泰安、佐田村の人、諱驥、字は千里、通稱太庵（梅園先生は泰安又泰庵の字を當つ）幼にして異彩、喜怒を色に出さぬ爲、或は癡者と呼ばれてゐた。然し讀書を好み一讀すれば終生忘れぬといつた程よく物を覺えてゐた。十七歲で梅園先生に就學する。七年に三度しか父母を省せなかつた。先生も其詩の天材を見て、詩を以て名を成せ、千首を作れば必ず詩人となれると勵ましたが、初志貫徹に力め、先生の勸めも用ゐなかつた。先生歿して始て去つて京師小野蘭山に本草を學んだ。蘭山又本草を以て天下に名をなせと說いたが、聞かず、父の遺托を重んじ歸り高田町に開業、仁術を以て鳴つた。常に梅園先生の窮理の說から病因を原ね、能く奇中してゐた。文化十四年三月、享年五十七で高田町に卒した。碑文帆足萬里先生の作、二兒佐之、飛霞、亦本草學を以て知名である。次の詩は梅園が泰安に贈つたもの。

送㆘賀千里辭㆓梅園㆒還㆖郷　　梅　園　晋

丹鼎煉金古幽洞　洞天有㆑路入瀛洲　濯纓水自偃源瀉　種玉山懸煙月浮
世上文章鸚鵡賦　人間意氣鷫鸘裘　停鞭試見春園色　風散飛花動暮愁

## 詩轍梅園集板木紛失　（賀來粲二郞氏藏）

佐野玄盟御地へ參候付　呈一書候　溽暑之時候愈御淸福可被成御凌珍重存候　劣義無魔事相凌候乍慮外御省念可被下候　就て先達より詩轍梅園集等　板木一件に付每々及御懸合御世話被下忝奉存候　源泉兎角申譯を主と致し　板木取返之事相分り不申候　此方抔意外ニ仔細無御座候　是迄之刻料も紛失ニ而致方も無之　只紛失之板木取返し申度斗ニ御座候　此上源泉病氣快復不致か又は快氣の上亡命致候か　異變御座候節は手懸り無之樣相成可申　兎角延々ニ相成候而ハ甚不安心之至ニ御座候　右板木慥に取返候と申儀相分り　此方安心ニ相成候程の人　加判の一札に而も受取置候へハ　已後源泉如何樣へ異變有之候而も手懸り相殘り候間　無據官裁ヲ仰樣ニ致候而も板木ハ取返し可申候　外ニ仔細無御座候間右之趣意御含御取計可被下候　板木只今手ニ入不申候而も安心さへ相成候へは宜敷御座候　先日源泉書面にも　此上贅語正誤改刻致度抔申出候由ニ候へ共　左樣迂濶之儀ハ乳臭之小兒を欺候樣なる事に而承知難致候　此位の議ハ御雅量も可被下候委曲玄盟口頭可申陳非㆓筆紙所㆑盡　恐惶謹言

五月廿一日　　三　浦　主　齡　黃

賀　來　泰　安　樣

## 若狹屋老人ニ對し愚案未決（賀來燊二郎氏藏）

先以過日は寛々拜眉大慶仕候　今日午後無難歸山仕候　御約束申置候藥十斤　今日の便指上候　御入手可被下候　長屋横物壹枚書候筈御約束申置候　今日急便妄却ハ不致候間　後便可呈候　左樣被仰通可被下候

一、長屋病人　私經驗ノ方ヲ以テ調合致候　三和散相用度奉存候　只今は便滑溏致候間　半夏瀉門か滑石相投候

一、若狹屋御老人投劑致候樣　其節御噂有之候　愚案未決定不致候　殊ニ今日ハ急便故其時合も無之候　得と相考其上何れとも可仕候　數十年痼滯之兒豎一旦ニハ不レ可レ除候　只一時之變調ニ過申間敷候　其内疝ノ症ヲ挾ハ不致候哉　高案如何　何分附子吳幾茰茴香川練子等之處乎と奉存候尙賢案承度候　何分此節は匆々不遑究尋候　頓首

六月二日　　三浦修齡

賀來泰庵樣

尙々本書之旨若狹屋ニ御通達可被下候　甚細悉之人ニ御座候へば　私疎畧ニ致候樣ニ被思候而ハ氣之毒奉存候　大年（大年は、弟の玄龜なり）醫業之儀御工面被成置可被下候　得と相考決定之處可申上候　已上



## 鶴崎より大黃參候（賀來燊二郎氏藏）

餘暑尙甚敷御座候處　益御平善可被起居珍重奉存候　小生も此節豐田病氣ニ付　又々罷越し同人も起色無御座候迷惑仕候　右ニ付先日ハ順々御世話罷成候由忝奉存候

一、佐田屋御養弟　先日御引取被成候哉と奉存候　炎氣之節御苦勞奉存候

一、鶴崎より大黃參候　壹斤ニ付三拾七匁四分とか申來候　現銀ニ而は三拾貳參位かと相覺候　私方に書付御座候得共　得と覺不申候　少々ハ下直ニ御座候　御入用ニ候はゝ　幸便之節　壹斤差上可申候　草々

七月十八日　　三浦修齡

賀來泰庵樣

## 貴塾兩雛蒙二惠來一候（賀來燊二郎氏藏）

奉讀益御多福被成御座候由　奉大賀候　僕未逗留仕候　小兒病症進退不レ定　今日者宜敷御座候　僕疝痛も少々宛宜敷相覺候　然者今日者　貴塾兩雛生蒙惠來辱奉存候　鮮魚御惠被下　拜受仕候　逗留中手本相認可申候　拙筆不勝忸怩候　他者期後音候　已上

三　浦　修　令

六月四日

賀來泰菴様

## 學業近來進一歩候樣相覺候（賀來燊二郎氏藏）

懇篤之瓊報拜讀　新寒之時候　益御寧清被成御座候趣　珍重奉存候　然者古脉法圖解御投却被下。入手仕候　一見識賢衷にも相合候旨　御尤奉存候　村山氏性質魯鈍之人　只用力專一成得一家之言可畏

一、賢兄益御精敏御作務珍重奉存候　小生牢落（サビシ）依レ舊候　只於學業近來進ニ一歩一候樣相覺候

一、牡蠣肉一筩御惠被下拜受仕候

一、平野立仗參謁之由一向存不申　歸國之樣子も承不申候　萬端春陽可申述候　恐惶謹言

十二月十七日　　三　浦　主　令

賀來泰菴様

## 僕以ニ天之寵靈一再（賀來燊二郎氏藏）

尙々　京師書狀尙○ニ見せ　其上御返可申候　如諭佐藤先生物故愍傷の至奉存候　已上



芳牘拜展時下商夷益御康平不堪慰悅奉存候、鰔生眠食無レ恙幸勿レ爲レ念　誠ニ病中ニは如レ燬之時候　御尋被下不レ任ニ感荷之至一候　僕以ニ天之寵靈一再得レ視ニ天地日月一何幸如レ之　術業以聞御發行之旨御尤奉存候　前胡治嗽之奇方聳聽候

一、行余醫言之義被仰下　應答無言候　來ル十月彼地○禮參上可仕候　其節取調可申候　此節失言ニて足下假令作嵇叔擇書僕不ニ以爲一恨

一、京師之來書御投示被下忝奉存候　如仰惡筆澁讀仕候、、平安之樣子ニ御座候　先日杉山書狀到來賢兄へ加筆申來候　別事無之由　植置しネヂカネ艸麝香艸當年も萠牙　左之通發句申來候

そよと吹く草にも風の香り哉

右之通申來候　賢兄より一向御音耗無之如何と申來候　幸便書狀御投可被成候　鸞婦母子饕餮（タウテツ）（饕餮は財を貪り食を貪る事）依舊候由姬路屋よりも書狀到來仕候　先は匆々拜復亂書御推讀可被下候　已上

九月廿三日　　三　浦　主　令

賀來泰菴様

## 拙家養子の儀（賀來燊二郎氏藏）

御使札致拜見候　時下薄暑之候　彌御安泰被成御凌珍重奉存候　弊地無異罷在候　乍ニ慮外一御消

念可被下候　然ハ拙家養子之儀　內河野村爲五郎と申人博三緣家ニ而　先日歸鄕之節傳言之趣委曲被仰下致承知候　先書申條之旨尤千萬之儀奉存候　春ニ至自レ此懸合之處　去年大夫迄內々申置候儀　君邊難相濟色々心配之儀而已に御座候　何卒折合之上吉左右申遣度心底ニ而　日又一日月又一月及延引候　寡君東覲之期も逼候ニ付　每々申立候處　大夫之取計間違之筋有之候趣ニ相聞候　乍然過を大夫に歸し候儀ハ難相成幾重にも事成就致し候樣ニ相計度　種〻手を盡し候へとも兎角相濟不申　來歲寡君旋旆（センパイ）を相待候樣にと申事と相成申候　乍レ然來年に至り　重疊無相違相濟候事哉是以難計奉存候　先書無理ニ致所望候儀ニ而　千一破談ニ相成候而ハ何分相濟不申　博三父子再會之面目も無御座候　誠ニ進退維谷之仕合ニ御座候　然處京屋小三郎近日當地へ參候樣承候ニ付　右之人ニ致二對面一候て得と熟談致度心底ニ御座候處　今以て參り不申　日〻企望而已ニ罷在候　來歲ニ到り重疊無相違相濟と申儀分り候て　先書乍不肖右之旨懸合可申　又とても相濟不申と申事ニ候て　一日も早く決定致度候へとも　去三日寡君乘船前後大夫始小子輩　日々紛劇中ニ而　及其事候暇も無御座罷過候　大夫之處今一應懸合迚も　不相濟儀ニ候はゝ　不○以壹人存意可得貴意候　先書の存念甚以相濟不申心配此事ニ御座候　此上重疊不相叶筋ニ御座候　乍御苦勞賢兄と一應日田へ御越　右之旨御申聞キ被下候樣御賴申度候　每〻御苦勞御儀と奉存候へとも代人ニ而ハ相分り兼可申と奉存候　小子心底、全以破談之存念毛頭無御座候　右大夫間違之筋ハ筆紙ニ盡しかたく候

一、倅兒儀先日年回ニ而鄕里ニ歸候處　今以逗留之由　如何之儀可レ有二御座一候哉　氣之毒之儀ニ奉存候　是ハ何れ不熟之事ニ御座候はゝ　早く決定可レ然奉存候　兩方共何ぞ格別之申分も有之間敷奉存候

一、油藥之方　段々御發明　カネトール之方御工夫之由　誠ニ天下之奇方　上自二天子一下至二乞兒一是藥方ニ而不治事ハ有之間敷　私ハ此方傳授ニ及不申　御調合之上一箱御投可被下候　話止繁茹

五月十日　　　　三浦主齡

賀來泰安樣

## 日田表一件御面談之上（賀來榮二郎氏藏）

新歲の嘉儀御同意申納候　御擧家彌御淸福　被成御重算目出度奉存候　弊廬依舊候　然ハ日田表一件御面談之上取計致度　彼方へハ未何事も懸合不申　舊冬博多屋へ飛脚便一禮申遣候　鍋屋之方へは未書通致不申　尤此表願も未相濟不申候へ共　多違變之儀も有之間敷と奉存候　其內日田表一件差立候而宜敷可有之哉　結納等も追々は差遣申度奉存候へとも先拜顏之上と存　延引罷在

候　早春御出も可被下様年內被仰候ニ付御待申　暮ニ若シ御多用等にも　御入被成候はゝ　大年ニ而も其內御地へ遣し委細御様子承候様ニ致度奉存候　先御左右承度如此御座候　恐惶謹言

正月廿五日　　　三浦主鈴黄（花押）

賀來泰安様

尙々御家內様宜敷奉傳候

一、唐大黄甘艸下直之品有之間敷や承度奉存候

## 灸炷七萬五千迯達仕候　（賀來燊二郎氏藏）

去三日之貴報相達忝致拜見候　漸寒冷相增候處　愈御康裕被成御凌候由奉慶賀候　天刑方御示被下忝奉存候　是ハ經驗之御方ニ御座候哉　治効有之候哉　如何　灸炷七萬五千迯達仕候　每々御面倒之御儀御世話被下忝奉存候　御同様梅黄之時節　寂々寥々之仕合ニ罷在候　珍敷治驗も無御座候　今朝も不相替　公私紛雜　草々　略筆頓首

九月廿八日　　　三浦主鈴

賀來泰安様

## 此方病人今日益宜敷　（賀來燊二郎氏藏）

尙々小子も明日ハ歸藩仕候　今日の様子ニ而先ゞ安心大慶奉存　是上宜布

此方病人今日は益宜敷拜見悅申候　精神餘程正敷　言語錯亂は纔之事に相成申候　昨夜中小水不通　今日兩度快通　食量無增減　氣力同様無大便　今朝食事　箸椀自分ニ持候而食事仕候　渇少減　今日快ク熟睡呻吟之聲も相止　咳喘も少ハ輕ク相成候　昨日竹溫膽適中と奉存候　御考御投劑可被下候　已上

十一月十七日

## 唐本之醫書拂本御座候　（賀來燊二郎氏藏）

梅雨連綿益御淸福被成御入珍重奉存候　先日は芳訊忝奉存候　無レ程御歸着被成候哉　然ハ其節被仰置候唐本之醫書拂本御座候　單方彙編三册一帙金百疋と申候　御入用ニ候はゝ近便ニ指上可申候御入用無御座候はゝ其段可被仰付候

一、昨日杵築より書中指出候　未相達候哉　御用立置候東洋方函御用相濟候はゝ御投却可被下候且又其節御願申置候豐陽志御借用可被下候　急奉願候　右之段可得貴意草々如斯御座候　頓首

五月十日　　　　三浦修齢

賀來泰庵様

尚々京師杉山書中到來宜敷申上候様申來候　其段貴君之御書中一向無御座との事に御座候　已上

## 久勞如何御入（賀來榮二郎氏藏）

久勞（久勞は久しき間）如何御入被成候哉　先頃ハ御返書被下　早速相達忝奉存候　小子申候金星艸即小鳳尾　又々可懸御目候

一、赤足蜈蚣　蜈蚣ノ小ナル者足稍赤シ　此ヲ謂乎　又別ニ一種有乎　俗一寸ムカデト呼者ハ蜈蚣ノ子乎　別種乎　馬蚿ハトウメ乎

一、鱧魚　ハモト云者當乎　總ジテ綱目　魚類ノ説疵也　彼ノ人江湖澤中等ニ有ト云者ハ　此邦ニ而多ハ海中ニ有リ　彼ハ大國故大澤巨水多ク　此邦ニ不生川魚等定テ多カルベシ　シカシ鱧ハ海魚乎　綱目ニハ生二九江池澤一ト有リ　海鰻鱺何物ゾ

一、蜣蜋　糞甕中ノ黒蟲有翼者乎　轉丸等ノ事　僕不見

一、鼠酒　其後見出シ不申　虎酒ハ狗ト有リ

一、飛絲　本艸ニ毎ミ有リ　飛絲入目ト有　何物乎

右數條不レ顧レ煩謹乞垂示

五月廿六日　　　　三浦修齢

賀來泰安様（泰安は博物學者である故に斯る不審を糺したものであらう）

## 唐木香賤價之品（賀來榮二郎氏藏）

今日ハ好天氣御出立被成候様ニ候は　懸御目間敷候　遠方之處御出被下忝奉存候　贅語彫刻之儀も定而御熟譚被下候儀ニ奉存候

一、唐木香賤價之品若有之候ハ御調可被下候　代札三拾匁御預ケ申置候　御受取可被下候　已上

二月廿七日　　　　主鈴

泰安様

## 御母儀様御不幸之段（賀來榮二郎氏藏）

陳者　御母儀様　御不幸之段　承之　奉驚入候　御愁傷之程奉體察候　右御悔申上度　如是御座候　恐惶謹言

四月六日　　　　三浦大年

賀來泰安様

## 京師又々大火 (賀來桑二郎氏藏)

大暑之時候如何御入被成候哉　小子無別事罷在候　近來御療治御發行奉察候
一、白井河野書狀二通御届申上候　先日參り候へ共　便無御座延引仕候　斧屋より書狀參候　宜敷申上度　別事無之趣ニ御座候　四月廿八日出之書狀ニ御座候　貴君始　我々共三人へ狀ニ御座候　今日見出し不申　又之便り指出可申候　杉山より私へ書狀參候　宜敷申上候樣との事に候
河野玄泰先日下り候由　未逢不申候
京師又々大火　五月廿八日より廿九日晝迄　四條より大佛迄燒失と承候　委ハ存不申荒々申上候

草々頓首

七月七日　　三浦修今

賀來泰庵樣

## 桂細根皮御座候はゝ (賀來桑二郎氏藏)

桂根は當所參居候て札六匁位仕候　其上大根交り候而細根ハ少ク氣味甚不宜候　御考合せ可被下候

先日は御答書拜見　溽暑之候彌御靜寧被成御凌珍重奉存候　其便牛黄之殘銀ニ而　木綿一反御買被下由ニ而　慥致落手候　御面倒の義忝奉存候　尙其餘銀御座候間　麻黄御調可被下哉之旨致承知候　左樣には餘銀可有之とも存不申候　乍併餘銀の有無ニ不拘　麻黄下直に御座候はゝ少々御調可被下候　桂細根皮も御座候ハヽ五六斤御調可被下候
一、先日の御答書ニ近日中當地へ御出可被下趣被仰付候處　溽暑之節と申　遠路甚御苦勞の御儀ニ奉存候　必其儀ニ及不申候　御出被下候而も何そ格別之御面談筋も無之候　玄泉一件の儀ハ以書中御懸合申候通りの儀ニ而　外ニ入組候譯も無御座候　燒鹽四顆御惠被下忝受納仕候　右再答旁可得貴意如是御座候　恐惶謹言

五月七日　　三浦主鈴

賀來泰安樣

## 鈴木老母中暑ニ而 (賀來桑二郎氏藏)

小坂小兒方差出候　御入手可被下候
益御全勝御凌之由珍重候　先日ハ遠路御苦勞奉存候　其後竹田の醫者參候へとも　驗無之候　先月十六日歸泉殘念奉存候

一、書物料不足ニ相成候　別紙御覧可被下候

一、鈴木御老母中暑ニ而　兼而持病の喘氣ヲ挾　些氣遣ニ存候へとも　只今の様子日々快復の御様子に御座候　初ハ生豚散小柴合加石　只今ハ清暑益氣相投候　御令閨様遠路御出　御苦勞奉存候流行病多　御繁劇の段承之　御混雜奉察候　早々頓首

八月七日　三浦主鈴

賀來泰安様

## 賤女縁談決定御聞 （賀來粲二郎氏藏）

遠方御人被下忝存候　暑氣相増候處御清康被レ成ニ御入ー珍重奉存候　野夫無異罷在候　御省慮可被下候　然ハ先達被仰下候賤女縁談の義決定の處御聞可被成の旨　此義疾（トク）より可レ得ニ貴意ー の處本人も先日漸く歸宅　親子の間ハ情も難通暢候へハ　幸弊邑社日も來ル廿日の事ニ候へハ、親類の者共も相集り可申間　其節本人心體（シンテイ）得と承り　貴答可仕と存及延引候　尚又足下得御尋候者甚如何敷候へとも　任ニ御心安ー底意不レ殘申述候　脇方より承候處　油屋御子息當時懲瘡最中と申事に御座候　傳聞の説甚以難信候へとも　承候而は安堵難仕　愚妻始如何と疑念相催候　婦人の道一與人齊至死失靡他是其常ニ候へとも　未許嫁不致中は宜熟慮細思事ニ奉存候　右之通ニ御座候へハ親子恩愛の情有レ所レ不レ忍　足下亦已抱レ子願體認推察奉祈候　其外酗酒博奕淫佚飄蕩等の事無御座候へハ貧富の望少も無御座候　貧富ハ人間の常非レ所レ擇候　右の段貞五郎方へも尋遣し候何れニも弊邑祭禮の節迄纔十日計の事ニ御座候へハ御待可被下候　佐野迄幸便可有御座候　御人遣ニ及不申候　自此一決の御返答可仕候　右懲瘡等ノ義御聞被成候事も御座候ハヽ　貞五郎へ無御遠慮御噺可被下候　右拜答早ゝ如此御座候　恐惶謹言

六月九日　三浦修齡

賀來泰庵様

＊黃鶴にタヅといふ一人の娘があた。其の養嗣子を納れる媒酌を太庵がしたらしい。それに關しての書狀である。

## 源泉一言半句罪ニ服する事無之 （賀來粲二郎氏藏）

先日ハ自貴館の貴書拜見　寒冷相增候處彌御安寧被成御凌珍重存候　其節の御書面ニ源泉因果物語三子の方へ被仰遣候間　承知致候様被仰聞候　折節小子檢見出役罷立　昨十二日歸宅　則三子への貴書致拜見候處　幸四郎佐藏と申兩家共ニ不如意ニ而大迷惑の由　偖々氣の毒ニ御座候　是ハ取計ニ依而　左様ニ不相成とも可相濟事と奉存候　春已來段々御懸合申候へ共　兎角此方の趣意御酌取無之哉と奉存候　依而差圖ヶ間敷失禮の儀ニ候へ共　底意不包左ニ相記候　得と御諒察

可被下候

一、源泉不埒の一件は今更縷陳ニ不及　先右の通不埒の儀明白ニ相分り候上ハ　源泉親類親友の者ニ而も早速壹人此方ニ參り　金拾兩ニ銀百七拾匁御捨被下候儀忝奉存候　上木の書籍懸合も不致猥りに改竄致候段　甚失敬の到此段御用捨可被下候　又大坂藏屋敷役人ヲ欺キ板木取出し自由ニ賣却候段　是以申譯も無御座候　一ニ源泉罪に服候と申挨拶有之　其上ニ而右板木ハ何れにも追々受返御返濟可申爲ㇾ其　慥成一札差入置候間　板木取返の儀ハ　銀子調達迄何卒延引被下候様ニと申挨拶有候へは　此方もソレヲ鹽ニ面皮相立　社中への申譯も相濟申候　然ルニ源泉一言半句も過ヲ悔ヒ罪ニ服スルノ事無之　强項不屈の段ハ何トモ不得其意候　唯今人ノ扇子一本取替候而も　無調法致候　御免可被下と申挨拶ハ世間一統申迄も無之候　然ルニ源泉一言の誤リヲモ不申は餘りシキ人を馬鹿ニ致シタル仕方と存候　ソコデ左様ニ源泉カラ馬鹿ニシラルヽコトハナラント申リキミ也　御合點乎　ソコテ此方ノ不平ハ源泉より失禮也　貴方の御心配ハ銀子の調達也　此處ニ大ナル齟齬有り　右の通り慥成一札ニ而も（此一札ノ儀ハ先書ニモ申述候）受取置候へは　板木取返は當年中ニ而も來年ニ而も不苦候　ソレ故此方ニハ賢兄御取計のヌルキヲ憤ルニハアラズ　義理ヲ以テ源泉ヲ服シサスルコトノ出來ヌヲ不平ニ存スル也　源之助殿ハ御役人ニ而世事ニ御練熟ノ事故　左様の處ニ御心付も可有之哉と存し　内分にて申進候也　全ク表向の訴訟ニハアラズ　乍然



此上ニも埒明不申候へは　無據出訴可致候　ヶ様の儀此方より申され候儀ニは無御座　是迄差扣候へ共　此度ハ不得已申述候　失禮の段御用捨可被下候　右の段可得貴意如此御座候　恐惶謹言

十月十三日　　三浦主鈴黄（花押）

賀來太安様

尙〻脇子も歸泉　偖〻殘念の到ニ存候

## 前藥の餘力ニ而（賀來燊二郎氏藏）

脈も何れ少〻平和ニ相成候　唯今の處ニ而ハ手を出す程の療治場見受不申候　精神氣力ノ復ヲ待計の様ニ相見申候

今朝通し無之ニ付　黄龍湯御調合被下候様申上候處　只今大便快通硬輭の中ニ而　ナリノ出來ヌト申位の事ニ御座候　飯椀二盃程茶色の便通し申候　前藥の餘力ニ而　是上一二行ハ通し可有之候　最早黄龍ハ相止可然存候　思召の竹葉石膏御投可被下候　昨夜より得と熟睡仕候　食事今朝の儘其後未タ不申進追〻相進可申候　只今通後も精神安靜ニ御座候　肌膚の熱少も覺不申　平人の肌膚も同様ニ御座候　明日は乍御苦勞又〻御一珍可被下候　拜稿

十一月十四日

## 日田博多屋へは飛脚便有之　（賀來棨二郎氏藏）

（三字缺）遠路御苦勞被下以御働熟談之儀不渉忝奉存候　先達而以壹人御樣子承度存罷在候處　御歸鄕の程も難計見合せ罷在候內　佐野より以レ使爲レ知來り尙又貴書桑名屋より相達縷々致承知候

一、輕少の到候得共二種致進上之候　小子安心無此上　當座御挨拶の印迄ニ御座候　春ニ相成候而ハ余り等閑の義と存候間　不取敢早々如斯候　事成就之上以二大年一も御挨拶可仕　此節ハ誠ニ草略の到ニ御座候　是上重疊宜敷奉願候

一、日田博多屋（博多屋とは日田町廣瀨家也）へハ此度飛脚便有之候ニ付　乍草々挨拶の狀差遣置候　鍋屋の方舊識の儀ニも無之　尙又此度取計の次第　賢兄面晤の上ニ無御座候而ハ草卒ニ難取計　博多屋鍋屋共々春ニ至り賢兄の思召をも承り　任二御指圖一度存候　尤博三への書中加筆ハ致置候

一、弊地の豆油一樽酒と被思召　御受納可被下候　酒ハ御地近來ハ名酒出來候由　任二御心安一右之通取計申候　失敬海涵

右御禮旁如斯御座候　万端期春陽候　恐惶謹言

十二月廿三日　　三浦主鈴

賀來泰安樣

尙〻御家內樣宜敷奉願候　已上

## 今朝ハ精神爽ニ　（賀來元吉氏藏）

昨夜は寒風御難澁被成候半と奉存候　然ニ病人昨夜より今朝迄小水快通　四度ニ壹升程通し有之是ハ黃龍湯ニ而通候やとも奉存候　大便ハ未通し不申　轉失氣も無御座候　小水能通候故乎　今朝は精神爽ニ言語も正敷　尤昨夜より囈語（讝語とあるも囈語と改めし）も透と相止　今朝迄一言も無御座候　今朝は自分ニ箸と椀ヲ持候而食事いたし候　食量ハ相替儀無御座候　渴少輕　能熟睡仕候　脉何となく平和ニ相成樣ニ御座候　何れ吉兆と奉存候　大便通しも無御座候　昨日の黃龍湯御投劑可被下候　頓首

十一月十四日

## 木綿二十反御世話被下　（賀來元吉氏藏）

拜呈　先日ハ長々御逗留　御世話被下忝奉存候　昨日ハ疾御歸着之由奉賀候　思召被寄　御齋に御香牛房一苞御惠被下忝靈前ニ相備申候　尙又木綿拾貳反御世話被下　是又御繁用之中忝奉存候

一、處々より　弔書被下候へとも　忌明之上返書可差出候

一、木綿代札六拾四匁三分八厘　此度差上候　御入掌可被下候　頓首

二月二日　　三浦主鈴

賀來泰安様



## 賀來三郎治宛

天地帙も來月中には　（賀來元吉氏藏）

久々絶音間候處　五月廿四日の貴墨落手　御無恙　猶御改名被成　彼是目出度奉存候　拙宅無事故　明日の迎秋可申候　御事多　此邊の來遊も難ㇾ被ㇾ成段　御尤折角幹蠱（幹父之蠱とて父の失敗を取返す事）之御勤事要奉存候　御手許も大分俗吏めかしく相見へ申候　世忰様安節とのにも宜敷申上候

一、草本皆生長　御樂奉察候　一通落手

一、身生帙　叔藏に御頼して　寫居申候得共　近來構典上巻等を大に改舊面目候　因而やめさせ申候　日外面談にて申候處の臟腑ハ　猶配當家之藩圍（範圍の當字？）を出不申事にて御座候　此節の本ニて先大槩は立らしと覺候　拜面ならでは難申盡候

一、家庭指南下り候而　此内諸生輩大勢初集一通講申候　本餘計無御座進不申候　追て餘計出來候上　進可申候　天地帙も來月中には雕巧畢可申樣申來候　來月雕成候ても　一通相改指上て其上にて發行致候へは　何れ年內一盃(パイ)ニは出來可申候

一、御歸國の後　杵城遺事と申をあみ申候　小冊子　杵藩之事を記し申候

一、當夏未曾有之凶饑世上大ニ物騷　秋稼見事に人心少々安し申候　御地同樣ニ奉存候　乍慮外御家兄樣ニ可然奉願候　恐惶謹言

六月廿九日　　三浦安定

賀來三郎治樣

＊宛名賀來三郎治とは草本生長御樂みなどとあるによつて、或は太庵の事かと思ふ。「家庭指南」は綾部絅齋の遺書。それを餘計に作つて進上しよう、天地帙も來月中に出來る、歸國後「杵城遺事」を作つたとある。「杵城遺事」は六十四五歲頃の作、して見れば太庵宛歟。次に、參考として賀來元吉氏藏、太庵筆の書簡を掲げる。

彌御無事珍重奉存候　然者江戶より　朝野北水と云天文家此方へ參居申候　星宿抔敎候事至而捷徑有之　十日之內ニハ星之名も悉覺申候　青森助五郎　天滿屋文吉抔も習申候　其外追々習ふ人多く御座候　先生へ御尋被成候而　先生より御指圖次第ニ而　稽古致宜敷と先生之仰候はゝ　彥一郎同道ニ而　十日斗歸可被下候　是も先生思召次第也　右草々申入候　已上

七月十六日　　太庵

宛名を缺くが、太庵の子佐一郎が或は梅園先生の許に從學してゐたのを、江戶から朝野北水といふ天文の先生が來たから先生が稽古してよろしいといふなら許を得て彥一郎と一緒に歸家せよとの手紙ではあるまいか。

## 鄙序御覆醬可被下（賀來元吉氏藏）

春來再御投書一々拜讀候　益御淸勝被成御座奉大賀候　不佞懶態依舊候　御勞念被下間敷候　然者御還家之節相認置候鄙序　此度淸書指上候　御覆醬（漢書に「吾恐後人用覆ニ醬瓿ニ」とあり、著書世に行はれず反古となり醬油瓶の覆となる義か）可被下候

一、此度御舍兄樣より　爲歲抄之御祝儀御取揃　被懸ニ貴意ニ　御厚情忝奉存候

一、當春丸屋ニ而　御〇被成候藥種代且　書物料之儀被仰下承知仕候　銀子御遣被成候樣ニ被仰下候へ共銀子ハ參不申候　幸便之節高田丸屋へ御遣可被下候　其節札拾五匁御取替申上候　是も

緒ニ丸屋ニ御出可被下候　藥種直段書附指上可申候へ共　通只今高田へ遣置相分り不申　後便指上可申候

一、大同類聚方一卷　是ハ愚弟（愚弟とは玄龜也）へ御賴置被成候由　此度相認指上候　表紙も掛候而指上候　是又落手可被下候

右縷々得貴意度如右御座候　恐惶謹言

十二月廿三日　三浦修令

賀來三郎治様

尙々春にも相成候は　些（チト）御出奉待候　其後御讀書御出精被成候哉　小子も　通鑑未相仕舞不申候　易ハ先達而讀かけ相仕舞　其後又々一遍相仕舞　只今又々三遍目讀かけ置候　已上

## 逗留中手本相認（賀來元吉氏藏）

奉讀　益御多福被成候由奉大賀候　僕未逗留候　小兒病症進退不定　今日者宜敷御座候　僕疝痛も少々宛宜敷相覺候　然者今日は　貴塾（貴塾とあれば賀來有軒宛歟）兩雛生豪惠來忝奉存候　鮮魚御惠被下拜受候　逗留中手本相認可申候　拙筆不勝忸怩候　他ハ期後音候　已上

六月四日　安貞

# 山崎甫庵宛

## 歳首御祝儀（日名子太郎氏藏）

尙々家内　御加筆被下忝存候○○可然御禮申述度申出候　御令閨様宜御通暢可被下候　已上

示墨薰誦　御萬福鶴算御加被成候由　奉遙祝候　蝸廬少長無恙加年仕候　爲歳首御祝儀三種御惠投被下千萬不淺祝納仕候　右奉答旁　御祝詞可申述如斯御座候　恐惶謹言

仲春初六日　三浦修齡

山崎甫庵様

## 渡邊小兵衛宛

おくめどの機嫌克滯留　（荒巻瑛次氏藏）

（切）罷過候間　御心安思召可被下候　然者おくめとの隨分機嫌克く　滯留被致候間　必御氣遣被成間敷候　其内御左右　彼是かね候　恐惶謹言

霜月八日　　三浦安貞

渡邊小兵衛様



## 廣瀬久兵衛宛

當領内村々騷立候趣　（武石繁待氏藏）

去ル四日之飛札拜見候　暖和之節御座候處彌御堅固珍重存候　然者村尾市藏殿より　貴様御呼出御内々に而　當領内村々何事ニ歟此節騷立候趣風聞有之候處　彌騷立候儀ニ而　若江戸表へ御達ニも相成候はゝ　御陣屋よりも御達可被成哉ニ付　當方より御達之有無　御内々爲御知申候之様御心得ニも相成候義ニ付　不角立候様　拙者共迄　貴様より御内々御聞合御座候様被申聞候間如何之様子ニ候哉御承知被成度　委細致承知候　然處右騷立候村方ハ當城下より四五里程相隔候海邊筋町家之者へ右隣村之百姓共　遺恨有之趣ニ而　夜中致亂妨候段相聞候ニ付　早速取鎭申付候處　無程打鎭　其後右村々へ急度示方申付　當時靜謐ニ相成候ニ付　公邊御達之儀相扣候旨家老共申聞候間　此段宜〇〇申達可被下　右御報可得御意如此候　恐惶謹言

三浦主齡
増田藤八
榎並庄八郎

四月八日

博多屋久兵衞様

右之通相認　四月十日　村尾様へ差出

### 鐵砲等取扱候儀有之候へハ（武石繁待氏藏）

以二飛脚一得二御意一候　梅雨之節愈御堅固珍重存候　然者先日以二書中一及懸合候當領内町家打崩一件之儀ニ付　内々以使屋　玉田氏迄御伺候處　別紙の通被仰下　委細致承知候　右一件未不致落着候儀有之　御地へ一人罷越候儀　及延引候

一、御陣屋御聞合之御別紙之内　御料所村々　私領出入候儀ニ候へは　多人数相集り候儀ハ勿論若又鐵炮等取扱候様之儀有之候得は尚更之儀ニ而　江戸表へ相達候程之儀ハお互ニ爲知合御座候御心得ノ趣ニ候段被仰下致承知候　然處先年豊前筋御料所　其外隣端右様之儀御座候節　何方よりも　爲知合之儀無御座此方此節之儀も　右之振合ニ相心得罷在候處　御別紙の趣ニ而ハ御互ニ爲知合御座候節之儀ト相聞申候　併右様之儀ハ時之振合ニ御座候儀と存候へ共　以來ハ右之趣相心得可申　いづれ追々同役之内一人罷越　委細貴殿可得御意　右之趣御内々御陣屋へ宜敷御執成可被下　如此御座候　恐惶謹言

五月廿一日

三浦主齡黄（花押）
増田藤八陳（花押）
榎並庄八郎守（花押）

博多屋三郎右衞門様

何分久兵衞殿御多出ニ付　貴様段〻御世話被下忝存候　久兵衞殿御歸之程難計　貴様御名前ニ相認申候　乍御面倒宜敷御願申上候

＊主齡以下三人共、杵築藩當年の郡奉行であつた。

### 久兵衞返事（武石繁待氏藏）

――參考として――

然者御領内町家打崩候一件先日被仰下候趣　御内々相伺及貴報候處　右一件未落着不仕義も御座候由ニ而　當方へ御一人様御越之儀延引之段委細承知仕候　早速此段申上候處　御越ニも及間敷且當表へ御送達無之候而も御差支ハ無之由ニ御座候　尤御料所入會之御場所ニ付　追々右躰之義

押移候而は不容易義　其筋ハ御差免之御取計も御座候哉ニ粗及承候得共　非常の御用筋ニ付私共

聢と相辨不申候　且被仰下候豐前筋之義ハ中津邊之趣　右ニつき御料所も一二ヶ村混雜候由　其

節ハ森日出邊へ懸合ニ相成候趣　其砌承知仕候へ共　聢といたし候義相分り不申候　右貴報申上

候　恐惶謹言

五月廿五日　　　　　　　　　　　　博多屋久兵衞

三浦主齡樣

增田藤八樣

榎並庄八郎樣

猶々豐前邊混亂之節御迯達無之ニ付右之趣ニ見へ申候得共　其時節模樣ニ寄可申旨被仰越候趣承

知仕候　右等之儀打明ヶ内伺も致兼候間相含　急度御咄申候處　御料所入會ニ候へは入押移ため

夫々被及御聞次第御料所御手當御座候趣ニ承知仕候　前文申上候通　不容易義ニ付　私共聢と相

伺兼申候　以上

*廣瀨淡窓の弟、廣瀨久兵衞南陔の書狀也。

さて此事件は文化十五年三月廿一日の事である。初め、來浦、手永の農民相集り、松明を燈し、谷筋を下る。村役人之に說諭を加ふるも聞入れず、遂に田染の町家（田染の町家を果して何軒打崩せしか不明なり）を打崩し、同月廿三日小原、手永、武藏谷農民、赤古市の町家を打崩したる官届出がある。そこで、來浦、小原の郡奉行增田藤八陳郷といふが、手永の代官や足輕を召連れ、興導寺村に出張した。

又安岐、手永の農民も集合してゐるといふので、それには郡奉行榎並庄八郎守珍が手永の代官足輕を召連れ、瀨戸田村及び湊に出張した。

抑ゝ其騷動の原因は實は町家が協議して米も油も占め買ひして小賣をせぬので、米油が大に騰貴し、農民一同が大に困難した結果の暴動であることが判明したから、杵築藩から米二百石油二十餘挺を買入れて、各手永村々へ割賦販賣させたので四月朔日になつて、鎭定したのである。

其翌文政二年正月十日、杵築藩儒臣三浦主齡黃鶴先生は歿したのである。主齡先生は明和元年生れ、享年五十六歲で歿したが當時は郡奉行も兼ね治績もあつた。實は藩主親賢の敎授役で儒臣としての貢獻も大であつたらう。

## お家どの宛

お類かへり度と申候（杵築、堀しづ氏藏）

尙々この内本家に酒をたのみ申候　代を忘れ申候　又のたよりに御申つかはし候へかしと存候
增右衞門どのへよろしく　猶又この頃のあいさつ　よきに申候　已上
此内は久々にて御かへり　ゆる〳〵御目もじ海山よろこばしくそんじまゐらせ候　おかへりの山
いと〳〵おかへりばんも　きけんも無之よし　うれ敷存上まゐらせ候　お類も杵築につゝがなく
つきしところ　只かへりたきとのみ申參り候　今日本家たよりにまかせ　あら〳〵申のへ候

已上

霜月十五日　あんてい

お家との上る



＊本書は杵築の長男黄鶴郎（本家とある）に在りて、夫人への書信らしい。夫人も杵築によんだので、ゆる〳〵お目もじとあり、歸りの途に危險もなかつてうれしいとある。お類が歸りたがるとの事、婦人文體で然も夫人に與へた書簡として尤も珍しく先生の人間味を露はした書簡である。

# 兩子善兵衞宛

## 內々申上候浪人の義（加來義市氏藏）

貴札拜見仕候。御平安殘暑御凌被成恐悅奉存候　然者小兒儀　每々御丁寧ニ御尋被下忝奉存候
一、內々得ト申上置候浪人之義　一昨日歟　一寸參候　兼而申候　彼方酒かぶ買取之事段々事六ヶ敷相成居申候　何レにも今暫御沙汰なしに被成置被下候由　拙者迄願申候　其故ハ此間の義變改と申には無御座候　當分殊外手つめの相談にて　無左候は其方定而　別に所存可有なと、申樣の事にて申分出來承候　時節之由ニ御座候　先彼仁候　大意申上候　紙をも病人難儀故　安節とくと承置候　其內可申上候　恐惶謹言

七月十六日　三浦安貞

兩子善兵衞樣



# 無宛名

## 西方寺流人（加來義市氏藏）

去年西方寺流人代吉　此手永にも可レ參や　私意見にて相談仕樣に御申　因而彼是相尋候得とも其節ハ右の存寄も無御座候處　近來何卒辨分へ參申度由　內分拙まて願申候　拙者申にも世間不案內之拙者候へハ　無覺束候得とも　兩子氏へも內分歟見可申候　人をすてさる御人に御座候へは　可成事にこそ御世話も可被成候　いつれ急ニハ相分り申間敷候　其內　御返答可申遣候由申候
一、此一件　先必々竹田津御兩人に御咄被下間敷候　子細當時寺川田宅酒場相添是非　此仁へ買候樣ニ御申取　難澁仕候而居申候趣に御座候　左候へハ當時此事おこり候ては　彼仁又々姦計とも　御兩人にも一先此義ハ御面談迄ハ御出言不被下候樣ニ奉願候　且此書面御覽後ハ　火中可被

下候　已上

即　日　　　　　　　　　　三　浦　安　貞



## 彫刻料加賀屋善藏へ御拂　（加來義市氏藏）

八月三日之貴書相達　忝致拜見候　秋冷相催御揃被成彌御安康御凌被成由　奉珍重候　然ハ加賀屋善藏よりの紙包ハ富來重太郎船へ御渡被下　慥ニ致落手候　扨又加賀屋彫刻料爲替手形而指上候　乍御面倒中之島綿屋淸八方ニ而右之銀子御請取被下　加賀屋善藏方へ御拂被下候樣奉願候　尙又跡彫刻之義無據故障有之　當分見合申度候　其段加賀屋書中にも申遣候へ共　御序之節御演說可被下候　先只今迄之刻料　此度爲替ニ而不殘拂相濟申候　每々御多用之中　申兼候得共　宜敷御願候　尙　春已來　每々の御懇書　自レ是ハ大ニ御無音　申譯も無ニ御座一候　御寬恕可被下候　先ハ右可得貴意如此御座候　恐惶謹言

九月十一日　　　　　　　三　浦　主　鈴

＊書中の加賀屋善藏方へ拂ふ彫刻料は、贅語刷費ではあるまいか。宛名を缺いてゐるので判然せぬが、爲替手形を中の島の綿屋で受取り仕拂ひ吳れとあり、後の彫刻は故障あり　當分見合せとある所から　贅語刊行に關することか。

## 敢語一部懸御目　（杵築、荒木氏藏）

敢語出板候得共　未十分相調不申候　京都より江戶にも　指上候樣に　兼々申候得共　大方未相發申間敷候　因而壹部此節　懸御目　御歸埜の御邪魔にも相成不申候はは　覆醬之御用に被召置候ても　不苦奉存候　百介樣にも指上申度奉存候得とも　折節本　下り合セ不申　但京都にも賴置候得は　從彼方指上候義も可レ有ニ御座一　兎園之冊（兎園の册とは俗語にて書ける卑近の著と卑下したるにや）進上仕候とは難ニ申上一候　御電矚之上は　御旅宿に御指置可被下候　頓首謹言

正月廿一日　　　　　　三　浦　安　貞

＊敢語の起稿は、寶曆十年、三十八歲で、四年を閱し、同十三年脫成とある。然し其上木は、安永二年五十三歲の十一月であるから、本書は、安永三年正月の書簡である。宛名を缺くので分らぬが、敬意を拂つた所から先輩かと思ふ。歸國の邪魔にならう、覆醬の用に立てば仕合、京都からも指上る筈であるが、兎園の册、呈上とは申されぬ。御電矚の上は旅宿に捨置いて苦しくないと、卑下されてゐる。

## 乍二無禮一雌黄相加　（高山通男氏藏）

無程碧雞報候者　毎物新ニ覺候　御平安御踰年可成奉賀候　拙老無異事　經二霜雪一迎二烟霞一候　且客冬念日之貴札昨夜落手　舊臘之起居悉レ之候　爲二御餽歲一黑頭公二十枝　御嘉貺文房之幽事相伴可レ申忝樂申候　御作造を宜敷承候　乍二無禮一雌黄相加候　是にても可レ然候者　其內御投被下度候　其已前之御狀　返書はとく指出候　誰家殷公喬者江ニ流し　御覽無二覺束一候　詩轍も冬中絕二消息一候　成就又一兩日ものべ候半と奉レ存候　拙詩稿も當年上木を心かけ候者有レ之候　大かたは左様ニ相成可申候　下しらべ共仕候　萬〻不レ能二腐毫一候　恐惶謹言

正月三日　　三浦安定

*本書東宛名なし。黑頭公は筆の別名也。



# 補遺

## 錠前寸法進上候　（杵築、荒木氏藏）

一、一件いつかか得二貴意一不申てハ〻難二申盡一候　先承置候

一、錠前寸法進上候　彼是御面倒と奉存候　乍二慮外一皆々様へ可レ然御願申上候　萬ハ期二來陽一候　恐惶謹言

極月廿八日　　三浦安貞

綾部要哲様

## 御歸國無レ程　（杵築、廣石氏藏）

此節寺川氏參府に付　呈二愚簡一候　良久絕音問候　皆〻様定而御安健御務可被成候　當地皆様御宿所御安全　隨而拙宅兩家（兩家とは黃鶴氏分家後?）無恙罷在候　御慮念被下間敷候　誠に當年も無レ

程五月末ニ押移候得は　御歸國之節も無程相成樂ミ罷在候　折角御剛健御歸國奉ㇾ待候
淺田善二郎子　委齋より何事も御聞可被下候　委齋へも申上〇〇御目に懸り候上申度と申事の〇
御座候〇〇　書面に書の〇候事〇〇相洩し〇〇〇〇〇妻安節も宜敷申上候　恐惶謹言

五月十八日　　三浦安貞

## 御寫取の贅語暫御かし被下度（佐野秀子氏藏）

先頃者　途中迄御送被下忝奉存候　菅野ニ而日沈　夫より伴月還候　逗留之内御心遣奉感荷候
如何御病魔候や　折角御保重可被成候　然ニ鶴崎郡代より拙著書見度樣ニ申來候得とも　何そ有
合不申候　御寫取之贅語　天地之部　暫御かし被下候義者相成申間敷哉　此節素貞罷歸候付　御
拜借　門ニ御尋申候樣申候　尤池子玉御請可申候間　間違ハ御座有間敷候　猶又申上候　拙答多
賀黑吉書　貴君には進置不申候や御尋申上候　老心朦朧　任㆓御心安㆒御尋申上候　若左樣にて無
御座候とも老脫之所致と御免可被下候　猶皆樣へ可然奉願候　恐懼謹言

九月十四日　　三浦安貞晋

佐野玄還樣

*玄還子への手紙に屢ゝ「留滯中御懇意忝」とある。外出稀なる先生も杵築玄還子邸には折々歡待され逗留したらしい。

## 遠路敝藩迄御尋問（大分、小野澄氏藏）

先頃者遠路敝藩迄御尋問　始而接高範　猶珍話共承之　慰㆓宿望㆒大慶不過之奉存候　別來愈御清
福御座可被成奉賀候　拙も漸二十二日歸山　依舊而臥白雲候　如何其日とく御歸宅被成候哉承度
候　先御禮旁得貴意度如此候　心緒渾而屬後鴻候　恐惶謹言

二月廿八日　　三浦安貞再拜

小野昌庵樣　玉几下

## 卯作生歸省定て對話（小野澄氏藏）

長跪讀來書　字々懇々　伏荷厚意　時下雖㆓風霜之候㆒丹寵下御清寧　唱㆓南山之壽㆒野老煮芹日々
望㆓江南㆒而已に候　卯作生歸省　定而御對話敝境之事も可㆓傍御耳㆒候　詩轍繕寫にかゝり兀々申
逼春候　歸鴻も年內者繫書問敷候　御自嗇可被爲迎㆓陽春㆒候　恐惶謹言

極月幾望　　三浦安貞再拜

小野昌庵様　奉復

＊詩集安永九年の部に「藤卯作吹笛」七絶、天明五年の部にも「送藤卯作」五律、同年の部に「別二藤卯作一」七絶等がある。「君吹横笛我吹レ笙　相送西樓風月淸」とあるから、卯作の吹笛に巧である事も分るが、書中に卯作歸省定めて御對話とあるから府内のものであらう。劣弟とは妹婿安節である。此簡は詩轍上木の天明六年の前年であることがわかる。

## 禹餘糧一顆被贈　（小野澄氏藏）

本月廿一日之華簡捧讀　時下霜露肅候へ共　貴體御確然奉レ唱二南山一候　拙老蝸涎自濡候　御安意可被下候　然者兼而御噂申候禹餘糧一顆被レ懸二貴意一忝玩弄仕候　猶堅殼之一種も御座候由不レ堪二望蜀之意一候　一噓　且敢語進呈　高慮にも强而齟齬も不仕由大慶奉存候

一、御佳篇數章忝今晒景落手　直返書相認候故未得熟覽候　○政可申上候　先得握璧大悅仕候

近來チョコ〳〵之物懸二御目一度物も御座候へと　老懶筆無狀　卯作生來遊之時待申候　先早々御禮而已如此候　恐惶謹言

十月廿六日　三浦安貞　再拜

小野昌庵様

＊本書簡は昌庵から禹餘糧といふ化石を贈られた禮狀だが、辭源を見ると、禹王が戰に勝つて餘糧を棄てたのが化して



石になつたとある。

さて小野家は代々府内の藩醫で、其祖の宗圓といふ人は松平忠直父子の病を治療したと言はれ、代々昌庵といつてゐたやうである。

昌庵との交遊に就ては、書簡の外に、『詩集』天明二年の部に「贈野昌庵」一絶があり、寛政元年の部に「野君昌庵萱堂八十壽詞」の七絶もあり、交情こまやかであつた事がわかる。

## 書物料慥に落手　（大分、伊藤氏藏）

新霽稍得秋涼候　御渾家御多福奉賀候　今日源吉生御出　此內は御宿食之由　不レ承罷過候も　先早速御全癒　御逗留中緩々可二申承一候　且書物料御遣被レ成慥に落手　追て書肆へ相屆可レ申　荒々御答申伸候　恐懼頓首

八月十日　三浦安貞

## 詩轍御加文の旨　（辛島詢二氏藏）

一書附二歸鴻一候　華鳥之時節御吟興奉存候　野老無二事故一致レ送二迎烏兎一候

一、御詩稿拜見　此節之詩卷ハ大分新意を覺悅申候　折角御出精　此上ハそろ〳〵御讀書被成

其上之功を以て被成候上ハ進二一歩一候事ニ御座候　此節委曲子玉生ニ申入候

一、詩轍御加文被レ成候旨　御文數回及二展讀一候　序喬文學草盧ニ賴申候　跋文未相決不レ申候　門下少　屬文者　相成候バ　弓柳之二子ニ而御座候　惣中相談次第ニ相成可申　拙一存ニ難レ決候　惣中柳生ヲ推候へとも　柳生達而辭退申候　弓生ハ倘時不レ慥　當地ニも參得不レ申候へは難レ申候　惣中何れ柳生を推申候　足下之御文意いつれ　小文之御仕立ニ相ミへ申候　畢竟寫工ニ記し取候樣ニ相みへ申候　詩轍尾ニ附言被成候方可レ然存候　此節点檢御返し可レ申候へ共　思召之通ニ意ヲ換ズニ　被成度樣にも　御紙面相見へ申候　乍レ去筆削ちと不相加候而は　如何ニ御座候　思召之處得と承候上ハ　愚存御心ニ相叶候へハ　取計らひ可レ申候　因而此節指扣申候　若右文ニ御望も御座候は　子細附二子玉生一　口頭ニ御聞可被下候

一、修令も當時中津へ致二遊學一候　來月末罷歸可申候　任二御心安一　御沙汰申候　恐懼謹言

二月廿八日　　三浦安貞晋

池邊橘左衞門樣　（子昌と稱した鶴崎の人乎）

＊子玉は鶴崎の人、先生より年二十五も若く、天明五年三十八歲で歿したが、秘藏の弟子であつた。

詩轍は門人に詩學の軌轍を授くべく作つたものだが、水戶の人草盧龍公美といふが、天明四年に叙を書き、それより前、天明元年に日出の文學喬維嶽といふが序を書いてゐる。此書簡には「序は喬文學及び草盧に賴んだが跋は未だ決せぬ、門人に文士がゐない、柳大醇、弓崎伴平の二人があるが、私一存では決し難い、皆柳生を推す、然し柳生は固辭するし、弓崎はいつ來るとも分らぬ。足下の文意は小文の仕立であるから、詩轍の末尾に附してはと思ふ、子細は子玉生が申上る」とあるが、池邊子昌の跋などはないので削つたものと見ゆる。そして自ら天明六年六十三歲の時跋を書き、翌年上梓したことになつてゐる。

### 自二拙者一申入呉候樣　（松本義一氏藏）

彌御無變　溽雨御凌可レ被レ成奉レ賀候　然者伊左衞門久敷難氣ニ候段　相勝不レ申　懸二御目一度段自二拙者一申入呉候樣ニ賴來候　委曲自レ使可二申入一候　一應御覽被下候樣にと願申候　以上

五月廿六日　　三浦安貞

綾要哲樣

### 急に御見廻難申　（松本義一氏藏）

御手敎拜見　御微恙先御同邊水氣も減不レ申趣　扨々込(コマ)り申候御事に御座候　猶又御藥相考調合仕候　以前之通り用御覽可レ被レ成候　何卒今一應罷出相伺候樣　被二仰下一御尤奉レ存候　然處拙ども　臥候樣成事にては無御座候得共　少々中暑之氣味　腹部和し不レ申　急に御見廻(ミマヒ)も難レ申候

兎角遠方之義　始終者御療治も　御近ク無ニ御座レ候而者如何と奉レ存候　必御病症ニ就候而申上候には無御座候　今日及レ暮候間早々如此御座候　頓首謹言

六月廿三日　　三浦安貞

冬木屋治右衛門様



## 折角滅性無之様（松本義一氏藏）

折角　紙遣切（ツカヒキレ）候故　以ニ麁紙レ申上候段　御免可被下候　御喪中折角御滅性無レ之様　御凌可レ被レ成候　來月以レ參萬々可申上　御内様へ可レ然奉願候　已上

九月十八日　　安貞

惟策様（策、或は茂？）

## 遍阿の詠草見集めて（秋永鼎三氏藏）

一札拜見　甚暑愈御平安被成御座　大慶奉存候　弊方無異儀罷在候　御安慮可被下候

一、在豊記拙者方へ者原稿有之候間　御返却不被成候而も不苦候　可被任貴慮候

一、遍阿師御歌御書付被下忝追感仕候

一、墓所も荒候段左も御座致ましく候へ共　體面秋も催レ哀一入と日見と奉存候　何とぞ八月頃ハ涼風も起り候半　墓所をも弔申度心懸罷在候　左も御座候はゝ　其節積る心事可申上候　乍去世事悠々事難計　必御待被下間敷候

一、追悼御集被成候由御尤奉存候　月窓和尚御作拜見仕度候　拙者も御同前ニ讀兼申候

待かねてうらみしほとになくさみつ
　わかれてのちを何と過さむ

其外遍阿師御詠草見集候て可懸御目候　所詮御集被下候はゝ　あなかち多少にもより不申儀かと奉存候　取捨よろしきに御隨被成候　猶又事により御相談ニも及可申候

一、因事通書等高野ニ御送り被成候由御尤奉存候　如何高野よりも到來無御座候哉

一、碧岩集田染安養寺より御借被成候儀　拙者よく拜居申候　六祖經しかと拜不申候　是も多分ハ安養寺本かと奉存候　田染へ御便少く御座候はゝ此方よりも取次可申候

一、不動尊如何樣被成候も拙者好無御座候

一、田方少ミ痛申候由　甚敷ハ無御座候へとも　此方も左樣ニて御座候

一、日外之使臘石返呈仕候　如何御落手被成候哉

一、童蒙筌懸ニ御目レ候　是ハ未草稿ニて御座候間　議論引用相謬り候はん　御推量にて御覽御他

見者御用捨可被下候　權八殿ハ兼而御心安存候ヘバ　御望ニ御座候はヽ御覽も苦間布候

一、最早秋之節ニも罷成候へとも　溽熱ハ一入手强扨々凌兼申候　如何與御催被成候哉　御詠草も御座候哉　懷敷奉存候

一、言論今以相濟不申候故　貴邊迄も進不レ申候

一、愚親よりも宜布申上候樣申付候　心事如レ雲先筆を置申候餘ハ後音　恐惶謹言

六月廿四日　　三　浦　安　貞　晋　拜

脇五兵衞樣梧右

＊書簡中の遍阿といふ僧は、高野山から來て双子山に長く居たが、頗る修養の出來た僧で先生も就いて書を學んだとある。先生より四五歲の年長であつた。先生は大石主稅の逝去したのであらうと一時疑つてゐた。それは赤穗義士の話が出ると紅淚潸然緇衣の袖を濡したからであるといつてゐる。此遍阿といふ人、威儀の正しい人であつたと見え、先生も五十年來、こんな端嚴の人を見た事がない、詩歌もたしなんでゐたが、其佛道を說く中々凡僧でなかつた。それで書道を問うた丈でない、修養上幾多得る所があつたと見ゆる。寶曆四年卅九で小浦の風月庵で入寂したとある。（愉婉錄）

其遍阿の歌を脇氏が書いて先生に見せたとあるが、脇氏が其詠草を上梓しようと先生に相談したものと見ゆる。それで見集めて送らう、あながち多少によらぬ、取捨よろしき樣との文面である。

宛名の脇五兵衞とは愚山先生のやうに見ゆるが、愚山先生にはそんな名はない。脇とあるから同族のかたであらう。先生の門人には違ひない。臘石を送つたり、童蒙筌を貸したりした處から見れば、弟子の愚山先生らしくもある。

# 人間三浦梅園